平成３０年３月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１５日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴した福岡発地域ドラマ「Ｙｏｕ　Ｍａｙ　Ｄｒｅａｍ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、4月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	明石　良	（宮崎大学　副学長）
副委員長	山口　成美	（（有）シュシュ　代表取締役）
委　員	秋本　順子	（金属造形作家）
	大鋸　あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン（株）取締役放送部長）
	籠田　淳子	（（有）ゼムケンサービス代表取締役）
	田川　大介	（（株）西日本新聞社編集局総務）
	富田　めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
	長﨑　健一	（（株）長崎書店　代表取締役社長）
	森　重隆	（九州ラグビーフットボール協会　会長）

（主な発言）

＜福岡発地域ドラマ

「Ｙｏｕ　Ｍａｙ　Ｄｒｅａｍ」

（３月２日（金）総合 後7：30～8：43　福岡局制作）について＞

○　これまでに２つ地域発ドラマを見たことがあるが、それらは比較的コメディータッチで、全体的に和やかな調子だった。しかし、今回は「夢」をキーワードとして、実話を元にしっかり練り上げられた見応えあるドラマだった。

シーナ＆ロケッツについて、自分は年代的にも残念ながらリアルタイムで聞いたことはなく、バンド名を何となく知っているだけだったが、ドラマを通してバンドそのものや前身のサンハウスについて知ることができ、大変興味深かった。

キャスティングがよかったと感じた。脚本家や出演者の多くが福岡県出身で、劇中の福岡弁のやりとりが自然で、ドラマに没入しやすかった。特に松重豊さんの演技が印象的で、シーナさんが学生時代、家出から帰ってきた場面では、父親として

大変威厳ある演技で緊張感をもたらしていた。そして番組終盤では東京へ行くことを迷うシーナさんに向けて「夢を見てきたらいい」と声をかけており、様々な演技が生み出すギャップに非常に感銘を受けた。主演の石橋静河さんは冒頭やラストの場面のライブパフォーマンスがとても印象的だった。今回のドラマで初めて存在を知ったが、海外留学などの経験もあり、今後が楽しみな女優だと思った。

方言で「しゃあしい」という言葉が使われていた。ドラマという作品性を考えると細かいテロップなどを出すのは適切ではないかもしれないが、何となくニュアンスはわかるものの、自分の住んでいる地域では聞かない言葉だし、他の九州・沖縄の県でもそのような方が多いと思う。結婚式の場面でも、太鼓の演奏で祝福していたが、恐らく地域で長く続く伝統芸能だと思う。そういった部分の説明があるとわかりやすかった

また、ファッションや小道具が当時の福岡をうまく再現し、かなり詳細に作り込まれていると感心した。今までの地域発ドラマと違い、地域の名物や名所を紹介することもなく、あくまでストーリーの中で福岡や北九州の場所や風景がうまく取り入れられていて、大変好感を持った。謄写版を使ったフリーペーパーも、当時の様子を体感することができたし、鮎川誠さんたちの音楽への強い夢と志や熱が伝わってくる場面だった。サンハウスの演奏の場面もドラマのリアリティーを高めており楽しめた。ただ、サンハウスが活動休止になったくだりが自分にはわかりにくく、メンバー間でのやりとりなどを具体的に描写したらよりよかった。

○　このドラマの舞台となる時代を実際に生きていた身として、その時代がどのように描かれるのか、また実際に番組を制作する人たちがどのようにその時代を捉えているのかとても興味を持って見ることができた。シーナさんの両親が、一人娘のロックへの情熱や、それを取り巻く若い年代層をあれほどまでに理解していることに少し疑問を持った。一方で、音楽番組というよりも、夢を持って生きていくシーナさんや鮎川さんを取り巻く、愛情に満ちた家族の愛や優しさが表れている番組だとも思った。

２月２８日(水)の「ごごラジ！」で石橋さんの実際の歌を聞き、会場にいた人たちをまとめていくロックの強さをラジオを通して感じた。一方で、今回のドラマの中で石橋さんが歌う場面では、演技をしている姿を目で見ることで、実在した方を再現することの難しさも感じた。

○　今まで見た番組の中で、一番意見することが難しい番組だと思いながら見た。シーナ＆ロケッツのファンや、地元の人には垂涎のドラマだったかもしれないが、あまりシーナ＆ロケッツのことを知らず、ロックの音楽にも精通していなかったため、１５分ほどで気が散ってしまった。しかし、キャストの方言や演技はすばらしく、

太鼓で結婚式を祝う場面では自然と涙が出た。特に説明がなくても、それが伝統的芸能であることが理解できた。

今回初めてシーナ＆ロケッツの歌を聞き、改めて原曲も聞き直した。シーナ＆ロケッツを知らない世代にも存在を知ってもらえるドラマになっていたし、音楽が世代を超えてつながっていくことを感じた。

○　北九州で生まれ育った自分としては、一つ一つの場面になじみがあり、当時の空気感が再現されていたため非常に懐かしさを感じた。

シーナさんたちが周囲の反対や、新しいことに挑戦する怖さを振り切って、自分のやりたいことをやり抜く姿勢に感動した。何かを突き抜けていくような行動は、現代の日本においても大切なのではないかと思った。

若い世代が主な登場人物だったため、まだ学生である子どもにも見せようとしたが、あまり乗り気にはなってくれなかった。やはりターゲットはシーナ＆ロケッツを知っている世代の人たちで、子どものときに夢見た情熱や、親に反対を受けても行動を起こす反骨精神のようなものを思い出させ、今度は自分たちが子どもを応援する番がきたことを気づかせる番組であるとも思った。

ドラマの主役は、もちろんシーナさんと鮎川誠さんだと思うが、自分の立場と相まって、シーナさんの両親役に目が行った。シーナさんの父親役としては、北九州で育ったことを踏まえ、もっと威厳ある演技がほしかった。また、シーナさんの母親に関しても、優しさや料理を作ること以外の魅力があるはずだと感じた。また、番組で何度か若松と戸畑をつなぐ若戸大橋が登場するが、実際、周辺の町には独特な雰囲気があり、住人にも個性がある。両親についてと、若戸大橋周辺の独特な風土で暮らす雰囲気を広げていれば、よりなじみやすいドラマになったと思う

○　事前の関連番組なども見損ねてしまったため、何の先入観も持たず、一体何のドラマだろうかと思いながら見た。

シーナ＆ロケッツを知っている方にとっては、シーナさんの生涯をたどるドラマで、非常に興味深かったと思う。また、若松や福岡在住の人も、昔の街の様子や音楽を中心に、福岡の街、若松の商店街に思いをはせ、一定の年齢より上の方は懐かしさを持って見られたのかなと思った。

一方で、自分のように、何の事前の関心もなく見た一般の人にとっては、一体何をこのドラマで伝えようとしたのかが最後までわからなかった。「みんな、夢を持ってね」というシーナさんのセリフから始まり、番組終盤でも同じセリフが出てきて、これがメッセージであることがわかったが、そこに共感できる内容だったかは疑問が残る。さまざまな困難の中で夢をつかみ取っていった少女、女性のドラマだと思うが、その生き方の深みがなかなか伝わってこなかったのが残念だった。

番組の時間は限られていると思うが、テンポが速く、さらりとしているイメージがあり、話ができ過ぎているというのが率直な気持ちだ。シーナさんの父親が娘の家出に対してすぐに理解を示したり、シーナさんの妊娠が発覚しすぐに結婚式の話をしていた場面は、思わず笑ってしまったほど流れがスムーズだと感じた。

○　自分よりは少し上の世代の物語だったが、沖縄も基地の周辺でロックが栄えた場所でもあるため、作品としてとても楽しめたドラマだった。キャスティングがすばらしく、主役だけではなく、出演者の皆さんがはまり役で、これだけ全員が適役になることも珍しい、いい役者ばかりだと、ほれぼれ見た。

美術や衣裳なども自分の知らない時代の空気感をまとっていた。狭い下宿やレトロな衣装も、あの時代のティーンエージャーが少し背伸びしておしゃれをした部分がうまく表現されていた。謄写版なども自然で違和感がなく、時代の空気感を描いておりすばらしいと思った。

地域発ドラマにはその土地名物の食べ物や伝統芸能が取ってつけたように出てくると思っていたが、結婚式の場面の太鼓の場面は本当に感動的で、ストーリーの中に違和感なく溶け込んでいた。

全体的に、主役の２人だけではなく、その時代や地域が表現されていて、強いメッセージを伝えるというよりも、見た人それぞれに受けとめ方があるのではないかと思った。

一点だけ、テロップの扱いに疑問が残った。ニュースやドキュメンタリーは情報を伝えるためにテロップを使うことは有効だと思うが、ブルース講座の場面で、時代背景を説明するためのテロップが出てきて唐突に感じた。それまでドラマの世界に浸って気持ちよく見ていたが、急に現実の世界に引き戻されたような感じがした。しかも、テロップの内容は映像で表現できていることだったため、なおさら入れたことに疑問が残った。エンディングも、今回のドラマの写真と、実際のシーナ＆ロケッツの写真を交えていてとてもよいと思っていたが、そこでもテロップが長文で何度も流れ、ドラマの最後、余韻に浸りたいと思ったが、ふと冷めてしまった。ドラマの世界自体は非常に豊かに表現されていたので、過剰に説明や情報を詰め込まなくてもよかったと思う。

それ以外の部分は本当にすばらしく、シーナ＆ロケッツだけではなくて、ビートルズなど、登場した曲を、もう一回聞いてみたいと思ったよいドラマだった。

○　シーナ＆ロケッツの音楽を初めて聞いた。番組の途中では何を伝えたいのかわからず、少し疲れてしまったが、最後まで見ると、このドラマのメッセージが伝わってきた。

当時、子どもが音楽で生活するために家を飛び出していったら、許す親なんてい

ないというイメージでいた。しかし、シーナさんの父親は頑固に見えながらも娘を理解し応援する心があった。だからこそ、娘が親に反対されても自分の夢を追うことに対する家族の理解や、親の気持ちをもっと表現してもらいたかった。

地域発ドラマなので福岡での様子が主体になるのは当然のことだが、幼い双子を残して東京で活動していた時代も、もう少し触れてほしかった。

ドラマの最初と最後の場面で、シーナさんの「みんな、夢を持ってね」というセリフがあったが、今後、それぞれの夢を持って活躍する人々に向けて、もう少しメッセージ性のある場面にしてもよかった。

キャスティングも最高だったし、当時のロックに関心がある人やシーナ＆ロケッツのファンからすると、永久保存版にしたいと思わせる、非常によい番組だった。

○　ドラマを見たことで、昔のことを思い出した。一定の年齢層にとっては、自分の生きてきた時代を振り返ることができてよかったと思う。

自分もキャスティングがよかったと感じた。特に松重さんの演技が味があってよかった。

「鮎川誠さんのドラマがある」ということをＮＨＫ以外の人からも聞いていたが、ドラマ冒頭部分が、ロックバンドの演奏だったため、ある程度年齢が上の人たちはチャンネルを変えてしまったのではないかと思った。

○　個人的にシーナ＆ロケッツのファンであり、非常に期待していた。シーナ＆ロケッツの歩みの中の、どの時代を中心に描くのかと思っていたが、結果的に余りにも物語をきれいに描きすぎではないかと思った。サクセスストーリーのみを展開している印象で、本来のシーナ＆ロケッツではないと感じた。当時の場面に対し懐かしさを感じる人も多いと思うが、あくまでもそれは時代の背景を描いているのだと思う。構成として、シーナさんの半生を追うよりも、シーナさんと鮎川さんの独特なファッションやバンドのスタイルがどのようにして生まれたのかを見たかった。

キャスティングはとてもよかった。石橋さんの歌も上手だった。しかし、話している方言が、福岡の中でも数ある方言を全て混ぜたような方言になってしまっており、そこが気になった。

（ＮＨＫ側）

ドラマ内で使われていた方言は、シーナ＆ロケッツが話していた、まさに「鮎川弁」というものだ。

○　それは筑豊弁ではないのか。

（ＮＨＫ側）

鮎川さん本人とも話し合ったが、鮎川さんはかなりさまざまな福岡の方言が混ざっている。せりふについてはその場に応じ、本人に読んでもらったりした。撮影中、北九州地域と久留米地域、そして福岡市地域の３人の方言指導者に同行してもらっていたが、どこかで「鮎川弁」に変わってしまうところはあった。

○　音楽好きとしては、当時の福岡の音楽をもっと詰め込み、もっと徹底的な音楽番組も見てみたいと思った。今回のドラマは、番組としてはとても楽しませてもらった。

○　撮影裏話の番組を見ていたので、物語はすんなり見ることができた。サンハウス時代からのファンにはたまらなく懐かしい番組だったと思う。まさしく地域発ドラマの真骨頂、かつシーナさんの追悼番組になっていた。

ただ、物語があまりにもきれいかつ無難に仕上がっているとも思った。博多を中心に活躍していたサンハウスの解散から、シーナ＆ロケッツ結成時の苦悩、幼い双子の子どもを残して東京で活動した時などの葛藤はもっとあったはずで、そういった泥臭い場面も描いてほしかった。

（ＮＨＫ側）

制作期間中、自分たちがずっと悩んできたところを、痛いほど突かれたという感じがしている。福岡の音楽場面をもっといろいろ描きたい気持ちもあった。最初は、そのように進める予定だったし、シーナ＆ロケッツが誕生した理由などを題材にしたいと思っていたが、予算やスケジュールの関係もあり断念した。

本当に嬉しかったのは、「福岡」にこだわった部分を皆さんから評価してもらえたことだが、サンハウスが解散した経緯やシーナさんの父親の思いなど、掘れば掘るほど深い部分はたくさんあり、そこを描ききれなかったのは、自分たちの力不足だと痛感している。見てもらう方全員に納得してもらう作品を作ることは本当に難しいと思いつつも、今回はなるべく多くの人に、家族の支えの大切さを感じてほしいと思い、そこが最終的に自分たちが納得したポイントでもあった。ただ、それをテーマにしたがゆえに、シーナ＆ロケッツを描くことを徹底できなかったことは、否めないと思っている。

テロップの件についても、本当は入れたくない部分もあったが、

客観的に見ると、何の場面だったかと指摘されることもあり、試行錯誤を繰り返した中で入れる判断をした。結果的にその場面を見ればわかるようなことを言っているテロップになってしまったことも力不足だった。

この経験を糧に、ディレクター陣ともう一度話し合い、どういった形の地域ドラマが必要とされ、受け入れられていくのかをもう一度考えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　２月２４日(土)ピョンチャンオリンピック　カーリング女子・３位決定戦「日本×イギリス」(中継)（総合 後 7:30～11:07)は実況がすばらしかった。カーリングのルールをあまり知らなかったが、実況アナウンサーが、わかりにくいルールを解説しながら、次の一投の投げ方、ストーンの狙い方などを説明し、適宜解説者にも問いかけていて大変わかりやすかった。通常、テレビを見ているときにわからない言葉が出てくると、スマートフォンなどで調べながら視聴することが多い。しかし、今回はアナウンサーのテレビを見ている人を十分意識した、過不足ないすばらしい実況のおかげで、テレビだけを集中して見ることができた。３位を勝ち取った感動的な瞬間を実感でき本当によかった。

○　ピョンチャンオリンピック　カーリング女子・３位決定戦「日本×イギリス」（中継）が印象に残っている。選手どうしの会話をここまでオープンに中継しているのは初めて見たが、非常に面白かった。羽生結弦選手が金メダルを取った後のインタビューもとても記憶に残った。オリンピックはさまざまなことを私たちに伝えてくれると感じた。

○　一連のピョンチャンオリンピック関連の放送を楽しく見た。競技の知識の有無に関わらず、アナウンサーや解説によって番組の楽しさが変わることを実感した。

特にカーリング中継が印象に残った。競技を知らない人の目線で解説されていて大変わかりやすかった。また、カーリング女子日本代表の試合の際、試合状況がよくない場面でも、彼女たちが底抜けにポジティブで、諦めない姿勢を持っていることを、選手一人ずつについていたマイクを通して視聴者側も知ることができた。銅メダルにつながった選手の心の動きや、試合中の考え方などがわかり大変興味深かった。注目されていた試合の休憩時間は、一度フィギュアスケートの羽生選手のインタビューと重なり、中継が途切れてしまったことがあった。楽しく見ていたため残念だと思っていたら、その後すぐにＮＨＫのツイッターやオリンピック専用サ

イトで動画がアップされていた。全ての視聴者の要求に応えることはもちろんできないと思うが、ネットというツールを駆使して視聴者の声に応えようとする姿勢が優しいと感じた。

トリノオリンピック開催期間に海外に留学しており、日本からのオリンピック中継を見ることができなかったが、ＮＨＫの国際放送で日本人選手の活躍を伝える番組を見ることができとてもありがたかったが、静止画が多い印象だった。海外にいる日本人にとっても、日本人選手のオリンピックでの活躍は励みになるし、そこから大きな勇気をもらえると思う。今回のオリンピックの映像はどのように国際的に展開されていたのか。東京オリンピックも近づいてきたので、今後のテレビ国際放送の充実にも期待したいと思う。

（ＮＨＫ側）

オリンピックの映像については決まりが多く、放送できるものに限りがある。テレビ国際放送も同じで、権利の範囲の中でできる限りの放送をしていきたい。

○　２月２６日(月)ＮＨＫスペシャル「金メダルへの道　逆境を乗り越えて」　を見た。２月７日(水)のＮＨＫスペシャル「金メダルへの道　連覇への苦悶」を見ていただけに、今回の感動は増した。

密着取材でしか成しえない羽生結弦選手の心の葛藤が映像を通しても良くわかり、これまで積み上げた練習や、技術を鍛え上げてきた過程も良くわかる番組になっていた。フリー演技終了後、羽生選手のつぶやきや呼吸が聞こえ鳥肌の立つ思いをし、カメラ技術・音声技術の素晴らしさを改めて痛感した。この映像が８Ｋで見られるともっと臨場感あふれる映像になるのだろう。また、この時間帯に編成されたことで、これから時代を担う若者たちも見ることができたと思う。

スピードスケートやカーリングなど、今回のオリンピックは女性の活躍がめざましかった。密着取材によってメダル獲得までの過程や競技の魅力を知り、選手をより身近に応援できたことが素晴らしかった。

○　３月１０日(土)「津波ピアノ～坂本龍一と東北の７年～」(総合 後 11:25～11:58)は、震災以降、東北でさまざまな活動、そして発言をされている坂本龍一さんと、津波で被害を受けたピアノの二つの物語ということで、とても期待して見た。

題材は第一級だと思ったが、番組としては少し期待外れだった。農業高校のピアノ復元を提案したのが坂本さんかＮＨＫかはわからないが、非常にいい話だと思う。しかし、坂本さん自身が持つ思想や発言などをうまく表現することができなかったのではないかと感じた。また、がんの闘病経験など様々な人生経験を持ち、世界の

地震の揺れをピアノで表現している坂本さんの良さもっと引き出してほしかった。復活したピアノを元にした東北復興の物語を、もう少し踏み込んで描いて欲しかった。

○　３月１２日(月) プロフェッショナル仕事の流儀「どんな時も、そばにいる～地域医療医師・長純一～」を見た。東日本大震災から７年経った現在も石巻に住み医療に従事していることに非常に感銘を受けた。長先生の「どんなときも、そばにいる」という言葉が、医師として大変かっこよかった。ぜひ本人と会ってみたいと思った。

○　国会中継をする条件はＮＨＫの中で定められていると思うが、国民の関心の高い重要案件を扱うような委員会はぜひ編成してほしい。

○　２月１１日(日)ねこねこ５５「ヒゲの巻」(Ｅテレ 後4:50～5:00)を見た。自分自身がかなりの猫好きで、それだけに厳しい目線で見た。映像や音楽、アニメーションなど、とにかく番組全てが緩くよい雰囲気で、とても１０分とは思えない充実感にあふれていた。中でも「キャットニュース５５」というコーナーでは、猫に関する歴史を伝えており、緩い雰囲気の番組でありながらも興味深い内容となっていておもしろかった。「平井さんと猫」というコーナーは制作した人の感性が素晴らしいと思える内容で、ＮＨＫならではだと思った。ぜひまた放送をしてほしい。

○　「グレーテルのかまど」は今までも何回か見ていたが、３月５日(月)「愛をとどけるミモザのケーキ」を見て初めて、取り上げているお菓子に毎回意味があることを知った。放送３日後の３月８日が、国際連合が定めた「ミモザの日(国際女性デー)」であり、レシピのほかにケーキができた由来など、歴史も詳しく伝えていた。出演している瀬戸康史さんと声で出演しているキムラ緑子さんのやりとりも、台本があるとは思えないほど自然で、ほっとする時間を過ごすことができた。毎回お菓子とその時代背景が取り上げられていて面白く、見る習慣がついた。

○　３月１０日(土)ウワサの保護者会「熊本家族のお悩みに答えるばい！！」を見た。ここ１、２年で、視聴者ニーズの高い番組を、熊本で収録してもらえることが増え、一県民として非常にうれしい。

通常はスタジオで収録し、出演者によっては顔を出さない人もいるが、今回は顔を隠している方は一切おらず、実際に親と子どもが壇上で話をするという新しいスタイルだった。

親が子どもに対して思っていることをストレートに言っており、顔も出ていて個人が特定できる中、少し子どもがかわいそうかなと思う場面もあった。しかし、Ｎ

ＨＫが子どもが課外活動に一生懸命取り組んでいる様子を取材し、親がふだん見ていない子どもの一面を丁寧に紹介していたことで親も新しい発見をしていた。親子だからといって、コミュニケーションがしっかりとれているわけじゃないという、親子間のいい面とよくない面、両方を示唆してくれるような有意義な内容だった。

○　３月１４日(水)オイコノミア「どうなる？日本のサービス」を見た。日本のサービス業は生産性が低いということを、具体例を挙げながら解説しており理解しやすかった。多様化しているサービス業界の現状をわかりやすくまとめてあった。海外からの労働者の雇用や、農産物の流通を紹介している部分では、それらに勝るような日本の産業を育成していくべきだと感じた。また、今世の中で「地方再生」がうたわれているが、衰退していっている地域も多いということを、こういった番組をきっかけに深掘りして取りあげてほしいと思った。

○　３月８日(木)南極　氷の下のタイムカプセル「なぜ地球は生命に満ちたのか」(ＢＳＰ 前 7:45～7:59)を見た。なぜ地球が生命にあふれる場所になったのか、答えを探すためにＮＡＳＡと一緒に南極まで取材をしており、ＮＨＫにしかできない番組だと思った。映像もとてもきれいだった。生物学を研究しているが、今回の番組のような詳細な映像や写真があることで、自分達が行かなくとも十分研究につながる。すばらしい番組だった。ただ、なぜ平日の朝の時間帯に放送しているのかが疑問だ。子どもたちにもぜひ見てもらいたいため、子どもたちが視聴できる時間帯に編成してほしい。

一方、「内藤大助の大冒険　大いなる道をゆく」シリーズは、風景はきれいに撮影されているが、カナダの環境問題や、ＮＨＫだからこそ取材できる場所などの映像を見たいと思った。出演者も、現地の方々と会話ができるような人をキャスティングした方がよかったと感じた。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成３０年２月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１５日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について報告があった。引き続き、「平成３０年度九州沖縄地方向け地域放送番組編集計画（案）」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、3月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	明石　　良	（宮崎大学副学長）
副委員長	山口　成美	（(有）シュシュ代表取締役）
委　　員	秋本　順子	（金属造形作家）
	大鋸　あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン（株）取締役放送部長）
	籠田　淳子	（(有）ゼムケンサービス代表取締役）
	田川　大介	（(株）西日本新聞社編集局総務）
	富田　めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
	長﨑　健一	（(株）長崎書店　代表取締役社長）
	森　　重隆	（九州ラグビーフットボール協会　会長）
	山元　紀子	（霧島高原ビール（株）　代表取締役）

（主な発言）

＜「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　2020 年の東京オリンピック・パラリンピックについては触れているが、ラグビーワールドカップ 2019 については言及されていない。取り上げる計画はあるのか。

（ＮＨＫ側）

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックは一つの大きな目標。それに付随し、スポーツ全体を盛り上げていきたい。通常オリンピックについては開催年の基本計画に記載をするが、開催国ということもあり来年度から取り組んでいきたい。スポー

ツ全体の振興という意味では、ラグビーワールドカップ 2019 も含まれると思う。

○　「編集の重点事項」の５番目の東京オリンピック・パラリンピックについて書かれている部分に、「“公共メディア”にふさわしいイノベーションに挑戦する」とあるが、「イノベーション」とは具体的にどういうことか。

（ＮＨＫ側）

放送や映像サービスで新しい試みをしていきたいということや、いわゆるユニバーサル化という言葉がよく言われる中で、多言語での中継やロボット実況など、より多様なサービスをお客さまに届けるような、さまざまな挑戦をしていきたいという意味だ。また、東京オリンピック・パラリンピックを機に、持続可能な社会をつくっていこうという機運も高まっていくため、オリンピック関連のものかどうかにかかわらず、そうした動きを捉えて報道していくことで、社会全体の意識も高めていきたいというつもりで記載した。

オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典であり、まずスポーツの振興ということが第一だと思うが、日本での開催であるため、競技を盛り上げるほかにも、東京オリンピック・パラリンピックに向けてよりよい社会づくりへの機運が盛り上がる一助となるよう取り組んでいきたい。

○　日本人にとって天皇の生前退位は大きな課題だと思う。国民投票についても取り沙汰されている中で、基本計画のような書面には記載しないのか。

（ＮＨＫ側）

生前退位については、時期が近くなればプロジェクトも発足し、報道はもちろん、関連番組も放送していくと思う。社会の動きには対応していきたい。

○　ラジオを聞けばその日の曜日がわかるくらい、ラジオが生活に根づいている。ラジオが毎日の生活の中にある方が多いと思うため、番組の日時などは変わらない方がありがたい。

○　熊本局の「クマロク！」では、以前は気象予報士が限られた曜日しか出演していな

かったが、平日毎日出演されるようになってから、熊本の細かい気象情報を迅速に提供する体制が構築されていると感じる。局地的、地域的な気象予報を迅速に提供してもらえることは、大きな安全・安心につながると思うため、ぜひ日本全国で推進してほしい。

○　全体的に、具体的な各放送波のターゲットや番組の狙いが書かれていてわかりやすかった。視聴者に向けて計画的な発信が行われていくことを予感させた。

○　４Ｋの本放送が非常に楽しみだ。現在の４Ｋテレビの普及率はどれくらいなのか。

（ＮＨＫ側）

一般社団法人電子情報技術産業協会が、累計で毎月４Ｋ対応テレビの出荷台数の統計をとっている。パーセンテージはわからないが、2017 年１１月の推計では、累計約 345 万台というデータがある。

○　自宅ではケーブルテレビに加入しているが、４Ｋ放送を見るためにどのような設備を用意したらいいかがわからない。ぜひ普及させて、大勢の人に見られるようにしてほしい。

（ＮＨＫ側）

４Ｋ本放送を始めるにあたり、見てもらえなければ意味がないため、普及率をどう上げて行くかは課題だと思う。

（ＮＨＫ側）

民放も同時に始めるため、力を合わせて取り組んでいきたい。

○　若い人は積極的にテレビを見る生活習慣がなくなっていると感じる。なんとなくテレビを見ている人にこそ、質の高い番組を届ける必要があると思う。個人的に「猫のしっぽカエルの手」が好きで、何度も再放送されていて嬉しい。以前は京都以外の場所も取り上げていたが最近はあまりないため、九州沖縄を含め、全国の暮らしの知恵を取り入れてほしいとも思っている。何度見ても心に響く番組は、積極的に再放送・再編集を続けていってほしい。

＜「平成３０年度九州沖縄地方向け
地域放送番組編集計画（案)」についてー諮問ー＞

○　ラグビーワールドカップ 2019 について、九州沖縄の放送局が協力的に携わることがよくわかった。

○　公共放送に対する、一番の国民の期待は命を守るための情報を的確に、早く伝えてくれることだと思っている。福岡に限らず、各局が重点項目に挙げている防災について、ぜひさらに力を入れてほしい。2011 年の東日本大震災以降、緊急を要する災害報道では、アナウンサーが叫ぶように伝えることもあり、より緊迫感があってよい。そういった流れをさらに伸ばしてほしい。

ＮＨＫは、防災情報、気象情報を常日頃から詳細に伝えている。逆にそれらに慣れてしまい、他人事のように感じている人も多いかと思う。九州北部豪雨の際も、本当はもっときめ細かい速報があればなおよかった。たとえ映像がなくても、現地に記者が行ったり、ＳＮＳとの連携も含めて、緊急を要する情報を積極的に発信してほしい。先日、佐賀県に陸上自衛隊のヘリコプターが墜落したときは、カメラマンが現場に到着する前に走りながら現場に向かうまでの映像が流れていた。地域の方や出身者の方は、被害に遭った地域や地元のことを食い入るように見ていたと思う。そういった情報を流せるのは公共放送ならではだと思う。さらに期待していきたい。

○　県域放送がこれまで以上に充実することは大変ありがたい一方、北九州市民としては、北九州放送局の情報発信の量が減ってしまうことを危惧している。これまで以上に、北九州の魅力や課題を発信してほしい。

災害の減災、防災の観点でいうと、北九州市では、紫川の水位の管理はすばらしいと聞いている。なぜ今まで災害が起きていないのか、管理方法を発信し、防災に役立ててほしい。そういった川や、海や山も含めたすばらしい景観も伝えてほしい。

また、ラグビーワールドカップ 2019 を見据え、ウェールズの代表チームが北九州でキャンプを行った。友人が連日足を運んでいたが、報道陣はいなかったという。せっかくなので取り上げてほしかった。

北九州の課題の一つに、市内にすばらしいスタジアムがあるのに地域に根付いていないということがある。スポーツやコンサート等を通して、地元の施設としての市民がこのスタジアムで楽しむ姿を伝え、機運を高めていくような報道にも取り組んでほしい。

○　熊本地震の記憶や教訓が風化しないように、節目はもちろん、これからも継続的かつ多角的に取り上げてほしい。

熊本市の中心市街地で大型の再開発が予定されている。熊本地震復興のシンボルという明るい側面は多分にあるが、同時に、周辺の従来の商店街は、今までの商売や暮らしに影響が出るのではないかと非常に危機感を持っている。大きな変化を迎える熊本市の中心市街地にも注目し伝えてほしい。

スポーツに関しては、ラグビーワールドカップ2019が熊本でも開催され、女子ハンドボールの世界大会もある。また、熊本ヴォルターズも今熊本では一番期待感の高いプロスポーツチームだと思っている。捉え方、伝え方を工夫することでより熊本県民に希望や楽しみを与えてくれる存在になり得るため、ぜひ取り上げていただきたい。

来年から始まる大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」も熊本県民は大変楽しみにしている。ぜひ熊本局からもさまざまな情報を発信し盛り上がりを作ってほしい。

○　Ｖ・ファーレン長崎が念願のＪ１に昇格し、長崎県全体が非常に盛り上がっている。昇格前日もＶ・ファーレン長崎関連の番組を放送していたが、報道でも引き続きお願いしたい。

九州新幹線西九州ルートについて、フリーゲージトレインの導入など、不透明な部分が多い。継続的な報道をお願いしたい。

○　「西郷どん」の地域社会への貢献を実感している。これからも鹿児島を盛り上げていってほしい。

○　社会貢献や教育など、さまざまな角度から地域の情報を取り上げてもらっており、日ごろからＮＨＫの放送をよく見ている。宮崎にはプロ野球などスポーツチームはないが、ようやくＪＦＬに加入したサッカーチームがある。地域のスポーツをＮＨＫが盛り上げていくことで、地域に活気が生まれ、地域が伸びていくことにもつながると思うので、ぜひ地域スポーツを取り上げてもらいたい。

○　先日「見つめます大分」というミニ番組を見た。心から大分県が好きな人が作ったのだろうと思わせる、大変きれいな映像だった。大分局を思わず応援したくなると同時に、あらためて大分県を好きになる番組だった。

○　先日陸上自衛隊のヘリコプターが墜落した事件は、まさに自分たちの漠然とした不安が形になってしまった、衝撃を受けた出来事だった。一報はネットで知ったが、数分後にＮＨＫを見たときすでにどこのメディアよりも早く情報を伝えており、さすがの迅速な対応だった。現場のカメラマンもできるだけ事故現場に近づき、どんなにぶれる映像も切り替えずそのまま現場を撮影し放送してくれた。一度俯瞰した映像に切り替わったときも現場の状況がわかりやすい位置からの撮影で、中継としてすばらしかった。一報を知るのはネットでも、情報をより詳しく知るためにはやはりＮＨＫがよいと実感した。

オスプレイの誘致に対しても県民の関心は高まっているため、今後も取材をしてほしい。

また、各地域放送局が発信している放送というと、平日の午前 11 時台と、平日の午後６時台が主軸になっている。働いている人にとってリアルタイムで見ることが難しい時間であるため、地域情報をもう少し遅い時間帯に放送してもらえると、より多くの地域の人が関心を持って視聴できると思う。

○　ポジティブな沖縄の一面も、ぜひ九州や全国に発信してほしい。米軍基地関連の報道などネガティブな面が多くなってしまうのはしかたがないと思うが、沖縄県にはすばらしい文化や自然、暮らしがあり、県民性も大変明るい。そういった中で人々が生活をし、その中で難しい問題を抱えているのであり、バランスよく明るい話題も発信してもらえればと思う。

○　諮問された「平成３０年度九州沖縄地方向け地域放送番組編集計画（案）」については、各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とし、答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜放送番組一般について＞

○　１月２７日（土）ＮＨＫスペシャル　未解決事件　Ｆｉｌｅ．０６「赤報隊事件」（総合 後 7:30～8:43）、１月２８日（日）の同番組「赤報隊事件　戦慄の銃弾　知

られざる闇」見た。過去を振り返り、歴史をひもとくことは、今の社会にどのような課題を見出していくかを問うことにつながると感じる。時宜を得たいい番組だった。高校生になる子どもや妻と見たが、子どもは事件のことを知らず、妻も事件についてうろ覚えだった。しかし、事件は今の旬のテーマそのもの、むしろ当時の危険というものが、現在表面化してきて、より深刻な事態になっていることがよくわかった。

１日目のドラマ仕立ての番組は、登場人物の情の部分が強調されており、主題が明確になっていたかと疑問に思うところもあったが、２日間続けて見ることで非常に理解が深まった。

○　２月２日（金）なるほど実感報道ドドド！　アジアＳＰ　「地域再生請負人ラオスでの挑戦～人が変われば地域が変わる～」を見た。地域再生人の石原修さんが、現地のスタッフに、自分で考えさせることを徹底して、自立した人材を育てようという思いが非常に伝わってくる番組だった。女性が現地のラオラオというお酒を一気に飲むようなパワフルな一面も捉えられており、３人のリーダーの変わっていく様子が捉えられていてよかった。

３人が日本の会社が経営するイチゴ農家へ視察に行った際、給与形態について質問する場面があった。その回答が聞けると思っていたが、そういった場面はなかった。新規就農者が最も関心を寄せている部分だと思うため、放送すべきだったと感じた。

格差はどの国にもあり、どこも再生の可能性を持っていることがわかる番組だった。今後どのように再生していくのかが楽しみになる番組だったため、続編の放送を期待したい。

○　２月２日（金）フカナビ！オオイタ　Ｊａｐａｎ　Ｒａｉｌｗａｙ　Ｊｏｕｒｎａｌ「にぎわいを生んだ駅ビル開発　ＪＲおおいたシティ」（総合 後7:30～8:00 大分県域）を見た。以前見た「フカナビ！オオイタ」は大分についてとても理解が深まる番組であったため今回も視聴した。しかし、番組の導入部分や、出演者が英語で話している部分が、いつもの「フカナビ！オオイタ」ではないと感じていたところ、スーパーが出て、国際放送で放送された番組だということがわかった。

大分駅の開発がいかにすばらしいかを取り上げており、温泉施設の紹介なども行っていたが、総じて鉄道会社の宣伝のように感じてしまった。開発が始まるころから、駅ビルが建つことで既存の商店街と格差が生まれることなどを懸念していたため、番組に違和感を覚えた。何度か見直すうちに、今回の番組は大分を世界に発信する番組であることがわかったが、大分が現在抱えている課題や、大分の本当の良さなど、大分の現実を伝えるような番組を作ってもらえればと思う。

○　２月４日（日）くまもとの風スペシャル「あした、石牟礼道子を読む」（総合 後1:05～1:48 熊本県域）を見た。２月１０日に石牟礼道子さんが亡くなられ、熊本の地元のメディアも連日特集を組んでおり、興味関心の高さがうかがえる。番組内で著名な方々が石牟礼さんの文学について激賞していたことも印象的だった。

この番組に対する視聴者のニーズや、番組そのものの価値は急激に高まっていると思う。ぜひより広い範囲で再放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

２月２５日（日）に、初回放送時より放送範囲を広げた九州沖縄ブロックで再放送をする予定である。

○　２月５日(月）クローズアップ現代＋「ドキュメント名護市長選」は大変丁寧な取材で、深い内容だった。米軍基地に関する政策について、投票する上で苦しい決断をした市民も多かったと思う。市民の生の声を全国に伝える機会はなかなかないため、取り上げてもらえて嬉しかった。

鎌倉千秋アナウンサーの、「住民たちの判断の裏側には長年の苦悩や葛藤、そして疲弊があることもわかりました。国家レベルの選択を住民たちに迫り続けてきた現実を、私たちも直視しなければいけないと思います」という言葉が大変響いた。ネット上のフェイクニュースをほかのメディアが追従してしまうことも見受けられるが、最も信頼のあるメディアとして、ＮＨＫは沖縄の真の姿を伝えていると感じ、心強いと思った。ぜひ秋の知事選に向けて、引き続き丁寧で公平な取材を、沖縄でだけではなく、九州や全国に向けて広く発信してほしい。

○　２月７日（水）ひるブラ「いっチャイナ！長崎冬のランタン祭り～長崎市　新地中華街～」は、タイトルにセンスを感じたし、従来主催者にスポットを当てた番組が多い中、地域の方、地元の学生を取り上げていて構成もよかった。地域の人々の暮らしを全国に向けて放送する、という編集計画にも基づいていた。

その日の夜、「イブニング長崎」内で再放送をしており、視聴率もよかったと聞いている。昼間見ることができなかった人たちに向けたよい編成だった。

（ＮＨＫ側）

長崎での「ひるブラ」の視聴率はとてもよかった。その日の夕方６時台の「イブニング長崎」内で「ひるブラ」を再放送し、本放送より高い視聴率となった。

○　２月７日（水）ＮＨＫスペシャル　金メダルへの道「羽生結弦　連覇への苦闘」

(総合 後7:30～8:15)、２月１４日(水) ＮＨＫスペシャル　「金メダルへ“ＪＡＰＡＮ　ＷＡＹ”で挑む～スピードスケート・女子団体パシュート～」(総合 後10:00～10:49) を見た。特に女子団体パシュートについては、番組を通してルールなどを学ぶことができ、競技を見るときの一つの指針になってよかった。

羽生選手の番組は午後７時台、女子団体パシュートの番組は午後１０時台と、放送時間が異なっており、それぞれターゲットを意識して編成していると感じた。

番組内で「絶対王者」などの言葉が使われており、これから競技がある中で、やや断定的で強い言葉が使われていた点が少し気になったが、幅広い世代のオリンピックへの関心を高める点でよい番組だったと思う。

○　「連続テレビ小説　わろてんか」を見ている。女性が起業する精神や、企業を後継していく様子が、改めて勉強になると感じる。

また、現在女性の時代と言われて久しいが、本当に女性が伸び伸びと社会で活躍していくには、いわゆる『ガラスの天井』と言われているものがまだまだ社会には存在していると感じる。そういったものに立ち向かうような、主人公が失敗したり苦しんだりするシーンをさらに表現してほしい。それらは、現代の女性のパワーを生かしていける時代にもつながると思う。

○　２月１３日（火）人生デザイン　Ｕ－２９「林業　研修生」を見た。番組では、例えば仕事で使用する器具の修理を、力がないためなかなか習得できないといったような、出演した女性の仕事がうまくいかない部分に焦点が当たっているように感じた。男性の割合が多い林業に女性が挑んでいくという番組だったと思うので、女性の方が得意とする作業などを取り上げてほしかった。こういった番組では、女性ならでは、男性ならではといった視点を強調し示してほしい。

○　２月６日（水）世界ふれあい街歩き・選「パリ・冬のマレ地区へ～フランス～」を見た。自分がパリに行ったような疑似体験ができ、大変よかった。ほかにもＢＳプレミアムで紀行番組を見ることがあるが、実際に現地の雰囲気を感じ、旅行したかのような気分になることができてよい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成３０年１月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１８日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴したなるほど実感報道ドドド！アジアＳＰ「九州に学べ　高齢者福祉　東南アジアの期待」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、２月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長	山口　成美	（(有）シュシュ代表取締役）
委　　員	秋本　順子	（金属造形作家）
	大鋸　あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン（株）取締役放送部長）
	籠田　淳子	（(有）ゼムケンサービス代表取締役）
	田川　大介	（(株)西日本新聞社編集局総務）
	富田　めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
	森　　重隆	（九州ラグビーフットボール協会会長）
	山元　紀子	（霧島高原ビール（株）代表取締役）

（主な発言）

＜なるほど実感報道ドドド！アジアＳＰ

「九州に学べ　高齢者福祉　東南アジアの期待」

（１月１２日（金）総合 後7：30～7：56　福岡局制作）について＞

○　アジア全体で高齢化が進んでいることを実感した。その中で、日本は経験や知識を生かしアジアの福祉におけるビジネスモデルを形式化しており、日本企業のよい部分が東南アジアで有効活用されていることを初めて知った。日本だけを市場にしていると企業は閉塞してしまうが、アジアに進出している様子を見て希望が持てた。

番組内容は福岡と大分の取り組みが中心だったため、タイトルの「九州に学べ」という部分が気になった。「九州」とくくるのであれば、より九州ならではの福祉の特徴がはっきりわかるとよかった。

一緒に視聴していた子どもが、冒頭のバンコクの色鮮やかな町並みと、カラフル

な番組ロゴが合っており、おしゃれな印象を持ったと言っていた。

（ＮＨＫ側）

当初は「福岡に学べ」というタイトルだったが、取材を進めていく上で、大分の企業の取り組みを知り、番組で取り上げることになった。厳密に言うと、「福岡・大分に学べ」が正しいかもしれないが、福岡と大分の総称を考えた結果、「九州に学べ」とした。

○　高齢化が進んでいる現実を改めて実感した。自分の地元でも高齢者向けの体操がある一方、医療機関は整備されておらず、専門医の診察を受ける機会は少ない。九州の企業が福祉の分野で国外に進出している中で、福祉において厳しい現実は地元でもあるし、番組内で紹介されたような技術をもっと九州に導入してほしいと思った。

番組内で、福岡の介護予防運動を体験したタイの方が、笑顔になったり、「120 歳まで生きられるんじゃないかな」コメントしているのを見てほっとした気持ちになった。

○　福岡の介護予防策がアジアへ広がっている様子が、可能性も含めてよくわかった。一方で、タイ独自の医療事情の背景の説明がもう少しあればよりよかった。

番組冒頭部分で背景が透けて見える文字スーパーが気になってしまい、同時に流れていたナレーションが耳に入らず聞き逃してしまった。画面右上に出されていたタイトルの文字スーパーも小さく、見にくかった。読みにくいなら出さないほうがよい。番組をスムーズに見られるような文字スーパーを心がけてほしい。

ＪＩＣＡの方が、タイで行っている少ないリソースでの介護の取り組みは日本にも参考になるのではないかと言っており、今後タイからそういったノウハウが日本に入ってくれば興味深いと感じた。

○　どういった立場の人たちに向けた番組なのかがわからなかった。内容も日本企業の素晴らしさを伝え、さらなる導入促進を伝えたかったのか、治療よりも未病という考え方が大事で、高齢化が進む日本にとって、こういった取り組みをもっと導入するべきだと伝えたかったのかがわかりにくかった。アジアで言えば中国でも高齢化が進んでいるのに、タイに注目した点も疑問に思った。実際にタイで取材していたが、九州とアジアの近さは実感することができた。

自分は要介護者とともに生活をしているが、自宅での介護方法や最期のみとり方についても興味がある。そういった部分に触れてもよかったのではないか。

○　アジアに近いという九州の地域特性や、高齢化が非常に進んでいるという特質を生かして、近くの国に対して貢献できる可能性、ビジネスチャンスの一つの断面が描かれており、非常におもしろかった。また、介護予防を巡った取り組みが両国の間にあることを知らなかったため、気づきを与えてくれた興味深い番組だった。

一方で、福岡とタイの介護分野での協力がどういうきっかけで始まったのか、福岡にとってのメリットはどういうところにあるのかを疑問に思った。介護予防に取り組んでいたタイの方々が比較的恵まれた層の方々に見え、タイ全体に取り組みを広げていくことが大切だと感じたし、同時にタイには介護への支援制度があるのかも気になった。また、日本では介護を家庭内だけでなく社会全体で行う姿勢があるが、タイにおいてもそういった動きがあるのかも気になった。この番組からいろいろな疑問や視点を感じることができたが、介護を巡る背景がもっと広く描かれていればより満足できた。

○　アジアの人々に九州の知恵が生かされて、このような形で人々の暮らしに貢献していることを取り上げた、大変よい番組だった。海外から介護職員を招いて研修を行ったり、九州から海外に要員を派遣して指導する取り組みは、生きたノウハウをシェアして広めていくという形の国際貢献が、同時にビジネスチャンスにもなることを示していた。どのように実践されているかを、現地取材を通し人々の生の声を聞けたことで、一過性のものではなく継続した取り組みになっているということもわかった。

福岡の介護予防と大分の介護システム双方についてＪＩＣＡの担当者との対談があり、内容はとてもよかったが、番組内に占める時間が少々長いと感じた。何回かあったインタビューも、構図が似ており、既視感があった。テレビは目に映ったもので訴えることが多い。現地取材したからこその、現地の方の声、映像を少しでも多く使用するといった工夫があったら、さらに番組が活性化したと思う。

番組終盤で、最近地域の集まりにも参加していなかった女性が介護予防の運動をした後、「思いつめることもなくなるね」と言った言葉が、大変印象的だった。九州の知恵がアジアで生かされているように、世界ではさまざまな取り組みがあると思うため、介護分野の動きは引き続き丁寧に報道する意義があると感じた。

○　九州だけでなく日本の国民が、自分が思っていた以上に海外から尊敬されていることを感じた。インタビュー部分のアナウンサーの応対が少し気になった。必要以上にあいづちを打っているように感じたため、回数を控えるなどしたほうが、よりインタビュー内容が視聴者に伝わると思う。

○　東南アジアからの観光客が多いと感じていたが、業務研修といった形でも交流があることが番組を通してわかった。日本は現在介護士不足が深刻だと感じている。こういった研修を数年かけた取り組みにすれば、タイの方は日本で介護の勉強ができ、日本は介護士不足を解決できるというメリットも生まれてくると思う。同時に、日本がより多くの研修生を受け入れることで、ノウハウを持った人が増え、タイ全土に介護の知識が広がると思う。

また、ＪＩＣＡが実際どこまで現地でのサポートを行なっているかが気になった。実践はあくまでも現地で行なっているし、現地の方が取り組んで感じた問題点などをもう少し見たかった。

○　非常に面白い番組だった。日本の支援と役割を中心に取材されており、今後の日本での国際的な協力支援体制構築や、企業的市場を得ることにつながったのではないか。一方、なぜタイで高齢者が急激に増え、老人介護が必要になってきたのか疑問に感じた。日本式の実践介護を継続して取り組んでもらうためには、タイの社会的背景を十分に鑑み、タイの社会的な仕組みの中にどのように参入していくかを考える必要を感じた。今後、ぜひそのようなことも番組の中で取り上げてほしい。ＮＨＫの「みんなの体操」や、老人ホームや介護施設に多くの人が集まりともに生活することも、日本独自の取り組みである感じており、東南アジアで広めたらいいのではないかと思った。

○　高齢化先進国である日本が有するソフト、ハード両面における知識・経験・技術・制度等が果たしうる役割がよく理解できた。日本と同様の課題をはらんでいるものの、対策が遅れている東南アジア各国・地域に対して、リーダーとして教え、導き、貢献できる可能性があることは、極めて有意義なことだと思う。

大分の会社が開発したシステムをタイの病院が実際に利活用している部分では、端末上の表示が日本語になっていたため、いくら便利といっても、日本語のままでタイの方は大丈夫なのかと不安に感じたが、タイの利用者に使いやすいインターフェース等の開発に取り組んでいると聞き安心した。国際的な産学連携が九州の中小企業でも進んでいるという事実に、地方中小産業の可能性を見ることができた。

（ＮＨＫ側）

限られた番組時間の中で、取材したものから伝えたいものを選択していく作業に大変苦労した。皆さんからいただいた意見を課題として、制作現場で議論していくとともに、今後の番組制作に生かしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　大河ドラマ　西郷どん　第一話を、鹿児島局が行ったパブリックビューイングで視聴し大変感動した。地元の人は西郷隆盛を好きな人が多く、ドラマの内容が気になっていると思うが、パブリックビューイングで多くの人が同じ画面を見て同時にリアクションをする様子を見て、「西郷どん」に対する鹿児島の方々のおおよその反応を見ることができた。幅広い世代が楽しめる作りになっていると感じた。

○　「西郷どん」は、これまでの大河ドラマにない画角と映像がすばらしいと感じた。大河ドラマの楽しみは、壮大な光景でのドラマを見ることでもある。「西郷どん」では、特にそのような映像を強調しているように感じ、今後の西南戦争などのシーンも楽しみだ。「西郷どん」は字幕放送だと思うが、字幕も方言で表示されていた。せりふは方言で話しているので、字幕は分かりやすい共通語などで良いのではないか。

○　１月７日(日)大河ドラマ　西郷どん　第一話を見た。冒頭の銅像除幕式での、西郷糸の「ちごっ（違う)」というせりふの連呼が、まず強烈な印象だった。このシーンが今後のドラマ展開とどうつながっていくのか非常に興味深い。

年長の子どもが幼少の子たちに勉学を教える「郷中教育」の場面は感心した。ドラマ後の「西郷どん紀行」では現代においてもその仕組みが残されていることが紹介されていたが、鹿児島の方の愛郷心・帰属意識の強さの源を垣間見たような気がした。映像も、オープニング・ドラマ本編ともに大変美麗だった。原作者の林真理子先生の講演に参加する機会があったが、「今回、幕末ファン以外の方、予備知識が全くない方でも面白い、楽しいと思ってもらえる事を第一に執筆した」と強調されていた。ドラマにおいてどのように表現されていくのか、期待して視聴したい。

○　１月７日(日)ＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワーク　第３集「“骨”が出す！最高の若返り物質」（総合 後 9:15～10:04）は、医学に関心のなかった自分でも引きつけられるわかりやすい番組だった。シリーズで体のさまざまな部分に着目し、「健康」をテーマにしているところがＮＨＫらしいと感じたし、血液の流れ一つをとっても、大変わかりやすい映像を制作しており、技術の素晴らしさを感じた。

出演されていた山中伸弥さんはノーベル賞も受賞され、博学な方だという印象があったが、非常に気さくでわかりやすくコメントをしており親近感が湧いた。また、この番組に出演するために、２０時間ほど勉強をしたと言っており、山中さんでもこういった機会を通して学び返されていることがわかり、謙虚さを感じた。

シリーズ番組のため、今後も見ていきたいし、若い世代やアスリートなどにも見てほしいと思う番組だった。

○　１月１４日（日）ＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワーク第４集「万病撃退！“腸”が免疫の鍵だった」を見た。自分も腸内環境について研究しているが、体内の様子などを言葉で説明するのはとても難しい。それらをとてもわかりやすくＣＧで表現しており、ＮＨＫにしかできない番組だと感じた。

○　ＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワーク　第４集「万病撃退！“腸”が免疫の鍵だった」を見た。子どもとともに視聴したが、田中将大さんの出演に大変興味を持っていた。若い世代に視聴を促すことができていたと思う。一方、腸内細菌と免疫細胞を「水戸黄門」に登場する助さんと格さんに例えていた部分は、自分はわかりやすいと思いながら見ていたが、子どもはあまり納得がいっていないようだった。もう少し例え方を工夫してもよかっと思う。

○　１月１０日（水）ＮＨＫスペシャル　シリーズ　ＴＯＫＹＯアスリート　プロローグ「ブレイクスルーが始まった」（総合 後 7:30～8:43）を見た。若いアスリートたちが大学などと協力しながら科学的に研究されたトレーニングをしていたが、「ここまで練習してもメダルを取れないのか」と衝撃を受けたし、取り組むアスリートに感心した。自分自身はチームスポーツをしていたが、個人競技でレベル向上するために行うさまざまな分析にも驚いた。

また、お笑い芸人と元競泳選手が出演していたが、「すごい」という発言ひとつにおいても、やはり元競泳選手の方に重みを感じた。お笑い芸人が出演していることで、番組の一部に軽さがあり違和感があった。

○　１月１１日（木）クローズアップ現代＋「認知症でしばられる！？～急増・病院での身体拘束～」を見た。昔からある非常に深刻なテーマだが、現状と課題を丁寧に説明しており、視点も明快でわかりやすく、コメンテーターの談話を含めて非常に共感できる番組だった。

1998 年に「抑制廃止福岡宣言」を福岡の複数の病院が打ち出し、その動きが全国に広がっていったことを思い出した。当時ＮＨＫも全国放送の番組で大きく取り上げていたことを覚えており、今回番組を視聴し、その当時を振り返った。身体拘束をする中で、いかに負担を軽減させるか、いくつか事例も紹介されていたが、課題は昔から変わらないと感じた。

今回番組で特徴的だと思ったのは、精神科の取り組みを取り上げていたことだ。身体拘束を巡って一番難しい判断や診断を行なう分野だと思っているが、ある病院

の取り組みを丁寧に描いており感銘を受けた。一方、身体拘束には、薬物投与により患者の精神を安定させるなどの方法もある。そういった部分の紹介もしてほしかった。

全体を通して見て、折りに触れて取り上げてほしいテーマだと感じた。

○　１月１２日（金）フカナビ！オオイタ　Ｏｉｔａ　Ｌａｂ「大分県災害データアーカイブ～キロクとキオクをつないで～」（総合 後 7:30～8:00 大分県域）を見た。スタジオや出演者がそれぞれ研究室、研究者を意識した演出になっているのがよかった。

災害をデータ化するために、街に出向き一般の方にインタビューをしたり、地域の小学生が町の危険な場所を実際に探していることで、災害をより身近に感じることができた。かつて起きた災害時の白黒写真をカラー化することで、当時の様子を現実的に捉えることもできた。データで解説しても分かりにくい過去の災害を、実際に経験した方の言葉を元にすることでより明確な記録が残せると思うし、災害データをアーカイブ化することで災害を減らしていければいいと思った。

町の方の「災害はいつでもどこでも起こる」という言葉が印象に残った。実際記憶があるうちに記録を一つずつ積み重ね、蓄積し、分析していくことが大切だと実感した。

インタビューをした人はたくさんいると思うが、本編では出演のなかった人がいた。せめて最後に写真だけでも放送していただけると、より多くの地域の方が参加する災害データアーカイブの作成にもつながっていくと思った。

（ＮＨＫ側）

大分では災害が相次いだこともあり、それらを一つずつ、データ化し、さらには現地の方の証言も含めてアーカイブス化し、今後の災害の防災や減災に役立ててもらうという取り組みを進めている。インターネット上での展開も予定しており、こちらでも見られるようにしていきたい。

○　１月１５日（月）鶴瓶の家族に乾杯「西郷どんＳＰ　鈴木亮平と鹿児島市ぶっつけ本番旅」を見た。鈴木亮平さんは方言を熟達しており、現地の方と会話をする様子を見て、方言に改めて魅力的に感じた。「西郷どん」によって鹿児島の方言もはやるのではないかと感じた。

○　１２月５日（火）人生デザイン　Ｕ－２９「ゲストハウス経営」を見た。ゲストハウスを経営する若い女性を取材していたが、自分の気持ちを書きとめているノー

トや、朝起きたばかりの姿を撮影していたりと、制作側との距離がとても近く、本音を引き出すような密着した取材ができていたと感じた。

一方、彼女が考えるゲストハウスの定義について疑問に思った。海外からの予約が多いことに戸惑っていたが、これだけインバウンドが盛んな時代であれば想定内のことだと思う。都会の女性をターゲットにオープンしたと言っていたが、逆に違和感を持った。また、オープン後に地域の観光地やほかのゲストハウスに視察に行っていたが、普通はオープン前にやらなければいけないことなのではないかとも感じた。

年齢が若く行動的にたくさんのことを行い、その中に安直さも見えたが、自身が持つ夢へのワンステップを踏み出した若い経営者の今後にも注目していきたい。

○　年末年始を家族と過ごす中、子どもたちと見た１月１日（月）香川照之の昆虫すごいぜ！特別編「カマキリ先生☆マレーシアへ行く」（Ｅテレ 前 9:00～9:44）は、抜群に面白かった。名俳優でもあり、歌舞伎俳優である香川照之さんが、カマキリの着ぐるみをかぶりっぱなしで、大変テンション高く昆虫愛を語る姿に、子どもたちはくぎづけになっていた。楽しみながら学べる、よい教育番組だった。

○　１月１３日(土)「コウケンテツの世界幸せゴハン紀行～デンマーク～」(ＢＳ１ 後7:00～8:49）を見た。グルメ番組は民放も含めて数多くあるが、この番組では、とても時間をかけてさまざまな方へインタビューをしており、子どもたちへの食育や、オーガニックフードなど取り上げ、日本でも課題となっているテーマを盛り込んでいるところに好感を持った。一方、食だけではなく、食器や家具についてなど、デンマークのライフスタイル全般を取り上げていた部分には、少しテーマを広げすぎたのではないかと感じた。今までの「コウケンテツが行く　アジア旅ごはん」では母親が家族のためにおいしい料理を作るシーンが多かったが、今回は、祖父母から小さな子どもたちまで、家族揃って料理をする姿や、家族や友達同士で食卓を囲む姿から、アジアとの文化の違いを感じた。共働き世帯が増え、子どもも習い事に通うことが多い今の日本では、そのような生活をすぐに実現することは難しいと思う。しかし、デンマークの方が、大変穏やかな、家族全員が幸せそうな生活をしている姿を見ただけでも、いつか自分も実現できるかもしれないという希望を持てた番組だった。不定期の放送だと思うが、次回も楽しみにしている。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成２９年１２月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２１日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴した「もうひとつの　たからのとき」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、１月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	明石　　良	（宮崎大学副学長）
副委員長	山口　成美	（（有）シュシュ代表取締役）
委　　員	秋本　順子	（金属造形作家）
	大鋸　あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン（株）取締役放送部長）
	籠田　淳子	（（有）ゼムケンサービス代表取締役）
	田川　大介	（株式会社西日本新聞社編集局総務）
	富田　めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
	山元　紀子	（霧島高原ビール（株）代表取締役）

（主な発言）

＜「もうひとつの　たからのとき」
（１２月８日（金）総合 後8：00～8：43　福岡局制作）について＞

○　一夜にして村の風景を変える自然現象の恐ろしさを実感した。復興に携わる人々の心の移り変わりや、ボランティアの活躍ぶりが伝わってきた。個人事業者への支援には制度上限界があることや、農業関係者以外の被災者に対する支援が難しいことに疑問を感じた。

また、後継者の力強さや、事業を引き継がせる世代の不安な様子が伝わってきた。番組終盤で、村の方々が作ったしめ縄を神社に飾るシーンは、村全体で復興しようという意思が伝わってきて、番組の流れとしても良く仕上がっていると感じ感動した。

自分の身に置き換えて考えられるシーンも多く、視聴後、インターネットで東峰村を検索したところ東峰村を支援するプロジェクトを見つけ、思わずそれに応募した。番組を見るだけではなく、視聴者が自分に置き換えて被災状況を考えることや、

自ら行動を起こさせたところも、番組制作の上で成功と言えると思った。

○　奥様を亡くされた男性が、「一人になって初めて奥さんのありがたさを感じた」と言ったとき、取材したディレクターが、「天国の奥さんが、『ありがたみをいまさら感じたか』と言ってますよ」と、応えたシーンがとても印象的だった。大変な悲しみの中でも冗談を言い笑い合っていることは、カメラに映っていない時間の中で、村の住民とディレクターの信頼関係が築けていないと生まれない場面だ。今はメディアが取り上げる話題も、視聴者が目にするニュースも目まぐるしく変わっていく時代だが、今回の番組からは、ディレクターが長い間東峰村に寄り添ってきたからこそ生まれた、番組の裏側に流れる現場の時間を感じることができた。ディレクターのナレーションが温かく、住民の方を姓ではなく名前で呼んでいたことにも親しみを感じた。

対象的に、５月１７日（水）「たからのとき　～福岡発地域ドラマ～」（ＢＳＰ 後10:30～11:29）の出演者が村を再訪するシーンでは撮影時間の短さを感じた。ディレクターのみで番組を構成した方がより内容が深まったのではないかと感じたが、出演者に再会した時の地元の方々の笑顔から、美しい村を知り、そこで共に時間を過ごした著名人が村にいること自体がエネルギーになるのかもしれないとも思い、別の意義を見い出すこともできた。復興には長い時間がかかると思うが、その姿をぜひこれからも伝えてほしい。

○　人間の真の強さ、人の営みの温かさがまっすぐに心に刺さるドキュメンタリーだった。実際の番組時間より多くの内容が詰まっているようなインパクトの強さを感じた。

出演者のお子さんが感じた東峰村というものが伝わってこず、お子さんと一緒に訪れた意図がわからなかった。また、奥様を亡くした男性が、若い女性を紹介してほしいと冗談で言っているシーンをあえて切り取ったことも疑問に思った。例えば夫を亡くした女性が同じような発言をしたら、視聴者が今回と同じ受け止め方をするかはわからないと思う。

（ＮＨＫ側）

出演者のお子さんは、一番ピュアで、フラットな目線で現場を見て地域の方とおしゃべりしたり、自然と戯れたりしていたが、なかなか番組内で生かしきれなかったところもあったかもしれない。そういったピュアな目線で見た復興というものを描くことも可能性としてはあったが、今回は取り上げることができなかった。

○　若干冗長で散漫な印象を受けた。東峰村の日常を撮影したものをそのままつなぎ合わせた印象で、全体を通してのメッセージ性が見えにくく、番組が長く感じた。番組で取り上げる表層的な部分では出てこない悲しみや辛さ、不条理を前にした悔しさがあると思うが、そこがどうしても映像では見えにくかった。

しかし、地道に丁寧に、現場に住み込んでその場の日常を伝えていく番組を作る姿勢はＮＨＫにしかできないだろうし、丁寧に定点を追い求める姿勢は地域発の番組としてよかった。災害があった直後、ドラマの舞台となった被災地を取材した番組を制作するというねらいもよかった。

○　地域の方々の状況を身近に感じる部分もあれば、被災しているにもかかわらず力強く復興していく様子や、楽しそうに話す場面に人間の強さを感じた。地域の方々のひと言ひと言がとても重かったが、取り上げられている発言は映像と共にどれも心に響いてきた。中でも被災した工場を再建した場面では、新しく建てた工場の後ろに、土砂崩れの様子や被災した建物がそのまま残っている映像が大変心に響いた。被災した方々の今後をぜひこれからも追跡してほしい。被災した方からの便りにより次の日には現場に入ったディレクターの行動力には驚いたし、全体を通してとてもよい番組を見せてもらった。

○　便りが来てすぐ翌日に動く行動力、機動力がすごいと感じた。番組はタイミングが重要で、そのときにしか撮れないものがあると思う。東峰村へ行くことを最優先に行動した決断力がすごいと思った。ドキュメンタリーを制作する際は、制作側も取材先の思いを一緒に背負うことになると思うが、制作側がその思いに寄り添い一緒に考えていくことは大変なことだと思う。一人一人に寄り添いたいというディレクターの覚悟がよい番組につながっていると感じたし、現状の支援制度の限界も伝えられており、見る人にも訴える内容になっていた。一方、ディレクターに比べ、ドラマ出演者と地元の方々との距離感にどうしても差を感じた。もう少しディレクター目線の内容を入れた方がよかった。

ドラマも併せて見たが、実在するケーブルテレビがモデルになっていたため、災害が起きた時、そのケーブルテレビがどのような対応をしたかも盛り込んでもらえたらさらによかった。

○　今回番組を見るまで東峰村がこれだけ被災していることを知らなかった。災害があった地域に行くことは危険も伴うと思うが、村の方から連絡を受けた翌日いち早く駆けつける対応が番組のすばらしさにつながったと思う。地域の方々の発言は明るいものが多かったが、その裏には悔しい思いもあるだろう。中でも被災した焼き物の窯元の方が、豪雨災害時の流木を燃料に、再建した窯で焼き物を焼く姿からは

復興への熱い思いを感じ、そうした場所で作られる商品の購買で応援ができればいいなと思った。

土砂で崩れた裏山の前に工場を再建する家族の姿に、まねできない勇気のすごさを感じ取ると共に、この地で再建したいという強い意志を感じた。

個人事業主に対しては現状の補助制度に限界があることが取り上げられていたが、こうした機会がないとそのような現状もわからない。番組が制度が変わるきっかけになってほしい。

全体として、村全体で復興している姿に勇気をもらったし、自分の身に置き換えた視点で興味深く見ることができた。

○　今回の番組は、復興の状況の一つを捉えた番組だと思うが、状況を伝える方法は災害の種類によって異なる。今回は豪雨災害からの復興だということを盛り込むことも必要だったのではないか。また、ドラマ出演者と東峰村の方々との再会は、楽しそうな雰囲気で描かれていたが、もっと厳しい現実があったと思う。そういった場面も取り上げてほしかった。

工場経営者が被災した工場の中からまだ使用できる部品を見つけた場面は、それを礎に工場を再建しようという気持ちが伝わってきてよい視点だったと思った。さまざまな人が、被災した中で何か支えられるものを見つけ再スタートを切っているのだと感じた。

○　東峰村の被災の実情については詳しく知らなかったため、被災前後の対比映像を見て、深刻な被害の様子にショックを受けた。

熊本地震関連番組をいくつも視聴して実感したが、ドキュメンタリーの、あるがままの姿を映し出すことの残酷さとその意義を思うとき、割り切れないもどかしさ、苦さのようなものを味わう。農業従事者が多い東峰村で、農地や農機具の被害に対する支援が進む一方、工場経営者の、「（補助・支援がないと）このままだと３年もたない」「村に住めなくなる」という発言は非常に重たかったし、支援の在り方について、極めて重要な課題を投げかけた場面だった。厳しい状況下で工場再建を決断した方、大きな被害をもたらした流木を燃料に「パワーに変えて再スタート」と奮起した方、奥さんを亡くした悲しみの中で、ユーモアを交えて周囲の人たちとコミュニケーションをとる方、それぞれの姿に、きらりと輝くたくましさを感じた。

（ＮＨＫ側）

指摘いただいた部分は、自分自身も同じように感じていた。多くのものを捉え過ぎて、何をどう生かすかの判断には本当に苦労

した。さまざまな事象が絡み合い動く様子を何とか番組内に盛り込んでいかなければいけないが、テレビはどうしても一つの物を一面的に見せてしまう。描ききれなかったものもあったかもしれない。ドラマ出演者が今回東峰村を再訪することになった背景には、寺島しのぶさん、山崎銀之丞さんから、災害が起きてすぐに「何かできないか」というご連絡を頂戴していた経緯がある。一方で、いざ再訪するに当たって、二人ともどういう気持ちで臨めばよいかをとても悩まれていた。地域の皆さんが何らかのつらい思いをしているだろう中、特定の部分だけを切り取って番組にすることに抵抗があったことは、制作側と出演者側で同じ思いだった。どう伝えるべきか悩みながら、ありのままを一生懸命伝えようという結論に達し、ロケに至った。復興を支援をする番組を制作する際に、誰のためにどのように伝えるのかは難しいテーマだが、視聴者が自身を重ね合わせて感じていただくことを突き詰めることだけはできたと思っている。

いろいろな群像を描く作品は難しいと改めて感じたが、何らかのテレビ、ドキュメントとしての形を、私たちなりに提示することができたと思っている。今後もディレクターと共に、自分たちのできることを考えていきながら、東峰村を見つめ続けていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　前回の審議会でも意見を寄せたが、ＮＨＫは視聴率を気にしなくていいと思っている。１０月１１日に新燃岳が噴火した際、当日の噴煙の模様とともに６年前の爆発的噴火の模様が映し出された。霧島市地区一帯が被災したかのように捉えられ、霧島地区の観光は風評被害を受けた。そういったことも含めてありのままを伝えていくための報道のあり方を考えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ご意見はしっかりと受け止めたい。しかし、災害報道において、地元の方とそれ以外の方で意識のギャップはもちろんある。報道の規範として、「安全だ」とは簡単には言えない。以前も同様のご指摘を受けたことはあるが、難しい問題だということを正直に申し上げたい。

（ＮＨＫ側）

６年前に匹敵するような噴火が起きる可能性があると気象台が発表した事実もある。

（ＮＨＫ側）

報道のあり方については我々も非常に悩んでいる。難しい問題という認識はこれからも持ち続けたい。

○　１１月２３日（木）「幻のコレクション　１００年前　夢の美術館」（総合　前9:00～9:50）を見た。松方幸次郎さんが自分のコレクションのためではなく、日本の文化のために美術品を収集していたことがわかり、日本人に「本物の絵を見せたい」という思いが伝わってきた。通常美術館を紹介する番組は展示品が注目されがちだが、美術館という建物自体についても触れており、美術館の歴史を知る良い番組だった。100 年という長い時間を約１時間の番組にしていたが、それでもたくさんの情報を丁寧に伝えており、とても興奮しながら見させてもらった。

○　１２月１日（金）「ニュースウオッチ９」の皇室会議関連のニュースが忘れられない。存命中での退位は日本にとって大きな節目になる。皇室典範という特例法の施行ということでくくられているが、若者にもそれをどう伝えていくかが課題だと思う。今後このニュースをどう扱うかも気になっている。公共放送として、次回取り上げる際はさらに深掘りをしてほしい。

○　１２月１１日（月）「ニュースウオッチ９」で扱われた元日馬富士書類送検関連のニュースで、刈屋富士雄解説委員のコメントが適切だったと感じた。連日このことについてさまざまなメディアが報道しているが、ネガティブな内容が多いと感じる。そんな中、貴ノ岩関について「もし稽古ができる状態ならば力士としての稽古に戻してあげるべき」という力士を思った発言は好感が持てた。今後も冷静に、視聴者にわかりやすい報道をしてほしい。

○　１２月１４日（木）「ニュースただいま佐賀」、同日の「ニュースおかえり佐賀８４５」内で、「相次ぐ水路転落事故　その背景と課題」というテーマのリポートを見た。事故が起きる理由、減らない理由、減らすための策が限られた時間の中で検証されており、地域の身近な課題を問題提起していてよいと思った。

新聞各紙ではオスプレイや原発問題がよく取り上げられているが、ＮＨＫでもぜ

ひ課題を検証したり問題を提起したりする番組を制作してほしい。さまざまな人が納得する番組制作は難しいと思うが、国民に何かを考える機会を与える番組はＮＨＫだから制作できる。ネット上の意見など、匿名のものは気にせず放送をしてほしい。

（ＮＨＫ側）

オスプレイについては以前「なるほど実感報道　ドドド！」でも取り上げたことがある。限られた時間でさまざまなテーマを扱わなければいけない中、できるだけ時事に即した内容を放送している。意見が分かれている問題について公平に扱えば、両者から意見を頂く。たとえ批判意見でも、両者から批判が上がる番組が正解だと思う。逆に、どちらか一方からだけ批判が上がる番組は、何かが足りないということだと思う。九州沖縄においては、少なくともそういった揺るぎない方針で取り組んでいると思っている。

○　１２月１５日「ＬＩＦＥ！～熊本に捧げるライブ～」（総合　後 7:30～7:59　九州沖縄ブロック）を見た。熊本県民だからこそ理解できるローカルネタが満載で、見ていてうれしい気持ちになった。その中で、熊本県民のソウルフードとして紹介されたちくわサラダは食べたことがなく、なじみがなかった。コントの流れとしては申し分なかったが、事実か否かを考えた場合、誇張のように感じる熊本県民が多かったかもしれない。コント「ムローノ・マーズ」は一度しかオンエアされていないと聞き最初いぶかったが、地元高校のダンス部とのコラボダンスが披露され納得した。

最後のコント「宇宙人総理」の中で、内村光良さん扮する総理の頭の形が加藤清正公の蛇の目紋烏帽子形兜に似ていることから、野党役の田中直樹さんが「熊本は 400 年以上前から宇宙人に支配されていたのでは」「加藤清正も宇宙人だったのでは」と追及するくだりがあった。コントとしては面白かったが、加藤清正公を大切に想う県民は少なくないため、悪気がないとわかってはいても、見ていて心情を害する人も出てくると思う。1,000 人のお客さんがコント中に「聴衆」として加わり、一緒にコントを作り上げた一体感は、ライブならではだと思った。

番組の最後で、出演者と観客が全員で歌ったエンディング曲の歌詞は、内村さんの熊本への想いが込められているようで、心に響いた。

○　１２月１７日（日）ＮＨＫスペシャル「激変する世界ビジネス“脱炭素革命”の衝撃」を見た。脱炭素に向けて世界各国の取り組みが紹介される中、日本は技術も考え方も遅れていると指摘を受けるシーンがあったが、別の角度から見れば進んだ技術を持っているといえる。また、電力発電以外の観点から脱炭素社会を考えた場

合、今回の取り上げられなかった国でも、二酸化炭素を多く排出している国はある。今の技術立国日本が目指しているものや、脱炭素についてより多角的な捉え方をしてほしかった。

（ＮＨＫ側）

指摘いただいたＮＨＫスペシャルは切り口がとてもはっきりしていた。日本の対外ビジネスのあり方を中心に制作されていたが、指摘の通り脱炭素についてはいろいろな見方ができ、経済的な問題だけではない要素もあると思う。

○　１２月２０日（水）の「ニュースウオッチ９」で扱われた新幹線台車亀裂問題について。関係した会社の記者会見の映像から、会見者の態度に疑問を持つ部分があり、発言内容を活字だけで読むことと、実際に発言者が言葉を発している様子を映像で見るのとでは全く違う捉え方になると実感した。また、同日同番組でリニア談合事件が取り上げられた際、大手ゼネコン４社のロゴマークが表示されたが、１社を除きかなり解像度が荒いロゴマークが使用されていた。会社にとってビジュアルイメージは大事にしている部分だと思うが、公平性に欠けており、正しく報道されているようには感じなかった。

○　今月に入りアメリカ軍の事故が相次いでおり、そのたびに、原因究明や再発防止というフレーズを何回も聞く。しかしあっという間に米軍の訓練は再開され、また事故が起きるという繰り返しだ。沖縄に米軍基地があることや、事件事故でさえも当たり前と、住民自身も感覚がまひしてしまっている。基地が建設された過去の経緯が今日の問題につながっていることを全国に伝えることは難しいし、実際伝わっていないと感じる。そんな中、１２月２０日（水）の「ニュースウオッチ９」で扱われた米軍関連の報道は、事故に遭った学校への中傷が相次いでいることや、普天間基地の成り立ちなどを、住民の声や専門家の意見を交えながら取り上げていた。放送時間は長くはなかったが、こうしてちゃんと拾い上げてくれる、どうにか伝えようしてくれている報道関係者がいると実感し、番組を見て救われたような気持ちになった。インターネット上には真実ではない情報もあり、沖縄への誤解も広がっている中で、信頼があるＮＨＫが報道することで、少しでも沖縄の現状や課題は全国にも影響があることを、多くの人が自分の身に置き換えて想像できるようになってほしい。沖縄県域の放送では事件の事象を大変丁寧に報道している。ぜひ沖縄の声、歴史、現状の問題の背景まで、全国に届けていってほしい。

（ＮＨＫ側）

基地問題は、歴史的な経緯をしっかり伝えられるか、付随する多面的な見方をどこまで盛り込めるかを考慮しないと、誤解を生んだり、一方的な報道になりかねない。全国番組のような番組制作が頻繁にできればいいが、そうはいかず、日々のニュースで伝えようとすると、どうしても短くなってしまう。また、例えば、「基地の周りに住宅が密集している」と簡単に言ってしまうと、そこに住む人々が、基地のある地域にわざわざ好きで住んでいるという誤った印象を与えかねない。そういった部分は引き続き注意していきたい。多角的な見解を取り入れることについては、米軍の中での事情も同時に伝えないと、本当の基地問題の実相は捉えられない。

基地問題について深掘りすることは非常に重要だし、県民の方からもそのような声がある。一方で、基地問題以外の事象も沖縄では起きており、そういった内容に時間を割いてほしいという声もある。沖縄で取り組んでいる課題解決の事例を全国に向けて発信しているかというアンケートを取ると、非常に満足度が低い。限られた要員の中でバランスを取りながら、取材・制作していくことが必要だが、大変難しい。重要な課題であるため常に意識していきたい。

○　「視点・論点」は短い番組時間内で、視聴者にどれだけ内容が伝わっているのかが疑問だ。自分が専門のテーマでもよくわからないことがある。一方、番組ホームページはとてもわかりやすくすばらしいと思った。今後は番組視聴後、ホームページも見ていきたい。

（ＮＨＫ側）

「視点・論点」は専門的な内容が多いが、他の番組では聞けない話が多い。ホームページも内容をわかりやすく整理しているため、併せて見ていただきたい。

○　　１２月１６日（土）「ノーベル文学賞　カズオ・イシグロが語る世界」（ＢＳ１　後7:00～7:49）は、どっしりした見応えのある番組だった。ノーベル文学賞授賞式の前後にあった講演やスピーチを文章で読んでいたが、この番組も見たことで、演説の背後にある思想、イシグロさんが生まれ育ってきた背景をよく理解することができた。過去の記憶をきちんと見ること、分断の壁を越えること、ともに生きること

というメッセージが非常に明確に伝わって、2017 年のノーベル文学賞が与えられた意味、意義を考えることができたよい番組だった。インタビューだけで５０分だったが、あっという間に見終わった印象だった。

多くの人に見てもらいたいが、番組放送時間が午後７時からだった。非常に慌ただしい時間だし、恐らくこういう番組を見たい方は、毎日総合テレビで放送されている７時からのニュース番組も欠かさず見ると思うため、時間帯の設定が残念だと思った。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成２９年１１月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１６日（木)、ＮＨＫ福岡放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴した「ドキュメント　断層帯を行く～熊本地震 から１年半～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、１２月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	明石　　良	（宮崎大学副学長）
副委員長	山口　成美	（(有）シュシュ代表取締役）
委　　員	秋本　順子	（金属造形作家）
	大鋸　あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン（株）取締役放送部長）
	小役丸　秀一	（(株）グラノ２４Ｋ代表取締役）
	田川　大介	（株式会社西日本新聞社編集局総務）
	富田　めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
	長﨑　健一	（(株）長崎書店代表取締役社長）

（主な発言）

＜「ドキュメント　断層帯を行く～熊本地震 から１年半～」
（総合　１０月２０日（金）　熊本局制作）について＞

○　断層帯を巡る二人の歩みによって、熊本地震を経験された方々の日常が、視聴者の目線で描かれていると感じた。代々受け継いだ土地で、地域の方々と育んできた暮らしの中で起きた地震であり、自らが主体となって行動する姿を見て、自分の身に置き換えて見ることができた。これまでの番組では、熊本城の壊れた石垣などに注目することが多かったが、今回の番組では冒頭から城全体をふかんするように見せており、前向きで明るさを感じさせるドキュメントだった。

出演者については、ヒロシさんは芸人としては暗い印象だったが、ボランティアとして地域の方々と交流する場面では、邪魔にならないような気配りもしており、ボランティアのあり方など、非常に勉強になった。また、「未来への教訓」という言葉もあり、被災地のドキュメントでありながら、前向きで温かい印象で、番組を見終えた後、爽やかさを感じるドキュメントだった。

地震から一年半が経過しても、復興が進んでいない現状があることは理解できたが、被災地の将来を考えると、自治体としての今後の展望などがあれば、地域のためにも良かったと思う。

○　震災後報道が少なくなると、視聴者としては復興が進んでいるのかと思いがちだが、このような番組を見ると、まだまだだと感じさせられる。多様な方々に取材をしたことで、熊本全体ではなく、個々の一人一人の日々の営みがあり、命があることを感じることができた。熊本出身の橋本愛さんのナレーションが、押しつけがましくなくとても爽やかだった。番組を２回見たが、旅人として出演していた２人のうち、辰野勇さんは、１回目に見たときから話し方が自然で大変好感が持てた。一方ヒロシさんは、率直な意見を述べていたのだとは思うが、被災された方に対して大変ぶっきらぼうで、配慮が足りない物言いをしていると感じる部分もあった。しかし、２回目に見たときに、なぜ自分はヒロシさんの言葉や態度に引っかかる部分があるのかと改めて考えてみると、それが自分を投影していたからではないかと思った。自分もボランティア活動をした際、現場での立ち回りや、被災者の方にかける言葉がわからなかったため、そのような一般の方の気持ちを、そのまま番組に反映していたのではないかと思った。このようなことまで考えた上で対象的な二人をキャスティングしたのだとしたら、大変見事だと思う。行政としての今後の展望が見えないという意見もあったが、今回の番組ではその要素までは入りきらなかったと思うので、また別の番組として、熊本の今後を追いかけてもらいたい。

○　大分県も熊本地震の影響で一部被災した地域があったが、自分の住んでいる地域には活断層がなく安心して暮らしていた。しかし、今回実際に断層の怖さを映像で見て、熊本地震をひと事のように捉えていたことを反省した。

番組の冒頭、イントロと共に始まったナレーションは、タイトルとギャップを感じるほど穏やかで、辰野さんも優しい語り口だったため、実際に自分もそこに行ったらどう感じるかということを思いながら見ることができた。断層についての知識がなくても、断層を身近に感じることができた番組だった。

一番印象に残ったのは、「想定外の想定を想定しなければならない」という言葉だ。多くの被災者の治療にあたった熊本の病院の実例から、トリアージタッグについても知ることができ、病院側が下さなければならない決断の大変さも伝わってきた。また、厳しい現状の中で復興に向けて取り組んでいる方々が、あまりにも笑顔で前向きだったため、偶然の出会いではなく、これらの方々を選んだのかと思うくらいだった。実際に復興に向けた取り組みの中で生きている方々の力強さを感じた。

ヒロシさんの言葉に最初は違和感があったが、取材した方の肩にそっと手を添える場面があり、彼も実際に被災地に暮らす人々と会って話をしながら、現実を見て

いったのかと感じ、心を打たれた。自分としても被災地の現状を見る機会が少なかったため、現状を把握することができてよかった。

○　断層帯に沿って歩くという番組のコンセプトが非常に興味深く、その中で前を向いて生活していく方々の声や現状を知ることができでよかった。一番印象に残ったのは、飲食業を営んでいた方の建物が全壊の判定を受けたが、新しく建て直すことができないため解体をしなかったというエピソードだ。ご自身で行っている補修で耐震が保てるのか疑問だったが、希望と現実のはざまで、それをどう乗り越えるのかを考えているのだと思うので、あの方の今後もぜひ知りたいと思う。先日見た１０月１３日（金）なるほど実感報道ドドド！「“見えない”被災者を追って～熊本地震から１年半～」では、避難者の知られざる実態をテーマにしており、両方の番組を見たことで、視聴者として熊本地震に対する知識の積み重ねができた。視聴側も制作側も、同じテーマの積み重ねが非常に大切だと感じた。

○　タイトルから、“またメカニズム物か”と思い見始めたが、地域の方々に取材した人間ドラマで、非常に目線が低く、地元の記者、ディレクターが手がけた、温もりを感じさせる番組だった。橋本さんの非常にゆっくりで、おっとりしたナレーションが印象的で、「ドキュメント７２時間」を思わせるような始まりだった。１年半というのは一見中途半端に感じるが、節目ではなくまさに通過点にいる人たちを描いており、それぞれが被災した現実を悲しみつつも、希望を抱いて生きていることが伝わってきた。二人の“旅人”目線により、自分も一緒に歩いているような追体験ができる思いがした。印象に残っているのは「想定外の想定を想定しなければならない」という言葉だ。

番組内に“復興に向けて頑張りたい”という前向きな姿勢の方しか出ていなかった点がやや残念だった。視聴者の関心を引き付けるのは意外性であり、想定された話以外にも、もっと多様な人々を見せてもらえればと思う。そつなくまとめられているような物足りなさも感じたが、全体的には良い番組だった思う。

○　断層が動いたことで水路がずれたことがはっきりとわかる映像があった。このような被害はいち早く元の姿に戻し、農業の作業効率の面からも復旧を進めていきたいと考えると思うが、熊本地震を後世に語り継いでいくため、あえてそのまま残したいという気持ちも理解できる。全壊判定を受けてもなお建物の解体をしなかった方がいたが、たとえ建物自体を修理しても、そこに行くまでの道も被害を受けており、周辺の道路の整備も合わせて復旧が必要だし、街の中心部から復旧が進んでいくということは、周辺地域の復旧にはさらに時間がかかると思う。牛を育てるため

の牧草を作るにしても、野焼きだけでなく、山を少し平らにする必要もあり、復旧にはまだ時間がかかると思われる。これらがどのように復興していくのか、引き続き取材をしてもらえればと思う。

○　自分も熊本地震から約１年後に断層帯の近くに行った。１年近くたつのにこんなにも復旧が進んでいないのかとがく然としたことを思い出した。

ヒロシさんが、「住んでいる人でなければわからない、話を聞かなければわからない」とコメントをしており、熊本出身のタレントとして、負い目のようなものがどこかにあり、今回の旅でそれを解消したいという気持ちがあったのだろうと感じた。経験と知識が豊富で穏やかな辰野さんと、等身大で現地の方々とコミュニケーションをとるヒロシさんの二人が、大変よいキャスティングだったと思う。橋本愛さんのナレーションも、熊本出身者としての思いが適度に出ており好感を持った。後世のことを考え、あえてずれた水路をそのままにしたり、危険がある中で伝統の野焼きを絶やさず後継者に引き継ぐといった現地の方々の気持ちが、端々から感じられた。

病院が被災した際、通路を診療スペースにした機転は大変感心したが、隣接する本館と救急棟で被害の差が出たことに、今後の緊急性の高い施設設計のあり方の解が示されているような気がし、建築や設計の常識が変わっていくのだろうと感じた。また、復旧のめどがついていない温泉旅館の話では、誰が見ていないときでもこんこんと湯が湧き出ており、湧き出る湯のように復旧に向けて取り組み続けるしかないという趣旨の言葉が心に刺さり感銘を受けた。エンディングに辰野勇さんの笛の演奏をとても上手に活用しており、大変きれいな終わり方をしていたと感じた。

○　これまで熊本地震の復興を取り上げた番組はいくつかあったが、取材内容ではなく、取材地である“断層”に焦点を当てていたことはおもしろかった。しかし、いきなり断層を歩くというのは非常に危険なことで、かつ断層帯を歩きながらその地を見ていくことで、何を伝えたいのか、結論が中途半端にも感じた。復興を主題とするのであれば、「一番地震の激しかった断層地帯に沿って取材を進めてみる」という切り口の方が良かったのではないか。断層帯に沿って歩くとすると、実際に断層は大分県まで続いており、それ以外の断層も数多く存在する。伝えたいことがやや中途半端になった部分はあるが、全体としては非常におもしろい番組だった。

○　１年半たった今も、被災地で暮らす人々を見て重たい感情になった。

ヒロシさんのトークが、一部ぶっきらぼうに感じた。「どうして被災地を離れないのか」という問いかけは、住んでいる人を批判しているようにも感じた。しかしその中には、明解に答えられない重い思いを、映像でも音声でもなく、はっきり伝え

られないことがあることがわかり、被災者に対してどうしようもない、どうにかしたい、という悶々とした気持ちが伝わってきた。日本中に活断層がある中、自分は建築業を営んでいる。生きていくことを応援できる仕事がしたいと思った。番組のタイトルが“活断層”ではなく“断層”であることに、熊本地震が起きる前と後のはざまという意味が込められているように感じた。

○　現状を映しながら、被災地の人々がたくましく、前向きに生きていく姿を捉えていてよかった。緊急医療において、想定外のことを想定内と捉え、今回のノウハウを蓄積し、また大きな問題に直面した際、それらが活かされていくことを実感した。全体を通して途切れることのない素晴らしい構成であり、改めて熊本地震からの教訓を教えてくれるいい番組であった。今後の生活の参考になった。

（ＮＨＫ側）

頂いた意見の中にもあったが、被災者を後押しするような気持ちを込め、前向きに制作した部分が出すぎたことは自分でも感じた。実際には厳しい現実もたくさんある。今回描ききれなかった、厳しい面を真正面から取材する番組も含め、これから長年に渡る覚悟で継続的に取材していきたい。

（ＮＨＫ側）

一見復興が進んでいるように見える熊本だが、番組を通して熊本地震の影響の大きさをわかっていただけたのではないかと思う。熊本地震に関する情報発信の量が減ってきていることは事実で、報道が少なくなると、世間からはもう大丈夫だと思われる。よって、引き続き継続的に伝えることが我々に求められていると思っている。一方で、熊本には明るい方が多く、くじけず前向きにやっていく姿を描いていくことも復興のために必要だ。熊本地震からの教訓はたくさんある。断層は日本全国にあると思うので、この教訓を伝えていくことが必要だし、使命だと感じている。１年半が過ぎたが、２年の節目も近づいている。今日いただいた意見を踏まえ、引き続き番組づくりに挑んでいきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１１日（水）に新燃岳が噴火した際、当日の噴煙の模様と共に６年前の爆

発的噴火の模様が映し出された。霧島市地区一帯が被災したかのように捉えられ、霧島地区の観光は風評被害を受けた。風評被害につながらないように、十分配慮しながら災害報道を行ってもらいたい。

○　１１月３日（金）「ゴッホは日本の夢を見た」（総合　前 10:05～10:53）を見た。「私の絵の全ては日本の芸術の上に成り立っている」とゴッホに言わしめた浮世絵をはじめとする、当時の日本の芸術のすごさを感じた。一番印象的だったのは、圧倒的な絵の力と映像美だ。絵を取り上げた番組は、逆立ちしても本物にはかなわないというイメージがあったが、今回は、おそらく照明なども工夫がされており、筆圧まで伝わるようなすばらしい映像で、その絵が表現する説得力などを強く感じた。ゴッホはその生涯でエキセントリックな部分が強調されがちだが、希望や明るさが描かれた絵も紹介されており、それらを映像からしっかりと感じとれた。2018 年にフランスのパリで、「ジャポニスム 2018」という企画もあるため、美しい映像の力をもって、現代の日本文化が世界にどんな影響を与えているのかをぜひ深く取り上げていただきたい。

○　１１月６日（月）プロフェッショナル　仕事の流儀「大相撲　裏方スペシャル」を見た。「差し違えたら切腹」する思いで行司に挑んでいる立行事の方や、力士によって髪質やくせが違う中いまだに新弟子の気持ちで髪を結う床山さん、胸の病気を克服した末に立呼び出しをされている方など、普段特集などはあまりされない裏方の仕事が非常に細かく取材されており、新たな感動があった。力士ばかりに注目するのではなく、裏方にも注目して九州場所を楽しみたい。

○　１１月１２日（日）ＮＨＫスペシャル「追跡　パラダイスペーパー 疑惑の資産隠しを暴け」は、各国のメディアと共同で分析し追跡しているところが、ＮＨＫならではのスケールの大きさだった。一方、パナマ文書報道に携わった女性記者が暗殺されるという事件もあり、報じる、知らせる、事によっては暴くということは、記者の命をかけた闘いでもあると感じた。今後もこのような報道に期待したい。

○　連続テレビ小説「わろんてんか」の中で、「端席」や「席主」といった、難しくなかなか聞き取れない言葉に対し、テロップを表示していた。要所要所にこのようなテロップを出して補完してくれると、視聴者としては大変理解しやすく、また好奇心も広がっていく。非常に良い情報だと思うので、今後もぜひ続けてもらいたい。

○　自分の周りでは、「ＬＩＦＥ！～人生に捧げるコント～」の評判が良い。出演されている内村光良さんが紅白歌合戦総合司会に決定し、その人気も納得した。放送が

とても楽しみだ。連続テレビ小説「わろてんか」もおもしろくなってきて、コントやライフイノベーションの時代が来ているのだなと思った。

○　９人の遺体が見つかった神奈川県座間市の事件で、被害者の顔写真と実名報道について、ＮＨＫは基本に沿った報道をしていると思う。被害者の実名報道、顔写真の使用についてどう考えていくか。憲法に保障された知る権利に仕えるということ、公益性とご遺族の気持ちなど、悩み抜き報道されている思うが、これらを視聴者の方々と一緒に考える、知ってもらう機会がないものかと思いながらＮＨＫのニュースを見た。公共放送もワイドショーとは違い、何か報道の基準を視聴者に問いかけられたら良いと感じている。

（ＮＨＫ側）

実名報道が原則であることを基本に、編集方針を立てている。ご遺族、ご家族に配慮をしながら、その中で事実がはっきり伝わる形で、バランスをとりながら報道をしていきたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫとしては、遺族感情や関係者のプライバシーに配慮はしつつも、自分達の責任で判断を下し、正確な情報を伝えることが大原則だ。

○　１１月５日（日）サイエンスＺＥＲＯ「“人類の夢の技術”（１）タイムマシンは実現するのか！？」を見た。サイエンスＺＥＲＯは時々視聴しているが、公開収録の回を見るのは初めてだった。幅広い年代の方が参加しており、解説の先生が会場に対してクイズを出したり、質問を受けたりして、公開収録ならではの和やかな雰囲気が伝わってきた。タイムマシンで未来に行くことについて、相対性理論を用いて説明をされていたが、さらに分かりやすくなるよう、浦島太郎の話を例えに出したり、子供やサイエンスの知識が少ない人に対しても配慮された内容になっていた。

○　ラジオ第１放送で「すっぴん！」をよく聞いており、中でも「お天気メンバー」のコーナーは、ラジオの生放送ならではの楽しさがある。１１月８日（水）の「お天気メンバー」では、出演された方が親子で作ったパンドーラで生演奏をしていた。無事に演奏が終わるかハラハラさせられたし、実際に生放送で演奏している空気感がよく伝わってきた。普段は仕事をしながら聞いているが、手を止めてじっくり聞きたくなるくらい、ラジオはおもしろい番組が多いと感じる。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成２９年１０月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１９日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴した「ＧＯ！ＧＯ！フィルムタウン　～北九州発地域ドラマ～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、１１月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	明石　　良	（宮崎大学副学長）
副委員長	山口　成美	（（有）シュシュ代表取締役）
委　　員	秋本　順子	（金属造形作家）
	大鋸　あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン（株）取締役放送部長）
	籠田　淳子	（（有）ゼムケンサービス代表取締役）
	小役丸　秀一	（（株）グラノ２４Ｋ代表取締役）
	田川　大介	（株式会社西日本新聞社編集局総務）
	富田　めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
	長﨑　健一	（（株）長崎書店代表取締役社長）
	山元　紀子	（霧島高原ビール（株）代表取締役）

（主な発言）

＜「ＧＯ！ＧＯ！フィルムタウン　～北九州発地域ドラマ～」
（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　１０月１８日（水）　北九州局制作）について＞

○　主人公の方の演技がオーバーアクションに感じ、違和感があった。ドラマの中では映画の街としての北九州を描いていたのだと思うが、八幡の人は製鉄所に対して誇りを持っており、製鉄の街ならではの映像や、新日本風土記「北九州」で紹介されたように、製鉄所の三交代勤務を終えた人々が角打ちで飲むシーンなどを取り入れていれば、より北九州らしいドラマになったのではと感じた。

差し入れのシーンで登場したぬか炊きや、ぼた餅は北九州独特の食文化だが、北九州以外の方々にはどんなものか伝わりにくいと思うので、ドラマの中でもう少し具体的な説明があったほうが良かったと思う。

映画監督役の藤本隆宏さんは、「スペシャルドラマ　坂の上の雲」での海軍軍人のきりっとしたイメージが強かったが、その時とは違う雰囲気の役を演じており、感

心した。また、映画の主人公２人とエキストラ 1,000 人を空撮した最後のシーンが大変印象に残った。

北九州出身の松尾スズキさんが出演していた木曜時代劇「ちかえもん」がとてもおもしろかった。次回北九州でドラマを制作する機会があれば、ぜひ出演してほしいと思う。

全体的には、北九州の明るさがよく表れているドラマだった。モデルとなった北九州市のフィルム･コミッションは、ドラマで描かれたように、実際に熱心にロケの誘致活動を行っており、ロケ地の確保などで大変頑張っている。北九州では「ドラマや映画に出演したことがある」という話を市民からよく耳にする。市民にとってもフィルム･コミッションは身近な存在で、今回のドラマは北九州市民にとっても、よいドラマだったと思う。

○　子どもの頃、門司港で撮影された映画がきっかけで、地域に興味を持ったことがあった。しかし、今回のドラマはあくまでも監督の抱える問題と主人公の明るさがテーマであるように感じ、地域ドラマとして何を伝えたかったのがわかりにくかった。地域特有の問題点や、地域の方々が理解してもらいたいと感じていることなどを織り交ぜながら、市民とフィルム･コミッションの関係性なども描いてほしかったと思う。ドラマの中で登場した北九州名物の食べ物も、北九州をアピールしていくのであれば、もう少し説明を加えて地域性を出していればよかったと思う。

私自身は主人公の演技を少し大げさに感じたが、一緒に視聴していた息子は“演技がとても一生懸命で、これから活躍するのではないか”との印象を抱いており、視聴する世代によって感じ方が違うことから、これが今のテレビや映画の表現方法なのかと思った。北九州で育った身として、懐かしい思いをさせてもらったし、これからの北九州市が、このドラマに描かれたような形で発展していくことを予感させる番組だった。

○　北九州を舞台に番組が制作されたことがとてもうれしかった。地元の人も同じ気持ちだったと思う。

“コメディーで、心温まるストーリー”と紹介されていたが、表現方法が表面的に感じた。名物の食べ物や名所が紹介されるシーンもきれいに見せているところがかえって北九州らしくない感じを受けた。もう少し北九州らしい人間味や情を感じる部分があれば、心温まる部分をつかめたと思う。一般の方が制作に携わるのは難しいと思うが、“地域発”だからこそ、エキストラ以外の形で市民をドラマ制作に参加させてもよかったと思う。

冒頭で主人公が仕事を頑張りすぎるシーンがあり、一瞬ＮＨＫ職員が過労死したことと重ねてしまった。しかし今問題なのは、今まで自らが一生懸命仕事をしてい

た世代が若い人を指導する際、過度な労働を強いてしまうことではないかとも思う。最終的には、主人公が情熱的に仕事を楽しんでいる姿がとても爽やかで、仕事に対する姿勢はこうあるべきだと感じた。

○　1,000 人のエキストラが出演した最後のシーンはとてもよかった。しかし、ドラマ前半では物語の方向性があまり見えなかった。

地元の魅力的な風景が紹介されていたが、あまり時間がかけられておらず、この番組を見て北九州に行きたいとはあまり思えなかった。ぬか炊きが取り上げられた際も、名称が聞き取れなかったし、味わうシーンや紹介もない。角打ちのシーンもあっという間に終わったように感じ、北九州をアピールする番組と思っていたのに大事な部分が無いように感じた。製鉄所をアピールするなど、北九州の魅力をもっと盛り込んだ方が、より楽しい雰囲気のある番組になると思った。

○　全編天気がよく映像がきれいだと感じた。私自身は北九州を訪れたことがないが、旅をしたような気分が味わえ、ちょっとした粗さや強引さも含め、“地域ドラマ”ならではの楽しみがあった。

全国規模のドラマや民放のドラマは人気タレントや芸人で主役が固められており、役そのものよりも、出演者のイメージが先行してドラマを楽しめないところがあるが、地域発のドラマは、ローカルの役者がたくさん出演しているためか、余計なイメージにとらわれず、役そのものを楽しめてよかった。映画監督役の藤本さんに関しては、あとから北九州出身だとわかり納得したが、これまで一本気な役が多かった印象があり、ひと癖もふた癖もある苦悩する監督役に適していたのかが疑問だった。名は通っていなくても、地元の実力のある舞台役者などを起用することで、さらに地域ドラマならではの味が出せたと思う。

北九州市のフィルム･コミッションの仕事ぶりは沖縄でも有名で、沖縄のフィルム･コミッションもかなわないと言っているが、そのように言われる理由がわからなかった。このドラマでその理由がわかるのではと楽しみにしていたが、今回は、起きる事象が映画の撮影現場であればどこでも起こりえることで、北九州市のフィルム･コミッションならではの困難の乗り越え方があまり見えてこなかった。小さな出来事でもいいから北九州市のフィルム･コミッションらしさが織り込まれていると、さすが北九州だと思えるドラマになったと思う。

○　エンディングの空撮のシーンが心に残った。見終わったあと、涙が流れるようなとてもすがすがしい気持ちになった。コメディータッチの、ちょっとした間や、くすっとなるような演出が好きで、主人公の多様な表情や、正直で一生懸命、おっちょこちょいで抜けたところがあるという役柄に非常に親しみを持て、上手に演じてい

ると思った。藤本さんが演じていた映画監督役の挙動もかなりオーバーだったが、その加減が今回の地域ドラマをより楽しく、親しみやすいものとした一つの軸だと感じた。

先ほど、北九州市のフィルム･コミッションでのエキストラは8,000人登録されていると説明があったが、そんなに大きな組織だとは知らず、非常に感心した。そういった数字も情報としてドラマに組み込まれていると、実態を知らない視聴者にとってはインパクトがあると思う。

フィルム･コミッションの事務局次長の「ノーと言わないのが北九州フィルム･コミッション、不可能を可能にするのが北九州フィルム･コミッション」というせりふは、かなり強い自信と自負の表れだと思うし、実際に熱い現場だと感心した。

音楽や効果音で、心情や停滞する現場の迷走などをセンスよく表現していた。若い視聴者に好まれると思う。ドラマの端々に出てきた映画のポスターも工夫されていて感心した。細かい部分にも手を抜かないところがＮＨＫらしかった。角打ちの場面が何回かあったが、自分自身は角打ちに行った経験がないが、視聴者に北九州らしさを感じさせる効果はあったと思う。今後も九州各県の地域ドラマを非常に楽しみにしている。

○　主人公の演技がとても自然でかわいく、非常に好感が持てた。“鉄の街”から“映画の街”へ変貌する実態を盛り込んでいたり、地域の人たちがたくさん出演している点もよかった。北九州という土地や、実際のフィルム・コミッションの歴史などを盛り込んでいたらさらによかったと思った。

ドラマの終盤、劇中で撮影している映画の主人公が、市民に導かれながら妻に会うシーンは、市民と一緒に走るシーンが多く、少し雑な印象を受けた。また、エキストラの集め方が電話やビラを配るという方法だったが、現代が舞台ならばＳＮＳを使って発信するものではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

制作側としては、ＳＮＳなどでエキストラを呼びかけたうえで、念を押す意味での電話やビラ配りだという意図だったが、うまく伝わらなかったようだ。

○　ストーリーに意外性がなく、展開に粗雑なところがあり視聴し続けるのがつらかった。冒頭部分を少し見ただけで内容の予想ができた。落ち込んでいる女優が主人公の失恋話を聞いてすぐ立ち直ったり、映画の内容が定まらず苦しんでいる監督が、夜の街で市民の笑顔を見てひらめくシーンなどの展開についていけなかった。

また、誰に向けて作ったドラマなのか、メッセージが何かわからなかった。北九

州市民を喜ばせるためか、それとも、北九州を素材に、北九州局の底力を全国に示そうとしたのか。北九州の市役所や市民の方は喜ぶと思うが、再三登場する名所のシーンに、若干胸焼けも感じた。“地域ドラマ”とは一体何なのかと考えさせられた。最後の結婚式のシーンも含めて、北九州出身ではない自分には共感できなかった。

しかしながら、北九州の今を見てもらうための、そして市民が主役であるドラマだという視点で制作したのであれば、目的は達成されたのではないかと思った。

○　「フィルム・コミッション」という単語は、観光業に携わっている人間は聞き慣れているが、初めて聞く人は意味がわからなかったのではないかと思う。

北九州フィルム・コミッションの頑張りは本当にすごいと思った。途中視聴しているのがつらい部分もあったが、最終的には市民が主役のドラマであるということがわかり、爽やかさだけは残った。また、フィルム・コミッションが地域に密着し、市民を巻き込みながら街全体を売り出している活動はすばらしいと思った。

○　北九州市は今、一生懸命変わろうとしており、その変わろうとする姿を描いたのが今回のドラマだとの印象を持った。かつての義理と人情の北九州から、映画を通じた北九州となり、世界に羽ばたこうという一生懸命さは伝わった。ぬか炊きや角打ちなど、自分自身が大好きなものが紹介されたのはうれしかったものの、北九州市のいい部分を示そうと思うばかり、逆に北九州市を知らない人にとっては伝わりにくい部分が多くなったと感じた。

（ＮＨＫ側）

今回のドラマ制作でいちばん苦労したのは脚本だった。北九州局に着任して以来、さまざまな番組を作るうちに北九州の魅力をたくさん知ることができた。それらを脚本に盛り込んだうえで北九州フィルム・コミッションが登場するという内容を思い描いたが、なかなか北九州の魅力を物語に盛り込めていないことは制作の過程で感じていた。ただ、今回のドラマは１時間の番組。長いようで短く、全てを盛り込むことは難しい。例えばぬか炊きという知らない食べ物が出てきたら、ドラマ内の中で説明せずとも、今の若い世代の視聴者はすぐに自分で調べる。北九州を題材にしたドキュメンタリーも制作したことがあるが、ドキュメンタリーとドラマは役割が違う。ドキュメンタリー番組を見たうえで、今回のドラマを見てもらうと、北九州という街の深い理解につながると思う。

（ＮＨＫ側）

展開に無理がある、内容が表面的、などといった意見は、制作側が危惧していた部分でもあった。しかし、例えばぬか炊きの詳細などは、１０月１３日（金）「ＢＳコンシェルジュ」（総合 後0:20～0:43）の中で取り上げている。創作料理の作り方や、北九州フィルム・コミッションが全国の自治体に先駆けて始めた取り組みなども盛り込み、ドラマでは紹介できなかった“北九州愛”を補足できる内容として制作した。ドラマとあわせた取り組みとして紹介させていただく。

＜放送番組一般について＞

○　９月１８日（月）ありのままの最期「末期がんの“看取（みと）り医師”　死までの４５０日」（総合 後 10:50～11:40）は、職場でつい引き込まれて見てしまい、再放送も含めてじっくり見た。終末医療は新聞でも掲載をすると非常に反響が大きい分野だ。ネットのウェブサイトを見ても、この番組は非常によい評価が書かれており、さすがＮＨＫだと思った。

番組の最後は“死はきれいごとではない”という終わり方だったが、どこかすっきりとしなかった。理由を考えると、テレビカメラが入っていたということが、無意識に影響したからではないかと思った。“亡くなる瞬間まで撮る”という約束は制作側と夫婦の間であっただろうし、亡くなる直前、撮影クルーが現場に到着するまでの間、心臓マッサージや注射で延命を試みた奥様の行為も、長期間密着した制作側と夫婦間に信頼関係があったからこそだと思う。これからもＮＨＫのドキュメンタリーには期待しているが、番組を放送する上で避けられないものがあることはわかってほしいし、そういった視点を持ち続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

ドキュメンタリー撮影時、制作側と取材対象の距離感の保ち方は非常に難しい。制作者は最も悩むところであり、各番組でそれぞれが真剣に考えている部分でもある。

○　９月３０日（土）ＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　プロローグ「神秘の巨大ネットワーク」（総合 後 9:00～9:59）を見た。臓器内のネットワークをひもとく内容だったが、再生医療や創薬の話においては医学以外の分野も取り上げられていた。中には農学部に在籍経験のある出演者もおり、実際に患者を診ることはできなくと

も、医学でなかなか取り組むことができない基礎系について、農学系や工学系の分野でできる部分が多くあり、番組ではそれらをうまくまとめていた。出演者の山中伸弥教授とタモリさんの選定も良く、番組内のＣＧも非常にリアルですばらしかった。次回もぜひ見たい。

○　１０月２日（月）プロフェッショナル　仕事の流儀「まっすぐ稼げ！あくなき野心～経営者・松本晃～」で、松本さんが何でも取材してよいというスタンスで“経営者はほらを吹け”と言っている姿が見事だった。経営者としての裏表もしっかり伝えていてすばらしい番組だった。

○　１０月４日（水）のファミリーヒストリー「西田敏行～二人の母　二人の父～」（総合 後 10:00～11:15）を見て、西田さんの祖先、西田源左衛門さんのお屋敷が鹿児島にあることが番組を通じてわかった。自分の地元とのつながりを感じ、ドラマチックな体験をさせてもらった。

○　１０月６日（金）の歴史秘話ヒストリア「浅井長政　戦国ぽっちゃり男子の愛と誠」と、１０月１３日（金）歴史秘話ヒストリア「聖徳太子の棺　伝説のその先へ」を見た。「歴史秘話ヒストリア」は時代劇とは違い、事実を検証し直したり、実際にあった事実がまとめられていてわかりやすい。「浅井長政　戦国ぽっちゃり男子の愛と誠」では、若い世代への取材から歴史の説明に入り、浅井長政の人生を描いていく番組構成に引き込まれた。「聖徳太子の棺　伝説のその先へ」では、釈迦三尊像の作り方の分析によって時代や聖徳太子の身長を検証したり、聖徳太子の棺が非常に高貴な作りであることがわかった理由など、新しい歴史の捉え方をしていて興味深く見ることができた。歴史は得意ではないが、興味を持って２週連続で視聴することができた。今までの放送内容をインターネットでも閲覧できるため、これから勉強していきたい。

○　１０月１２日（木）「イブニング長崎」を見た。地域の特産品を加工したり、企業での商品化を考える地元の高校生にスポットが当てられていた。高校生にスポットを当てたことで、保護者も含めて見てもらえる番組になるし、地域を愛する若年層が地域ブランドを作り出すという番組に仕上がっており、和やかな雰囲気が描かれていた。視聴率にとらわれず、小さな話題であっても、地域の問題解決と魅力の向上につながる番組を放送したことはよかった。今後も取り組んでいってほしい。

○　１０月６日（金）なるほど実感報道ドドド！「被災地　それぞれの“葛藤”～九州北部豪雨から３か月～」、１０月１３日（金）なるほど実感報道ドドド！「“見え

ない”被災者を追って～熊本地震から１年半～」を見た。お茶の間でテレビを見ている方が、気づかないといけないこと、九州で生活している中で知らなければいけないことをわかりやすく、目線を低く説明していてすばらしかった。特に「“見えない”被災者を追って～熊本地震から１年半～」では、ゲストの２人が、“今もなおこんな状況なんですね”、“全然理解していなかった”とコメントしており、これに尽きると思った。視聴者が気づいていない現実を伝えており、公共放送の地域番組として必要な情報を提供していると感じた。

○　なるほど実感報道ドドド！「“見えない”被災者を追って～熊本地震から１年半～」を見た。知られざる避難者の実態が広く認知されるきっかけとなったと思う。行政も実態を把握ができていないと出演者の方が言っていたが、逆にそれはなぜなのか、行政側の意見も聞きたかった。また、アルコールに頼る避難者が紹介されていたが、アルコールを飲む一連の動作が上手く撮影され過ぎている気がし、本当に取材中に自らアルコールを飲むのだろうかと疑問に思った。

○　なるほど実感報道ドドド！「“見えない”被災者を追って～熊本地震から１年半～」を非常に興味深く見た。現在の熊本の状態と課題を取り上げており、今後も継続的に報道してほしい。出演者が“現状を理解できていなかった”と言っていたが、これは熊本県住民にも当てはまる。各人の被災状況もかなり度合いが違うため、報道し続けることが大変重要であると感じた。テーマである被災者も対象をしぼり、それを支援する側の活動もわかりやすい事例をあげてよくまとまっていた。今回タッチパネル型のディスプレイが導入されていて、大変リズミカルな説明になっていた。しかし、最後にアナウンサーが何かをパネルに書き込もうとした際、うまく操作できず断念していた。生放送ならではのドキドキ感はあったが、そこはやはり練習をしてスムーズな番組進行をしてもらうと、視聴者としては集中して番組を視聴することができると感じた。

○　１０月７日（土）のＥＴＶ特集　アンコール「告白～満蒙開拓団の女たち～」～平成２９年度文化庁芸術祭参加～を見た。終戦直後、満州に渡った周辺の地域の開拓団が自決していく中で、黒川開拓団では未婚女性たちが、ソ連兵たちの性の相手をすることと引き換えに守ってもらったという史実に基づくものだった。存命している９０代の方々が衝撃的な内容の証言をしていることが印象に残り、番組では現代を生きる自分たちからは考えられない、表面的には見えない戦争の残酷さを取材し丁寧に描いていた。ＮＨＫではないと制作できない内容だと感じ、一緒に番組を視聴した人とも、このような事実があったこと、そして“戦争はしてはいけない”ということを再確認し合った。最後には涙を流すくらい感銘を受けた。

○　１０月８日（日）「カズオ・イシグロ　文学白熱教室」（Ｅテレ　後 11:00～11:55）を見た。カズオ・イシグロが好きだが、肉声を聞いたのはこれが初めてだった。彼の生い立ちや創作の手法、哲学を聞くことができとてもよかった。番組内の聞き手の学生たちからは、学生らしい、幼かったり、少し意地悪な質問があったりもしたが、全てにとても丁寧に答えていた。有意義な時間を過ごしたという最後のコメントからも彼の真摯（しんし）な姿がうかがえ、再放送をしてもらえてよかったと思った。一方、自分はカズオ・イシグロが好きなのに、なぜ本放送を見ていなかったのだろうと思った。テレビは最新の情報を伝えることができることが良い部分だが、時代を越え普遍的な魅力を持つ番組は、ＮＨＫの財産でもあり、同時に国民の財産でもあると思う。そういった番組は折りに触れて放送してほしい。オンデマンドでは、能動的に行動しないと番組にはたどりつけない。こういった番組は何気なくテレビを見ている人にこそ見てほしい。著作権や再放送料など難しい問題はあると思うが、新番組と再放送番組をバランスよく編成してほしい。

○　ＮＨＫ女性職員の過労死のニュースが気になった。各社の報道を見たが、結局遺族とＮＨＫの言い分が食い違ったままで、視聴者として消化不良を感じる。遺族が公表を望まなかったとしても、社会的影響が大きい問題は匿名で事実を報道すべきだし、二度と繰り返さないためにも、自らが公表、調査し、検証番組などで視聴者に説明することが、報道側としての正しい道なのではないか。視聴者によい番組を届けたい一心で、皆さんみずから働いていると思うため、どう表現するかは難しいと思う。しかしそれでは結局メンタルや体が強い人しか生き残れないことになってしまう。働き方改革はこれからの社会が抱える大きな問題であるため、ＮＨＫも今後いろんな検証番組を作ってほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの女性記者が亡くなり労災認定されたことについて、ご指摘を頂いた。真摯（しんし）に受け止めたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成２９年９月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２１日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「平成２９年度後半期の国内放送番組の編成」について有吉編成局編成主幹から説明があり、「平成３０年度の番組改定」について意見交換を行った。そして、「平成２９年度後半期の九州沖縄地方の番組」について岩本編成専任部長から説明があった。

続いて、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	明石　　良	（宮崎大学副学長）
副委員長	山口　成美	（（有）シュシュ代表取締役）
委　　員	秋本　順子	（金属造形作家）
	大鋸　あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン（株）取締役放送部長）
	籠田　淳子	（（有）ゼムケンサービス代表取締役）
	小役丸　秀一	（（株）グラノ２４Ｋ代表取締役）
	富田　めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
	長﨑　健一	（（株）長崎書店代表取締役社長）
	山元　紀子	（霧島高原ビール（株）代表取締役）

（主な発言）

＜「平成２９年度後半期の国内放送番組の編成」および
「平成３０年度の番組改定」について＞

○　１０月４日(水)から始まる「ねほりんぱほりん」(Ｅテレ 後11:00～11:29:30)は、この番組審議会の中でも放送再開を望む声が非常に多かった。委員の皆さんも期待していると思う。

○　「バリバラ」などで発達障害について取り上げているが、今まで知らなかったものが見えてきてわかりやすい。障害がある方と一緒に仕事をする際、より理解が深まりよいと思う。今後も継続してほしい。

（ＮＨＫ側）

「バリバラ」の担当者は、どんどん新しいチャレンジをしていきたいと言っている。また「ハートネットＴＶ」でも“Ｂ面談義”という、さまざまな障害を持った方が出演するトーク番組を放送したが、全編笑いに満ちた新鮮な番組だった。５月２１日(日)ＮＨＫスペシャル「発達障害～解明される未知の世界～」放送後は、再放送の希望が１万件以上来るなど、大変大きな反響があった。今後もさまざまな形で共生社会を考えるきっかけになる番組を作っていこうと、来年度に向けた番組提案が出てきているところだ。こういった番組は今後も継続的に放送していきたいと考えている。

○　オリンピック・パラリンピック関連の番組が少しずつ編成されていると思うが、この盛り上がりというのは、３０年度にはどういう形で組み込まれていくのか。

（ＮＨＫ側）

東京オリンピックの開会式1,000日前に当たることしの１０月２８日(土)に特集番組を放送することも考えている。２月にはピョンチャンオリンピック、３月にはパラリンピックもあり、これまで以上に東京オリンピック・パラリンピックを意識した取り組みをしたいと思っている。さまざまな形で進めていきたいと思っているが、番組の放送時間の長さ、時間帯、時期などはまさに今議論を進めているところだ。

○　最近のＮＨＫは、８Ｋでなくとも映像がきれい。2020年の東京オリンピック・パラリンピックは、それ以前の大会と比較し、映像技術が異なってくる。ＮＨＫは画像解析やＶＲなど最新技術を持っている。そういった日本の最先端の映像技術を紹介する番組を2020年までに少しでも放送してくれると､オリンピック･パラリンピックを見る楽しみが生まれる。映像のすばらしさをアピールしていってほしい。

（ＮＨＫ側）

新しいテクノロジーを使ってこれまでとは違う楽しみ方を提案する番組は、ＢＳ１を中心に特にスポーツ中継で増える予定だ。演出方法も試行錯誤しながら非常に力を入れている。そのうちのいくつかは、１０月２８日(土)に予定している東京オリンピック1,000 日前の特集番組でも紹介できるのではないかと思っている。

技術を使った革新的な放送については、ＮＨＫとしても力を入れていきたいと考えている。

○　オリンピック・パラリンピックは文化の祭典でもある。ロンドンオリンピック・パラリンピックの時は大きな文化プログラムが多くあり、ロンドンが文化都市として花開いたきっかけになった。文化プログラムを番組として取り上げてほしい。

○　海外ドラマについて。今の若者に海外に行くという勇気を持たせることは難しいように思える。若い人たちが現地の文化をつかめる機会が必要。英語の授業とは別の、海外の若者文化を日本の若者が取り入れられるような番組を積極的に放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

若い世代に対し、世界の状況や同世代との関わり方などを伝える番組の放送は、各波で考え、チャレンジしていきたいと思っている。例えば、「ＡＢＵアジア・太平洋ロボットコンテスト 2017 東京大会」では、今回初めて大会の模様をインターネットでライブ配信し海外でも視聴可能にした。自動翻訳による多言語字幕の付与も試みており、Ｅテレではこのような海外とコミュニケーションを図るような取り組みをしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　８月９日(水)「平成２９年　長崎平和祈念式典」(総合 前 10:30～11:50) を見た。放送をしていただいたことに感謝したい。

○　８月２１日(月)のノーナレ「元ヤクザ　うどん店はじめます」(総合 後 10:00～10:25) を見た。どんな番組なのか期待と不安があったが、以前の仕事がヤクザということで、社会復帰しようとしても上手くいかない具体的事例がいくつかあり、相当ハードルが高いことがわかった。気になったのは、飲食業を起業する過程を追う番組の中で、たばこを吸うシーンが多かったことだ。出演者がどこか格好をつけているように見受けられ、番組が締まっていないようにも感じた。また、バーを起業しようとした人の紹介も不十分で、中途半端に感じた。

○　ノーナレ「元ヤクザ　うどん店はじめます」は、制作の意図がよくわからなかった。ドキュメンタリーであるのに、話の流れが一部ドラマチックで、非現実的な気がして納得がいかなかった。

（ＮＨＫ側）

ノーナレ「元ヤクザ　うどん店はじめます」は、元ヤクザが更生する過程の厳しさや現実をあえて生々しく、余計な演出を入れずに伝えたいという制作者の意図があり、我々も責任を持って放送した。ご批判はもちろん受けとめつつ、今後に生かしていきたい。

○　９月１日(金)「夏の終わりの、ねほりんぱほりん　ウワサの人形劇赤裸々トークが総合テレビで復活！」（総合 後 10:00～10:49）を見た。人形劇の舞台裏という内容で、「ひょっこりひょうたん島」以来積み重ねられてきた技術とノウハウを大変楽しく見させてもらった。実際に映像は映らないゲストの動きもかなり詳細に分析し人形劇として表現していると思う。１０月４日(水)からＥテレでレギュラー番組として復活することを、一ファンとして大変嬉しく、楽しみに思っている。

○　９月２日(土)のＮＨＫスペシャル　ＭＥＧＡ　ＣＲＩＳＩＳ　巨大危機Ⅱ～脅威と闘う者たち～　第１集「都市直下地震　新たな脅威“長周期パルス”の衝撃」は、出演者が専門的な話をわかりやすく伝えていた。最先端の技術の紹介には驚きを感じ、実現に向けて研究が進んでいることに心強い印象を持った。これから家やマンションを選ぶ際の断層情報等の入手方法も紹介されており、役立つ情報を提供していた。メトロノームの音声が繰り返し効果音として使われていたが、不気味な緊迫感を生み出しており、演出として効果的だった。

○　９月４日（月）のプロフェッショナル　仕事の流儀「列車よ走れ、意地をのせて～豪華列車を作る職人たち～」を見た。日本のものづくりはすごいという話はよく聞くが、今回ＮＨＫが取り上げたことで、地域に埋もれていた職人技が脚光を浴びるようになってきたと思った。一人の職人の「グラマラスな女性の腰に手を回したときに、“思ったより細い”と思う感覚に近い“取っ手”を作る」という表現は非常にユーモアがあり、きちんと取材してきたからこその言葉だと思った。今回豪華列車が誕生したことで、九州全体の観光の底上げにつながるのではないかと思う。１つの列車が地域全体を変えることのすごさを感じながら、番組を見させてもらった。

○　「ブラタモリ」をよく見ている。シニアグループの人たちが出かける先を決める

きっかけにも、子どもたちの勉強にもなる番組だと思う。８月１９日(土)の「＃８０　夏休みＳＰ　長瀞」は非常に面白かったし、最近では９月９日(土)、１６日(土)に放送した「高野山」シリーズも、日本人の歴史を見つめるきっかけになっていると感じる。ただ、番組の途中でいきなり画面にガンマイクが現れるときがあり、現場の雰囲気が伝わって逆にいいのかなとも思うが、集中が途切れてしまうのが残念だ。全体として、映像を通して旅行に行った気分を体感できるところがよいと感じる。

○　ブラタモリ「高野山」シリーズを見ていて、番組とは直接関係ないが、子どもの貧困といった問題を仏教で救うことができないのかと感じた。そういったテーマの番組があれば興味深く見られるのではないかと思った。

○　９月１０日(日)のＮＨＫスペシャル「スクープドキュメント　沖縄と核」は、これぞＮＨＫの真骨頂というような、極上のドキュメンタリーだった。放送後、ほかのマスメディアでも取り上げられており、番組だけに終わらず、沖縄という地域を巻き込んで現代につながる番組だったと思う。数々の衝撃的なスクープがあり、スタッフの想像を絶する交渉術の苦労も感じ、頭が下がった。日本の外務省の内部文書も取り上げられていたことにより、今の沖縄の基地問題につながる構図が可視化され、本土ではなく、沖縄でしか見えてこないものがあることを明確にしてくれた。また、短い時間でも、沖縄に生きる人たちの感情を盛り込んでいたことに大変意義があると感じた。また、番組内で紹介された資料の中に“辺野古”というワードが出てきた。今後辺野古について、現在の問題だけではなく、問題に至るまでの経緯についても、過去にさかのぼって取材を続けて欲しいと思った。他局ではこのような極太のドキュメンタリーをつくる体力も、人材も、予算も大変厳しくなっていると思う。久しぶりにテレビの前で全く身動きができずに、まばたきもせずに見た大変すばらしい番組だった。

○　ＮＨＫスペシャル「スクープドキュメント　沖縄と核」を見た。アメリカが沖縄に核兵器を再び持ち込むという密約を、なぜアメリカの国防総省が公開文書にしたのか意図を知りたかった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「スクープドキュメント　沖縄と核」で紹介のあったアメリカ公文書館の資料は、作成日から一定の年月が経つと公開される決まりになっている。アメリカが意図を持って公開して

いるわけではない。

○　９月１１日（月）のプロフェッショナル　仕事の流儀「５５歳　覚悟の挑戦、ノーベル賞の先へ～研究者・山中伸弥～」を見た。一人の人間として、ふだんのままの山中さんを上手く取材していて、“努力したら山中さんのようになれるのではないか”と思えるような身近な存在に感じ、非常に共感を持った。子どもたちにもぜひ見てもらいたい。

○　９月１６日(金)のもしも、長崎が日本の中心だったなら…「“方言”をいかせ！」（総合 前 10:55～11:21 九州沖縄ブロック（除く熊本・沖縄））は、タイトルに引かれ関心を持って見た。方言を使って地域をアピールすることが社会的にも増えていると感じたし、人と人のつながりや温かさを感じた番組だった。タイトル負けをしている印象があったため、今回の内容を振り返ってもらった上で、次回にも期待したい。

○　もしも、長崎が日本の中心だったなら…「“方言”をいかせ！」を見た。ゲストの住職のコメントが面白く、番組にキャスティングした理由だと感じたが、番組内で住職をゲストに招いている理由をもう少し説明してもよかったと思う

○　連続テレビ小説「ひよっこ」には意地悪な役の人がおらず、見ていて非常に爽やか。がんばろうという気持ちになる。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」について。今、昭和時代がトレンドになっているが、そのきっかけになったと思う。また、最近の「ひよっこ」は恋愛の話題も多いが、昔は恋や愛が活力になり、家庭を築いていたと感じる。家族の成長する過程と、昭和という時代の成長過程が重なって、非常に面白い番組だった。

○　鹿児島局による、県民を巻き込んでの、大河ドラマ「西郷どん」についての取り組みを評価したい。「情報ＷＡＶＥかごしま」内の「西郷どんを訪ねて」というコーナーでは、西郷隆盛ゆかりの地を訪ねており、子どもたちの教育にも、観光事業関係者の勉強にもなっていると感じる。クランクインを皮切りに、かなりの番組宣伝もしている。まず地元を盛り上げてから全国に売り出していく戦略がよいと感じた。

○　「ニュースウオッチ９」について。男性メインキャスターはジャーナリストのため、ニュースに対するコメントに期待しているが、一般人でも言える感想のようなものが多いと感じる。他局では視聴者が知らない裏話などを盛り込んでいるキャス

ターもいる。感想ではなく、取材に基づいた説得力のあるコメントをして、初めて「見て、聞いて、納得」するという「ニュースウオッチ９」のキャッチコピーにつながるのではないか。

（ＮＨＫ側）

ニュースキャスターのコメントは「ニュースウオッチ９」に限らず、視聴者が関心・疑問を持っていることについて、かみ砕いて、更なる情報を伝える役割があり、それは我々も課題として考えていかなければいけない。

○　９月１７日(日)の日曜美術館「熱烈！傑作ダンギ　ゴッホ」を見た。“談義”がかたかなで記載されているのが新鮮だったし、実際に談義している出演者もゴッホに精通している方々だった。ゴッホの絵のタッチや、作品の捉え方などを実際に模写して見せることで丁寧に説明していたため、ふだん絵に関心がない人でも見やすかったと思う。実際絵を描いている方でも初めての発見が多かったのではないかと思った。また、ゴッホの特徴的な作品も登場し、それらが生まれる過程を丁寧に紹介していた。私の知らなかったゴッホの人生がわかり、新しい発見をすることができた。海外の作品をテレビで見ることで、ふだん日本的なことばかり追っていた自分が新鮮な気持ちになることができ、テレビでしか体感できないすばらしさを感じた。

○　中小企業経営者にＮＨＫのことを聞くと、ＣＭがないことで番組の流れを止めず、思考の質が高いまま視聴ができるところがよいという意見が多かった。また、経営面で戦略を考える際、歴史の武将たちの考えに学ぶ部分があるからか、「先人たちの底力　知恵泉（ちえいず)」は共通して人気があった。

○　福岡県宗像市の世界遺産登録関連の番組を多く放送していただいて感謝している。「全国豊かな海づくり大会」も開催されるため、また宗像市に期待してほしい。

○　ＮＨＫは“ＮＨＫらしい”番組とチャレンジングな内容の番組を上手く使い分けている。また、海外のテレビと比較すると実感するが、画像が抜群にきれいだ。特に自然の風景を見せることに関しては最高の技術を持っていると感じる。

○　Ｊアラートが発信され、それが放送で伝えられている状態は異常な事態だ。緊急速報を伝えてもらうことは我々にとって重要で、解説を交えて詳説してくれること

は意味があると思う。しかし、既にミサイルが発射されたという情報で、その地方に住む人々からすると、もう少し早い情報が求められる。各社で同じ情報が一斉に伝えられ、自分たちの地域に向かって飛んでくるのではとおびえながら暮らす現在の状況は、異常だと感じている。

○　以前ＮＨＫから取材を受けたことがあるが、取材の質の高さに驚いた。取材者は私が経営している会社の業態もわからず、会社経営も体験したことがない中、視聴者に何を伝えるべきなのかを考え、とても勉強した上で取材をしてくれた。取材にかける情熱を感じ、大変うれしく思った。

○　ラジオと違いテレビは一目見たときの印象が大切だと思うため、ニュース番組のスタジオセットにもっと奥行きや季節感を持たせてもいいのではと感じた。また、交通情報を伝える際、画面を一目見て渋滞情報がわかりにくかったため、工夫してほしいと感じた。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成２９年７月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２０日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴した「ガタの国から～佐賀発地域ドラマ～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、８月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	明石　良	（宮崎大学副学長）
副委員長	深川　一太	（深川製磁（株）代表取締役社長）
委　員	井上　龍子	（八幡駅前開発（株）代表取締役社長）
	長﨑　健一	（(株）長崎書店代表取締役社長）
	平田　大一	（(公財）沖縄県文化振興会理事長）
	山口　成美	（(有）シュシュ代表取締役）
	山元　紀子	（霧島高原ビール（株）代表取締役）

（主な発言）

＜「ガタの国から～佐賀発地域ドラマ～」」

（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　７月１９日（水）　佐賀局制作）について＞

○　パロディー要素があり、話すムツゴロウなどファンタジーの要素もあり、ラブストーリーの要素もあって、盛りだくさんだったが、とてもおもしろく見ることができた。ローマが舞台の名作映画を意識していたのではないか。

特に印象に残ったシーンは、出演者の哀川翔さんがたどたどしい英語で干潟の魅力を説明したシーンだ。たどたどしさが田舎感を醸し出していたし、たどたどしい英話がかえって干潟の魅力を引き出していたように感じた。そのあとの朝日に映える干潟のシーンはとてもきれいで、番組の中でも特によい場面だったと思う。

出演者の佐賀弁のテンポがとてもよく、田舎感を身近に感じることができた。意味が全然わからなかったことで、かえってリアル感が出ていたと思う。ことばの重要性を改めて認識した。

今回の番組は随所にユニークな取り組みを入れていて、しっかり印象が残る作りになっていた。また、佐賀の中でも注目されていない地域を、刺激的に格好よく見せるための制作陣の努力を感じた。

大河ドラマでは番組末尾でドラマにゆかりのある場所を紹介しているが、今回のドラマも同じようにドラマに出てきた土地などを紹介する番組があるとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

７月１４日(金)の佐賀県域向けの先行放送では、１５分の関連番組をあわせて放送した。

○　タイトルの「ガタ」は一般の人にはわからないと思うので、「干潟」にするとよかったのではないか。

茶畑や田んぼを自転車で走り抜けるシーンは映像がきれいだった。話すムツゴロウの存在は心がほのぼのした。北からタイに飛んでいく多くの渡り鳥が羽休めのために佐賀の干潟を訪れるという話や、ドラマで干潟に入るシーンを取り入れたことはよかったと思う。しかし、せっかくなのでドラマに出演したタイの方たちが「ガタリンピック」に参加し、綱引きなどをしているシーンがあると、国際交流の観点からもっと意味を持ったのではないかと思った。

ドラマの中で、干潟に映える夕日を見に行こうとしながら、結果的に夕日は見られず、代わりに見た朝日のきれいさにとても驚いた。あえて朝日をドラマに入れた理由はあるのか。

（ＮＨＫ側）

夕日は観光していても普通に見ることができるが、朝日はなかなか見る機会はないので、あえて朝日をクライマックスに使い、サプライズ感を出した。

○　あまり期待しないでドラマを見たが、よい意味で裏切られた。主演の上白石萌音さんの演技はうまく、相手役も大変爽やかで好感の持てる俳優だった。脇役の方もよかった。ストーリーも、笑い、涙、恋愛などがつまっていて心がほっこりし、４回も泣いてしまった。音楽もリズムのよい刑事ドラマ風の音楽を取り入れるなど、随所に細かい工夫が見られた。ストーリー、映像、音楽いずれもよく、見終わったあとは、爽やかで気持ちのよい余韻が残った。

祐徳稲荷神社や豊玉姫神社など佐賀の名所が出てきたり、佐賀名物の「シシリアンライス」が出てきたりしたのを見て、実際に佐賀に行って「シシリアンライス」を食べてみたいと思った。国内の観光客増加につながるような内容で、とても効果的に練られていたと思った。

番組のエンディングで､主役の女の子が干潟にいる２匹のムツゴロウを見て､ずっと一緒にいた話すムツゴロウだと思い､｢お嫁さんが出来たとね。よかったね｡」と言ったが、本当は女の子の後ろを通り過ぎた男の子が持っている虫かごにいたというオチは秀逸だった。本当に楽しめる番組だった。

○　７月５日の豪雨で北部九州は観光客の減少が想定されるが、豪雨後にドラマが放送されて、佐賀をはじめとした北部九州に行こうと思うきっかけになったと思う。

今、鹿児島空港や宮崎空港などに中国の旅客機の便が増えつつあるが、現地では中国の人たちとのコミュニケーションのあり方に頭を悩ませている。このドラマは日本人とタイ人との関わり方について、ことばの壁を越えておもしろおかしく見せていた。日本人と外国人とのコミュニケーションのひとつの方法を示していたと思った。今後はタイの観光客を日本に呼び込むためにも、ぜひこのドラマを国際放送で展開し、佐賀の魅力を世界に発信してほしい。

出演者や脚本家は一流の人を起用しており、ずいぶん制作費がかかったのではないかと感じた。

○　私もドラマを見て心がほのぼのとした気持ちになった。また、出てきた景色がとても美しくて、ドラマ全体として大変爽やかな印象を持った。

タイのドラマに北九州市の藤園が取り上げられたことがきっかけで、タイから北九州に来る観光客がとても増えたことがある。今回のドラマでは佐賀の現地の人とタイ人との交流が描かれているので、ぜひタイでも放送して佐賀の良さを知っていただき、多くの観光客が佐賀を訪れるようになるとよいと思う。

○　佐賀のドラマでよく「干潟」をテーマにしたと思った。数ある佐賀の観光地の中でも、干潟は決して人気がある場所ではないので、あえて干潟を選んだことを評価したい。

ドラマの進み方はとてもテンポがよく、文字スーパーを表示させたシーンやムツゴロウが話すシーンなど、せりふの使い分けがうまく、ドラマの見せ方が非常にうまかった。主役の上白石さんは最初は地味に見えたが、ドラマが進むにつれてどん

どんきれいに見えたことも驚いた。私はドラマは基本的に苦手だが、飽きることなく最後まで見ることが出来た。

ドラマの中のムツゴロウは多彩な表情をしていたが、ＣＧで作成した映像ではなく撮影した映像ではないか。長時間にわたって撮影を続け、撮ることができた映像だと思う。また、景色などは４Ｋカメラで撮影すれば、もっときれいになると思って見ていたが、あとで制作意図や制作過程を聞くと、実際に４Ｋカメラで撮影していると分かって意外だった。４Ｋ放送や４Ｋテレビで見ればまた違う映像になるのだろうか。

（ＮＨＫ側）

ドラマを通してＣＧは５回しか使っていない。ムツゴロウは撮影クルーがひたすら干潟で粘って撮った映像だ。４Ｋについては、特に朝日は鮮明な映像を撮影することができた。

○　最初はドラマの焦点がよくわからなかったが、だんだんと「観光」がテーマだとわかってきた。観光がテーマであれば、干潟でおけを持っている人の風景など、干潟のいろいろな風景を取り上げてほしかった。

ドラマをタイで放送して、佐賀の観光につなげるのであれば、ぜひ干潟や日本の温泉などの解説を含めて放送してほしい。タイは温泉も多く南部には干潟もあるので、今回のドラマはとても反響が出ると思う。また、タイは経済格差が大きく、訪日観光客はバンコク周辺に住んでいる人が多いので、ドラマの放送によってタイの北部や南部など貧困な地域からも訪日観光客が増えることを期待したい。

最後に、このドラマは単純なストーリーなので外国人のための日本語教育支援にも活用できると思う。日本語を勉強するタイ人にとってとてもよい教材になると思う。

○　「シシリアンライス」などの佐賀の名物や、佐賀の観光名所が紹介されたり、タイとの交流や渡り鳥の話などを交えるなど、佐賀の特色が理解できてよかった。ガタのことを知らない他県の人も多いと思うので、もっとガタの説明があってよいのではと思った。方言なのでテンポがあり面白かったのだが、もっと表情豊かにするとメリハリが出て、もっと面白かったと思う。全体の構成として、青春ものなのかドタバタ劇なのか、よくわからなかったのでまとめて欲しかった。

（ＮＨＫ側）

ムツゴロウの表情が自然だったという意見は意図していたことだったので、大変うれしい。最初はアニメーションやＣＧで表現するという選択肢もあったが、丸１日ムツゴロウだけを撮影してみた結果、違和感のない映像が撮れ、クオリティーも上がったので、結果としてよかったと思う。最初は地味な主役の女の子がドラマが進行するにつれて魅力的に見えていくことも、意図していたことだったので、その意図が伝わっていて大変うれしかった。

一方「地域発ドラマ」ということから、地域をＰＲする要素を取り入れる必要があるが、バランスをとることが難しかった。今回の意見を今後の参考にしていきたい。

（ＮＨＫ側）

ドラマを英語化して国際放送につなげるべく作業にとりかかっている。またタイの放送局でも独自にリメイクするという話もある。

ご意見にあったが、観光地の見せ方については一部名作映画を参考にしている。

哀川さんのたどたどしい英語は正しい英語ではない箇所もあるが、それがドラマをかえっておもしろくしていると思う。せりふを一部のみ文字スーパーでも表示したことについて意見を頂いたが、ドラマのコンセプト段階からあえて文字スーパーを出さない箇所を作ることを意図していたので、うまく伝わってよかった。

今の時代は、人と人の関係性が以前より希薄になっていると思う。他人の心に踏み込もうとしない姿勢から一歩進んで、人と関わることで成長する過程を表現しており、少し昭和的な価値観が持ち味のドラマに仕上がったと思う。

佐賀県域向けの先行放送では、ドラマの後に「ガタリンピック」のドキュメンタリー番組を放送した。モニター意見ではこの番組の評価がとても高かった。

＜放送番組一般について＞

○　最近のＮＨＫが番組作りを模索しながら、新しい番組の形を視聴者に届けようとする姿勢にとても感心している。土曜時代ドラマ「みをつくし料理帖」では、時代劇の中に料理が絡んでくるのかと思っていたが、江戸料理研究家の柳原尚之さんが監修しているなど、むしろ本格的な料理番組だったことに驚いた。土曜ドラマ「幕末グルメ　ブシメシ！」も同様に、料理番組でもなく、時代劇でもなく、その中間の番組のようで、新しいおもしろさを感じている。こうした取り組みや見せ方が、若い世代が興味を持つきっかけになるとよいと思った。

○　６月１６日(金)の「ＬＩＦＥ！～人生に捧げるコント～」(総合 後10:00～10:48)は、実際の東京フィルハーモニーの演奏家６５名と、エキストラ3,000名でＮＨＫホールを埋め尽くす豪華な演出にとても興奮した。これまでのコントにはなかったスケールの大きさにＮＨＫの意気込みを感じた。

「ガタの国から～佐賀発地域ドラマ～」や「ＮＨＫスペシャル　シリーズ　ディープ・オーシャン」、「ＬＩＦＥ！～人生に捧げるコント～」と、それぞれ分野が大きく異なっているが、多方面で上質な番組を作ろうとしているＮＨＫの姿勢を強く感じた。

○　６月１８日(日)の目撃！にっぽん「走る～知的障害・陸上短距離　川上春菜さん～」では、知的障害のために、バトンを受け取って渡すことが困難な人でも、指導者が丁寧に伝えれば、時間がかかっても必ずできるということを見ることができた。また、できるようになる中で、自分の知見を広げていく姿をしっかり伝えていた。体を動かして実践し、感動し、達成感を得ることはこれからの教育には必要だということを強く感じた。

○　６月１８日(日)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で取り上げた８２歳の髙島孝子さんの企画は、現代版のおとぎ話のようだった。亡くなった旦那さんとの思い出の花畑を今でも作り続けている姿をしっかりと伝えていた。朝から泣いてしまったが、泣いたことですがすがしい気持ちになり、１日頑張ろうという気力が湧き出た。有名な人たちではなく、無名な人に焦点をあてることはＮＨＫの良さだと思うので、これからも続けてほしい。

○　７月１日(土)のＮＨＫスペシャル「謎の“日本人テロリスト”を追え～ダッカ・テロ事件から１年～」を見たが、２１世紀に人間が直面している大きな問題の１つはテロだと思う。昨年のダッカ・テロ事件に関与していたとされるサイフラ・オザキ容疑者は、かつて日本に住んでいたことがあり、日本では、ＩＳが日本人を殺害したら大騒動になるのに、イスラム教徒が何千人殺害されてもニュースにならないことに矛盾を感じて、日本が嫌いになりＩＳに加担したというが、理由になっていない。さまざまな専門家がテロの原因や理由を分析しているが、そもそもテロには理由がない。ただ、実行犯にとって不条理だと思う人を殺害するという事実だけだ。

同じく人間が直面している大きな問題のもう１つは、自然災害だと思う。どこで何の自然災害が起きるかは誰にもわからない。先日、私の住む町に大雨や土砂崩れによる避難勧告が出たが、私は飲酒していたため車を運転できなかった。避難先は1.5キロメートル先のため、逃げようがない。その意味で災害もテロも防ぎようがない不条理な世界だと感じた。

このような不条理をしっかりと伝えることはとても重要で、そのためには「伝える力」は重要だと思う。視聴者のために、ＮＨＫはテーマに対して深く、長く続けていくことを心がけてほしい。

○　７月６日(木)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で豪雨による雨量と土砂災害の危険度の情報が図示されていた。一般的に赤になるほど危険が高いことを示すが、土砂災害警戒情報は青いほど危険度が高いように見えた。混乱するので、色は統一したほうがよいと思う。一方、アナウンサーの話し方や対応はよくなっていると思う。特に今回はホームセンターの情報や被災地の集会所の内容などもしっかり伝えていて放送内容もよかった。災害時に情報を伝えることはとても大変だと思うが、現地の人に役に立ち、早期の復興につながる放送を続けてほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

基本的には大雨注意報、竜巻注意報などの注意報は黄色、大雨警報、洪水警報などの警報は赤色、特別警報や大津波警報は紫で統一し、注意を呼びかけている。同様に土砂災害危険度情報も紫のほうが危険度が高い。

○　最近は頻繁に地震が起こるので、防災対策はとても重要だ。先日、災害時に５人いるときは、５人の携帯電話のうち１つだけ電源を入れて、ほかの４つは切ってお

くと長時間電話を使えることを聞いた。これが災害時に役立つ情報だと思うので、今後はこのような情報も伝えてほしい。

○　７月９日(日)のＮＨＫスペシャル「九州北部　記録的豪雨はなぜ」を見た。福岡県朝倉市で起きた水害について、非常に迅速な取材で、大雨と流木による被害の内容がとてもわかりやすく丁寧な説明でまとめられていた。大雨が降るメカニズムもわかりやすかった。私たちの今後の対策として、住民同士がそれぞれ異変に気付き、声を掛け合うなどの地域の連携や、周辺の地形を理解し独自に洪水ハザードマップを作成するなど、参考になる内容でもあった。

○　７月１６日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　ディープ・オーシャン「南極　深海に巨大生物を見た」を見た。南極の生物の情報や極地巨大化現象などは初めて耳にした。南極での降雨の増加などの南極の環境の変化について触れ、地球温暖化への警鐘を鳴らす形で番組を締めており、最後まで興味深い内容が続いた。映像もとてもきれいで、４９分間画面に食い入るように見た。８月２７日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　ディープ・オーシャン「超深海　地球最深への挑戦」もとても楽しみにしている。

○　７月１７日(月・祝)に「夏バテ予防！スタミナ家族に福きたる！～平野レミの早わざレシピ第４弾～」（総合 前8:15～9:00）を見た。紹介された料理を実際に作ってみたところ、とても簡単に作ることができた。よい料理を紹介していたことは評価できるが、番組全体がにぎやかで騒々しかったので、もったいなかった。

○　７月１９日(水)の「イブニング長崎」内の「輝くひと」というコーナーで、佐世保市消防局の福嶋健吾さんを取り上げていた。福嶋さんは３０歳の若者だが、長崎県代表として、８月に宮城県で実施される全国消防救助技術大会に参加する。ふだんから「市民の命を守る」という意志を持ってトレーニングをしている姿を見て立派な若者だと思った。またＶＴＲが終わったあと、「東日本大震災で被害にあった現地の方や、子どもたちにも夢や希望を与えられるように頑張りたい」と福嶋さんが話していたことを伝えていて、まさに「輝くひと」だと思った。暗いニュースが多い中、明るく、夢を与えられる地域ならではのニュースをクローズアップしてもらうと、視聴者が元気や勇気をもらって、世の中もよくなっていくと思う。今回の放送を見て、若い世代の人々が自分も成長したいと感じたのではないかと思う。

○　「連続テレビ小説　ひよっこ」の中で、ビートルズの来日公演のチケットが映った。まさに本物のチケットだと思えるほどの完成度の高さにとても驚いた。このドラマに出てくる役者一人一人のキャラクターもとてもよい。ふだんドラマはあまり見ないが、翌日も見た。主題曲も桑田佳祐さんの昔の曲を思い出すような曲調で、心地よかった。

○　ぜひ空手を学ぶ沖縄の女の子をテーマに「連続テレビ小説」を制作してほしい。沖縄発祥の空手が東京オリンピックの正式種目に決まり、2022年は沖縄本土復帰５０年だ。これまでも本土復帰の節目の年に沖縄のドラマを制作していただいたので、提案したい。

○　「ドラマ１０　ブランケット・キャッツ」を毎週おもしろく見ている。家族間の思い違いや、思いなど、直接伝えにくいことを猫を通して理解し合い、家族の問題を解決していく一話完結型のドラマだ。猫自身も飼い主からの虐待を受けた過去があるなど、背景となるストーリーも大切にしている。よくこのような番組の作り方を生み出したと思って感心している。こうした心が癒やされる番組を今後も見せていただきたい。また、先ほど意見があったが、私もＮＨＫは時代を伝えるという使命が絶対にあると思う。しっかりと意識して取り組んでほしい。

○ 「情報ＷＡＶＥかごしま」内で月に１回「西郷さんを訪ねて」というコーナーを放送している。ぜひ月に１回ではなく放送回数を増やしてほしい。「西郷どん」のロケも始まっているし、子どもたちの勉強にもつながると思う。

○ 鹿児島局の番組を登坂淳一アナウンサーが担当することになって、鹿児島の人がローカルニュースをしっかり見るようになったと聞く。どのアナウンサーが地方に異動するかは、地方のＮＨＫにとって、とても意味があると思った。

○　インターネットも含めて多くのメディアがある中で、ＮＨＫの強みは「伝える力」だと思う。その点で、「ニュースウオッチ９」が４年間で３人もキャスターが変わったことには強く疑問を感じている。キャスターの存在が「伝える力」に意味を持たせると思うので、何度も変えてしまうと定着しないと思う。

○　６月１６日(金)のロンリのちから「見せかけの根拠」を見た。１０分間の短い番

組の中でドラマ仕立てで論理的思考の仕組みをわかりやすく説明していた。ドラマの見せ方もとてもうまかった。

○　７月１１日(火)のハートネットＴＶ「広がる“農福連携”～新しい地域のカタチ～」を見た。農業の軽作業など、障害のある人でも十分に働くことができることを知り、農業以外のほかの分野でも、障害のある人ができる仕事がたくさんあるのではないかと思った。５０人以上の従業員がいる企業は法律で障害者の雇用を義務づけられているが、現状うまく機能していないように感じる。農業を通して達成感や充実した疲労感を感じている人たちの姿を見て、他の方法もあるのではないかと思った。障害のある人の雇用については、法律による義務づけだけでなく、雇用した場合は助成をするなどさまざまな方法があると思う。全産業で労働力不足という社会的な問題がある中で、国の制度のあり方を考えるきっかけになるよい番組だと思った。

○　上品な番組が少なくなってきている中で、ＮＨＫは一定の距離を持ち、しっかりとした報道を続けていると感じる。

（ＮＨＫ側）

温かい意見が多かったが、ニュースのキャスターが短期間で変わってしまうことについて厳しい意見も頂いた。ＮＨＫに対する期待だと受け止めている。個々の意見も思い当たることが多いので、自分たちのことをふかん的に見ながら、公共放送としての使命の果たし方について常に考えていかなければならないと改めて思った。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成２９年６月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１３日（火）、ＮＨＫ福岡放送局において、７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴したクローズアップ現代＋「金塊・闇の“錬金術”～私たちの税金が奪われる～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、7月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	宮崎　和恵	((一社）大分学研究会運営委員）
副委員長	深川　一太	（深川製磁（株）代表取締役社長）
委　員	明石　　良	（宮崎大学副学長）
	友安　　潔	((株）西日本新聞社編集局総務）
	長﨑　健一	((株）長崎書店代表取締役社長）
	山口　成美	((有）シュシュ代表取締役）
	山元　紀子	（霧島高原ビール（株）代表取締役）

（主な発言）

＜クローズアップ現代＋「金塊・闇の“錬金術”～私たちの税金が奪われる～」
（総合　５月２３日（火）　福岡局制作）について＞

○　金の闇取引の仕組みや背景事情、問題点が整理されていて、見応えのある内容だった。密輸摘発時の日本の刑罰の軽さなどが原因となって、闇取引が拡大していることがよくわかった。

しかし、密輸元の香港から金を運び出すことにペナルティーはないのか、なぜ金の価格が１５年で５倍も高騰しているのか、密輸と暴力団の関係性について疑問に感じたが、触れられていなかった。また、これまで私たちの税金がいくら失われたのか、金密輸による損失額が数字で示されれば、視聴者ももっと危機感を持つと思う。消費税増税と密輸の摘発件数の増加の関係について触れていたので、消費税が１０％になるとどのようなことが危惧されるかについても触れてほしかった。

○　知らない内に密輸の運び役になる危険が私たちの身近に迫っていることを伝えた番組だったと思う。密輸による金取引の背景が具体的に取材されていて、今回の金塊事件についても真相が明らかになってきていると感じた。

近年、金の輸入量が増加している背景に、金の密輸や闇取引が関係しているとすると、実は同じ金が循環しているものが含まれている可能性があり、金の輸出入のデータの正当性に欠陥があると思った。

○　５月１９日(金)のなるほど実感報道ドドド！「追跡！“金塊”闇ビジネス」では2016年に福岡で起きた金塊窃盗事件についても触れていたが、「クローズアップ現代＋」では触れていなかった。福岡で起きた３億８千万円の窃盗事件と金塊の関係の理解をより深めるためには、2016年の事件についても触れるべきだった。なぜ構成から外したのか気になった。

今回の窃盗事件の発端となった金塊は、そもそも密輸されたものか、まだ明らかになっていない。しかし、金塊が密輸されたもので、窃盗の被害者は密輸関係者だという印象を受ける構成になっていたと感じた。また、密輸組織と一部の貴金属店が暗黙の協力関係にあるという指摘についても、まだ関係性は明らかになっていないので、伝え方についてはもっと慎重にすべきだった。

出演者のコメントが日本語として伝わりにくい部分があったが、そのまま、文字スーパーするのではなく、正しい日本語として補足した文字スーパーを出してほしかった。

○　おもしろかった。闇取引の仕組みや、アジアに近いために実行犯が福岡に入国すること、密輸に関する日本の刑罰が世界的に見て甘く、またリスクが低いため、裏ビジネスが盛んに行われていることがよく理解できた。

しかし、日本の税関に金塊を没収された際、実行犯はどうやって金塊を取り戻しているのかわからなかった。なぜ回収できるのか。

（ＮＨＫ側）

韓国では税関で金塊が見つかると必ず没収されるが、日本では、消費税８％分と罰金を払えばよく、正確に言えば日本では没収されない。詳しく伝えていなかったので、誤解を招いたかもしれない。

○　３億８千万円が盗まれた事件の背景すべてが明らかになっていない中で、事件そのものが金密輸と関係があると誘導しているように感じたので、よくないと思った。

番組の中で、いわゆる金の運び屋を引き受けてしまう一般人側の動機として、非正規雇用などの社会問題とひも付けようとしていたが、放送時間が短い中でそこまで伝えるのは情報を詰め込みすぎだと感じた。犯人像をできるだけ整理することに集約したほうがよかったのではないか。

「クローズアップ現代＋」は武田真一キャスターが進行を務めるようになって落ち着いた番組になった印象を受ける。今回のゲストはいわゆる事情通ではなく、以前税関で働いていた人や元警察官など密輸の現場をよく理解している人をゲストに招いたほうが適切だった。話す内容も説得力があり、より「クローズアップ現代＋」らしい雰囲気になったと思う。

○　香港から韓国を経由して日本に金塊を密輸していると説明していたが、あまりに単純ではないか。本当に実行できるのか疑問を感じた。私もこのルートで香港から日本に帰国したことがあるが、密輸は難しいという印象を受けるので、本当は別のルートがあるのではないかと思った。

錬金術の意味を踏まえると、タイトルの「錬金術」の使い方が適切なのか疑問を持った。「密輸された金塊で、日本人の税金が奪われる」といったほうが正しく伝わったのではないか。

アジア諸国は日本と違って、金をアクセサリーに加工して身につける慣習や価値観があるが、日本では純金そのものに価値を見いだすため、金自体の密輸に日本は都合が良かったのではないか。金の密輸には日本独自の金に対する価値観や背景事情があると思った。

○　日本と韓国の刑罰を比較し、日本の金密輸の刑罰がとても軽いことがわかった。しかし、日本では具体的にどのような場面で金が没収されるのか、また罰金との兼ね合いがあまりよくわからなかったので、もっと丁寧に伝えてほしかった。

金塊が闇取引されるたび、金塊の消費税８％分が国外に流出する仕組みはわかったが、これまでに流出した被害額を示してほしかった。日本の税金に関わる重大な問題なので、国民が危機感を感じて、税関の取り締まりが厳しくなる世論につながると思う。また、この問題に対する国の対応が見えないので、政府の方針についても取材してほしい。

現金で取り引きされるため、今後も同様の事件が発生すると思う。また、一般人が巻き込まれる危険性があることもよくわかった。金の相場が１５年間で５倍になったことも、不正取引が原因だとすると、早急な対応が必要だと思う。

全体的によく踏み込んだ取材だったと思う。非常に重要な問題だと思うので、今後も取材を続けてほしい。

○　タイトルの「私たちの税金が奪われる」ということばに目を引かれた。福岡の３億８千万円の窃盗事件と、私たちの税金がどのように関係しているのか気になって、番組を見ようと意識した。改めて番組のタイトルは重要だと思った。

番組の構成はとてもよかった。事件の背景や消費税８％が国外流出する仕組みがよくわかった。疑問に思う内容もあったが、番組が進む中で理解できるようになっていた。報道番組として非常に密度の濃い内容だったと思う。

金塊密輸の刑罰について、日本だけが甘いのかがわからなかったので、ほかの国の情報をもっと知りたかった。また、実行犯と貴金属店の関係について、貴金属店に入る手数料の仕組みやその額も具体的に知りたかった。

番組の最後で「税関など水際での厳しい取り締まりが必要」と武田真一アナウンサーが発言したが、そもそも現在の日本の刑罰や仕組みを変えないと問題解決にならないと思う。事件や密輸の抑制につながると思うので、今後事件の解明が進むとともに、金塊密輸の問題点を追求した番組をつくってほしい。

○　ちょうど前回の番組審議会の日に事件が発生したこともあり、こうした事件が自分たちに遠い存在ではないと感じていたが、今回の番組を通して、さらに深い問題をはらむ事件であることを知った。

グローバル化が進み、世界が小さくなることによって、アジアを拠点とする犯罪もさまざまな手法で拡大しているという現実を実感するとともに、今回のように明確な罰則がなく、貴金属業者にとってはビジネスというスタイルの中で行われているといった、犯罪として断罪できない要素があることも問題を複雑にしていることがわかった。

グローバル化を推進することは良いことだと思い、また必然でもあると思うが、合わせて負のリスクが増加することも考えておかなければならないということがわかりやすく示されていたと思う。

今後の課題として、市場そのものをなくすことはできないが、水際対策の強化と制度改革の必要性が言われていたように、引き続きこうした流れを追い続けていただき、犯罪の根を絶つことは難しくとも抑制につながることを期待したい。

○　福岡市天神という、身近な繁華街で摘発された事件、まずは非常にショックを受けた。そして、事件から一か月足らずでＮＨＫがここまでの取材をし、「クローズアップ現代＋」で取り上げた取材力にも驚かされた。

一般市民として、わかりにくいものばかりだが、映像と説明で仕組みがよくわかった。納税者として本当に腹立たしい限りだ。取材の中で誰にでも簡単にできる「何も難しいことはない」、「日本は密輸国、日本の処罰はなまぬるい」という言葉が印象的だった。金塊を飲み込んでまで密輸する、とんでもない手口だ。

この放送で国民に知れたこと、また闇が見えてきたことが素晴らしく、一刻も早く解決に向けて取り組んでほしいと思う。

○　金塊を密輸することでどうやって稼ぐのか、裏のからくりが見られて大変ためになった。短時間の放送内容のため、展開が少し表層的な感があったことは否めないが、先月、福岡で発生した金銭強奪事件もこの金塊絡みと知り、本当に想像よりも身近な出来事であると思い、身震いする。

1億円の金塊について、８％の消費税分800万を荒稼ぎと呼んでいたが正直ふに落ちなかった。1千万円なら８０万円の稼ぎしかない。闇の業者のコメントも嘘っぽく聞こえ、少し違和感を覚えた。「錬金術」と呼ばれるのは「何回も同じ金塊を回すだけで粗利が入ってくる」ことを言いたかったのだと推測するが、この部分が視聴者に伝わってこそ、「闇の錬金術」というショッキングなタイトルが意味を持ってくるのではないか。沖縄もインバウンドと呼ばれる外国人観光客が倍増し、今年度は200万人を越える数の海外観光客が訪れるエリアだ。沖縄でも金塊を巡る事件や事象が起こっていないか、本当に不安だ。決して対岸の火として、ひと事に思わず、身近な事件としてもっと意識しなくてはいけないと思いを新たにした。

そこで、沖縄局でも何か外国人観光客が増加したことで発生している「課題や事件、事象」を検証する番組制作をしてほしいと思った。交流人口が増えることにより引き起こる「正と負の出来事」をしっかりと検証し、認識を共有させることも「ＮＨＫの報道」が担う大切な要素ではないか。是非とも期待したい。

（ＮＨＫ側）

貴重なご意見に感謝する。事件発生から１か月程度で可能な限り取材をしたが、あくまで金取引における闇の一端が見えてきたところだと思っている。放送後も密輸の摘発が続いており、さらに真相に迫るためにも、今後もしっかり取材を続けていきたい。

（ＮＨＫ側）

制作した立場では気付かないような意見をいただき、感謝する。取材を進める中で、密輸に対する国の認識が低いことがわかった。密輸に関しては関税局が対応し、消費税還付については国税庁が対応するなど、縦割り行政の弊害や対策の遅れが見えてきた。今後も引き続き取材を進めていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　５月２１日(日)のＮＨＫスペシャル「発達障害～解明される未知の世界～」を見た。「あさイチ」の発達障害の特集と合わせて、非常に勉強になった。私の知り合いにも詳しい人がいるが、この放送でより深く発達障害について理解が深まった。特にＡＳＤ/ＬＤ/ＡＤＨＤの３つの発達障害の概念図は話を聞くより、視覚化することよって鮮明に状態が見えた。現代もだが、これから先も本人でなく周りの人々も対応に戸惑い悩むであろう。学生時代には発見できず、社会に出た瞬間につまずき、自分で負荷をかけ、自分を追い込み、自分に負担になるケースから二次発生的にうつ病や精神疾患を伴うようだ。原因がわかれば対処方法がわかる。企業の社員の育成などに使えるよう、教育としての書籍化をお願いしたい。今後も「発達障害」の研究を重ね、さらに理解が深まる番組制作を望む。

○　５月２６日(金)のなるほど実感報道ドドド！「今　新たな絆が生まれる～南阿蘇村・地震１年　未来に向けて～」を見た。被災地を訪問したばかりだったので、冒頭の「ふるさと」合唱のシーンでは、南阿蘇村の人たちの苦労を思い、胸が詰まった。被災者の笑顔を撮る写真家の活動は独自性があって興味深かったし、その写真家をしっかり取材して紹介できたことはとてもよかったと思う。さまざまな人を取り上げることができたことは、ＮＨＫが地震以降取材を続けてきたからだと考えている。ＮＨＫの被災地への愛情を感じる番組だった

○　６月２日(金)のなるほど実感報道ドドド！「生活習慣病は“子ども時代”に決まる！？」を見た。最初は、なぜ九州で放送するのか疑問に思った。しかし、番組を見る中で、九州に低体重の子どもが多いこと、低体重の子どもが生活習慣病になりやすいことがわかって、九州で取り上げた理由が理解できた。低体重の子どもが生活習慣病になりやすい理由についても、医学的な部分に踏み込んで取材をしていて、わかりやすかった。よい指摘をしていた番組だった。

○　６月３日(土)の「６月１６日復活『ＬＩＦＥ！』が見たくなるＳＰ」（総合 後11:25～11:58）を見た。菅田将暉さんや葵わかなさんのコントが新鮮だった。決まったメンバーだけで番組を作るのではなく、新しい人材を入れていくことで、番組をより良いものにしようとする制作陣の強い思いを感じた。内村光良さんが演じる三津谷寛治さんと内村光良さん自身の対談は合成に見えなかったので、技術の高さに

驚いた。

内村さんはオーケストラの指揮を細部まで徹底して練習していて、内村さんの「ＬＩＦＥ！」に対する真剣な気持ちが伝わってきた。ぜひ１６日の放送を見たいと思い、番組への期待が高まった。人気番組のメーキング映像として、出演者とスタッフが真剣に番組制作に臨む姿を見られることはファンにとってとてもうれしいことだと思う。

○　６月４日(日)のＮＨＫスペシャル　私たちのこれから「＃子どもたちの未来」を見た。シングルの家庭の増加や、非正規雇用の増加などが原因で、子どもの６人に１人が貧困状態にあることがよくわかった。貧困状態の子どもを減らすために、イギリスが実施した取り組みや、ふるさと納税を利用した取り組みなどが具体的に示されていて、世の中を変えるためには革新的な取り組みが必要だと思った。日本では子どもたちに対する社会保障が高齢者に比べて遅れていること、未就学児が快適に生活できるように社会を整備することの重要性を伝えていたことはよかった。しかし、貧困の一方で、過労死の問題や働き方改革によって働きたくても働けない人が増えている。この現状と矛盾について取り上げると、さらによい番組になったと思う。

○　「土曜時代ドラマ　みをつくし料理帖」は、主演の黒木華さんはじめ個性が光る役者が多く、ドラマの役柄にぴったりな人を選んでいると感じる。料理が中心のドラマとしては完成度が高く、毎回楽しみにしている。６月１０日(土)の放送では、「蕗（ふき）ご飯」がテーマで、時期に合った料理を取り上げていると思った。番組終了後にはドラマに出てきた料理の調理法を公開していて、一層魅力的な番組になっていると思う。

○　６月１０日(土)のＮＨＫスペシャル　ニッポンの家族が非常事態！？　第１集「わが子がキレる本当のワケ」を見た。６人の中学生がＳＮＳ上で「自由にトークを始めてください」という投稿のあと、自由にやりとりをする実験があった。最初は普通の投稿が続いたが、わずか５分で否定的な発言が出始め、最終的には人を批判することばが並んでいく様子が紹介された。ネット上の炎上がよく社会問題になるが、いじめの問題が今後一層深刻化してしまうのではないかと改めて心配になった。思春期は脳の発達が未熟なためキレる子どもが多いが、一方で好奇心やチャレンジ精神が盛んな時期であること、大人になるにつれ感情が抑制できるので問題な

いというような形で締めていたが、本当に問題ないのか疑問に思った。昔の若者と今の若者との違いや、将棋やスポーツの分野で、今の１０代の活躍が目立っていることと思春期の関係についても触れてほしかった。

○　６月１１日(日)の日曜討論「迫る会期末　与野党に問う」を見た。政党を代表して出演した国会議員の人たちは、自分たちの考えをしっかりと発言していた。議論自体は収拾がつかない状態ではあったが、一人一人が自分の立場やどう見られているかを踏まえて発言していて、とてもおもしろかった。

○　「ＳＯＮＧＳ」も好きな番組だ。ゲストとゆかりのある著名人が話すゲストの人となりに、新しい発見やおもしろさを感じる。また、セットがシンプルなため、ゲストがより際立ち、じっくりと音楽に集中できる。上質な歌番組だと思う。
　全体的に、近年の番組のセットは鮮やかすぎると思う。色が多かったり煩雑だったりすることで、セットに気をとられてしまう。番組の大事な要素だと思うので、見直してほしい。

○　「助けて！きわめびと」はとても好きな番組だが、司会者が変わってから騒々しい番組になった。取り上げるテーマも従来と違ってありきたりな内容になり、独自性がなくなったと感じる。以前のほうが楽しかったので、また以前のような構成にしてほしい。

○　大河ドラマ「おんな城主　直虎」の出演者は、歌舞伎役者やお笑い芸人などさまざまなジャンルの人がいるが、演技力の差や出演者本人のキャラクターが気になってしまい、ドラマに集中できないと思った。また、柴崎コウさんは演技力の高い女優なのに、ドラマで生かしきれていないと感じた。

○　５月２７日(土)のＥＴＶ特集「“いるんだよ”って伝えたい～横浜・特別支援学級の子どもたち～」を見た。発達障害の子どもたちや知的障害の子どもたちを取り巻く環境整備の充実が叫ばれるさなか、実際どの様に取り組みが行われているのか知りたかったので大変に興味を持って見た。以前聞いた講演会で、大阪の大空小学校木村泰子元校長は「インクルーシブとか、言葉だけの聞こえの良い社会では駄目！障害がある子どもを取り巻く環境の成熟が最も重要だ。障害がある子どもの周りがとにかく成長しないといけない。大空小学校では障害がある子もそうでない子も共

に学ぶ事に注力を注いで来た。気をつけなくてはいけないのは、特別支援学級は一歩間違えば障害のある子どもを社会から隔離してしまう傾向があることだ」と、今の障害教育のあり方に警鐘を鳴らしていたのを聞いた事があるが、今回、取り上げた横浜の事例も逆の意味で、見ることができてよかったと思った。印象に残っているシーンの中の１つに、小学校六年生の女の子が中学進級を機に、普通学級に進むか、特別養護支援学校に進むかの選択で悩んでいたエピソードがあったが、本人が「悩んだ末に自分で決めた！」と話していて胸が打たれた。普通学級に進もうが、特別養護支援学校に進もうが、大切なことは「自分自身で決める」ことのできる環境の整備だと感じた。自閉症の男の子が番組のディレクター宛てに送った手紙をラストシーンで紹介したが、しっかりした文面で、主張が際立っていて、番組の締めくくりを劇的に仕上げた感じがよかった。内容、構成、視点、メッセージが実に良くできた番組だったと思う。

○　６月１０日(土)のスーパープレゼンテーション＜字幕版＞「人工知能は雇用を奪うのか」を見た。ＮＨＫでも多くの番組でＡＩについて取り上げられており、ＡＩがどこまで進むのか、人に取って代わっていくのかといった問題は現在の大きなトピックだ。オックスフォード大学のマイケル・Ａ・オズボーン准教授の書いた論文「雇用の未来－コンピューター化によって仕事は失われるのか」は大きな話題となった。これから「消える職業」「なくなる仕事」について702の職種のうち約半分が機械に奪われるという内容だった。それに対して、このマサチューセッツ工科大学経済学部教授のデビット・オーター教授のプレゼンでは、現在の仕事は無くなるが、人の仕事は無くならないという明るい未来を描かせるものだった。２つの原理、人間の才能と創造性と人間の欲望がある限り、仕事は種類は変わっても無くならない、人間の才能と創造性の部分では、ルーチンワークは取って代わられるかもしれないが、人間が持つ専門知識、判断力、創造性はより重要なものになり、人間の欲望から生まれる仕事は尽きることがないと述べていた。以前の教育では暗記に頼るものが多かったものの、近年ではそうしたものはネットの発達によって、いつでもだれでも知ることが出来るようになり、それらの知識をどう生かし、どうつなげてイノベーションを起こしていくのか、人の感性に訴えるものを見出していくのかの重要性が言われるようになっている。このプレゼンテーションを見て、人間の可能性、知性のある人とはどういうことなのかを考えさせられた。

○　５月２日(火)の２度目のプラハ～ちょっとディープな海外旅行～「おこづかい４万円で充実旅」を見た。普通の観光では行かない場所や、プラハ特有のビール風呂などを取り上げていて、新しい発見があった。プラハ観光のよいＰＲになっていた。

○　６月６日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「兵馬俑は見ていた！～巨大遺跡に翻弄された人々～」を見た。文化大革命中に発見された兵馬俑（よう）が破壊されずに残った理由について、３つの視点から解説していて、とてもわかりやすく、完成度の高い番組だと思った。複数の視点から物事を考えることは非常に重要で、今後もそういった構成を意識して番組を制作していただきたい。

○　６月７日(水)のにっぽん縦断　こころ旅　朝版「６３８日目　富山県高岡市」を見た。型にはまっていない自由な雰囲気がおもしろかった。ことしの秋に大分、宮崎、鹿児島に来るようなので、とても楽しみにしている。

（ＮＨＫ側）

本日も貴重なご意見に感謝する。委員の皆さまの意見は、私たちも納得している。頂いたご指摘については、しかるべく対応し、報告していきたい。また、現場に対しても還元していきたいと思う。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成２９年５月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１８日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず「平成２８年度九州沖縄地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。続いて事前に視聴したＮＨＫスペシャル「熊本城　再建　“サムライの英知”を未来へ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、６月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	宮崎　和恵	（(一社）大分学研究会運営委員）
副委員長	深川　一太	（深川製磁（株）代表取締役社長）
委　員	明石　　良	（宮崎大学副学長）
	井上　龍子	（八幡駅前開発（株）代表取締役社長）
	小役丸秀一	（(株）グラノ２４Ｋ代表取締役）
	友安　　潔	（(株）西日本新聞社編集局総務）
	平田　大一	（(公財）沖縄県文化振興会理事長）
	山口　成美	（(有）シュシュ代表取締役）
	山元　紀子	（霧島高原ビール（株）代表取締役）

（主な発言）

＜ＮＨＫスペシャル「熊本城　再建　“サムライの英知”を未来へ」
（総合　４月１６日（日）　福岡局制作）について＞

○　ドローンや４Ｋカメラで撮影した映像を元に、熊本城を立体的に分析していた。「武者返し」が作られた理由や設計の謎は歴史ミステリーのようで、うまくひもといていたと思う。番組構成がとても充実していて、さすがＮＨＫだと感心した。また、熊本城築城が大河ドラマ「真田丸」の時代と重なっていたため、堺雅人さんのナレーションを聞いてドラマの内容を思い返しながら、楽しく番組を楽しく見ることができた。加藤清正が朝鮮出兵時に築城した城にも触れていたが、すぐに終わってしまった。もっと深掘りすることで、朝鮮とのつながりの歴史もわかり、現代の課題も見えたのではないか。

熊本城は西南戦争で薩摩軍と官軍が戦った場所なので、鹿児島県人にとっても思い入れが深い。崩壊した明治期の石垣は、戦争時に慌てて築いたのではないか。

熊本の復興の番組は観光にもつながるので、今後も放送してほしい。

○　１週間かけて熊本城の天守閣に鉄筋を取り付けた映像はこれまで見たことがなかった。ドローンの映像は非常にすばらしく、一本の石垣で耐えた飯田丸五階櫓を間近で撮影した映像はとても迫力があった。これらの映像を 3,000 時間以上かけて撮影したということを聞き、総力を挙げて番組制作に取り組んだことがよくわかった。

解説も全体的に数字や図解を駆使していて、とてもわかりやすかった。飯田丸五階櫓が石垣一本で残っていた理由や、石垣を直角に積み上げることの利点など、設計上のさまざまな工夫がよくわかった。

研究者や学者の「築城当時の設計者に話を聞いてみたい」といった生の声を番組に取り入れたことには感心した。

エンディングの桜と石垣の映像や、熊本城を歩く人々の映像を見て、熊本の明るい未来を感じた。映像、編集ともに後世に残していくべき番組であり、非常にすばらしかった。

○　学生の記念撮影の映像をなぜ使ったのか気になった程度で、全体的にはとてもよかった。堺雅人さんのナレーションや、研究者や学者の生の声は見る側を引き込むような印象があった。熊本城の築城の秘密や再建の様子を大々的に取り上げ、熊本の人たちはとても喜んだのではないか。

これまでドローンにあまり良い印象を持っていなかったが、有効な使い方があることがわかって感心した。

○　石垣崩落の原因や過程がわかりやすく解説されていて、とてもリアリティーを感じる番組だった。改めて大変な被害だったと実感した。崩落した石垣一つ一つは今後十数年の時間をかけて積み上げられていくと思う。石垣の修復のため、崩落した石一つ一つをナンバリングし、芝に並べた映像が紹介されていたが、復旧の過程を映像に残すことは、後世にとても役立つと思う。

東京スカイツリーの建設では、耐震の観点から法隆寺の五重塔を参考にした。熊本城の築城時の人々は石垣を鋭角に積み上げることの利点をどのように学んだのか。データがない時代の技術の高さを改めて感じ、非常に興味を持った。今後復興が進み、データと経験が蓄積されていくと、新しい発見がさらに出てくるのではないかと思った。

○　一般的にそそり立つ城ほど崩れやすいので、熊本城の「武者返し」は築城の過程で失敗を繰り返し、最終的にたどり着いた技法だと思う。何をきっかけに「武者返し」の技法を発見したのかが気になった。

ドローンの活用はおもしろい試みだった。次回は赤外線カメラを使用して石垣を撮影してほしい。水がたまっている部分が判別できて崩落の可能性がわかり、興味深い番組を制作できると思う。

○　「英知」ということばが非常に秀逸だった。タイトルに引かれて番組を見た。ほかの委員の意見にもあったが、ドローンの活用は大成功だった。熊本城を間近から撮影した迫力ある動画や、全体を撮影した動画で、番組に躍動感が出ていたと思う。丁寧に取材して事実を積み重ねていたこともよくわかった。城の設計を中心とした内容だったが、エンディングで市民のメッセージを入れるなど、シンボルとしての熊本城も盛り込んでいて構成もよかった。

私も築城時の失敗の過程がわかる内容だとよかったと考えている。熊本城の石垣について築城当時と明治の修繕を比較したことは疑問だ。明治以降は新しい城を築いていないので、ノウハウはなかったと思う。ナレーションは若干演技がかっていることが気になった。

○　関心の高い戦国時代の話題を取り上げ、ミステリーやサムライといったキーワードや、ドローンを使って撮影した美しい映像などが随所に盛り込まれていた。うまく視聴者を引きつける番組になっていた。数学を嫌いな人でも、「武者返し」の設計法の数式に興味を持てる構成になっていて、とてもおもしろかった。

冒頭で熊本城を「日本三大名城」と紹介しているが、適切ではないと思う。「大」があると城の大きさの意味を含むので、「日本三名城」が適切ではないか。

慶長時代の京都・伏見の地震と加藤清正の関係について簡単に触れていたが、当時、清正が伏見にいた確証はない。清正の「武者返し」の構想と京都・伏見の地震が関係しているかについてはもっと検証が必要だと思う。

文禄・慶長の時代は愛媛、別府、伏見と中央構造線沿いで地震が続いたあと、南海トラフを震源とする地震があった。今回の熊本地震も、同様の地震の前触れかもしれないと考えさせられるほど、インパクトのある番組だった。

ＮＨＫが自治体とともに熊本城再建までの様子を記録することで、映像を使った視覚的な現代の「石垣秘傳之書」になると思う。今、各地の城の石垣が老朽化している。熊本城の石垣の修復の過程を引き続き映像で残し、知識の伝達や広がりなどに活用してほしい。そのように思いをはせる番組だった。

○　冒頭４分間で番組全体をラッシュで見せていたが、「サムライの英知」、「謎」といったキーワードの提示や、学者や研究者の生の声をうまくつなぎながら見せており、つかみに成功したと思う。通常４分続くＶＴＲは長いと感じるものだが、逆にその長さが大変生きた構成となっていた。全体としても非常にうまくまとまっていた。また、数字で具体的に伝えていたことも評価できる。科学的な根拠や古文書などを丁寧に調べ、しっかり裏付けをとっていたとわかった。

冒頭のＣＧはとても格好がよかった。合戦や熊本城をバックに、ドローンが上空を飛ぶ姿は、時代が交差しているようで、タイムマシンに乗っているようなワクワク感があった。

研究者や学者が熊本城を歩く場面や崩壊した石垣を見て感想を漏らした場面など、編集するまでにたくさんの映像があったと思う。それらの映像が構成に合わせて見事に編集されていた。

「武者返し」はほかの城でも見ることができるのか。熊本城特有のものだとすると、まさに番組で示したとおり、加藤清正が京都・伏見の地震を踏まえて築城したと考えられると思う。

非常によい番組だった。今後もドキュメンタリー番組などでは、テーマの分析にあたって具体的な数字で紹介する番組を作っていただきたい。

○　「武者返し」のことばの由来は、人間がよろいを着て城壁を登るときの限界の角度ということではないか。

（ＮＨＫ側）

本当のところ歴史の話なので、ことばの由来はわからない。取材を進める中で戦後に誰かが言い始めたことがきっかけではないか、という説もあった。

○　最新技術を駆使し、時間をさかのぼって歴史とミステリーをひもといたような印象を受けた。

被災地の現状や課題を取り上げる番組は絶対に必要だと思うが、今回の番組のように熊本城というシンボル的存在について、科学と歴史と数字でアプローチする復興の番組に新しさを感じ、本当に秀逸だった。熊本の人にとって元気をもらう番組だったのではないか。

石垣の構造については徹底してひもといて見せてくれたが、逆に石垣に使用した石の由来や石垣を築いたのはどういった人々だったのかについてあまり触れられていなかった。番組を見てかえって興味が湧いた。

ナレーションは特徴があって少し気になった。壮大な番組だったので、読み手を意識せずに番組に集中できるナレーションのほうがよかったと思う。

○　４Ｋカメラのドローンを活用し、デジタル空間に完全再現された熊本城の映像は圧巻だった。現在の技術の進化に驚くとともに、3,000 時間というデータの解析に費やした膨大な時間を知り、公共放送としての執念と使命感が伝わってきた。危険で人が立ち入れない区域で、技術を駆使して精巧なデジタル映像を得ることや、映像を基に専門家と対策を検討していくことは、大規模災害時には極めて有効であると感じた。崩落した石垣のほとんどが明治時代以降に修復された箇所であったことや、築城当時の石垣の崩落が１０％に留まっていたことは大変興味深いデータだ。築城当時の技術や知恵が今なお相当なレベルであることや、加藤清正が、「築城の名人」とうたわれるに至った過程が詳細にリサーチ、検討されていった場面は見応えがあった。清正が熊本城築城前に慶長伏見地震の被害を目の当たりにしたという史実は初めて知った。また、「武者返し」の名で広く知られる石垣の形状の目的が、敵の侵入を防ぐだけでなく、地震に強い石垣構造の追求の結果という説は歴史的観点、科学的観点の双方から、知的好奇心を大いにかきたてられた。映像技術の高さ、美しさ、石垣に秘められた謎と因果を５０分間の中で堪能でき、相当良い番組であったと思う。「石垣秘傳之書」に記された知恵と、現代の最新技術を駆使することで、熊本城の過去と未来をより強固につないでいくことが可能になるのだと、視聴者に希望を与える内容であったと感じた。

（ＮＨＫ側）

地震直後、担当ディレクターが被災地を取材した際、たくさんの被災者が城の前で泣き続けていたそうだ。その様子を見て、改めて熊本城が市民の心のシンボルであると感じ、城が失われたことの意味や市民が立ち直っていく姿を追いかけながら、被災者を応援する番組をつくりたいというのが、この番組をつくる大きなきっかけだ。

歴史検証も科学検証もどこまで行うのか際限がなく、その見極めが難しかったため、ことばの表現も一つ一つ意識した。最終的には当初の構成と全く違うものになり、なんとか形になったという感じだ。

６月２４日(土)に放送予定のＢＳ１スペシャル「熊本城再建」では、一般市民の映像を増やし、科学検証、歴史検証をさらに

深めて放送する。ナレーションは井上二郎アナウンサーだ。この放送も楽しみにしていただきたい。被災地の応援歌のような番組になればよいと思っている。

今後もＮＨＫと自治体とで熊本城の復興に向けた共同研究を行っていく。

＜放送番組一般について＞

○　４月１５日(土)のにっぽん紀行「みんなの本屋へようこそ～北海道　留萌～」(総合 後6:05～6:38）を見た。「出版不況」が叫ばれて久しい中、業界の中でも特殊なケースとして有名な「留萌ブックセンター」。1990年代には全国に２万７千店あったといわれている書店数は、現在ピーク時の半分にまで減り、市町村に一軒も本屋がない地域も増え続けている。町の人たちが自主的な署名活動をし、東京の有力書店に出店の依頼をかけて実現した「留萌ブックセンター」は極めて珍しいケースと感じられる。その活動の中心を担った人々へのインタビューで、「世の中から取り残されて離れ小島にいるみたいに感じた」「本屋はいろんな文化の発信拠点で、本屋があるから子どもや学生も来られる」というコメントは、一度本屋を失った人だからこそ言える、心から切実なコメントだと思う。実際に、週に何度も来店するお客が多いことはもちろん、欲しい本や雑誌はネットでも買えるが、商品情報をネットで調べ、わざわざ本屋まで足を運んで取り寄せを依頼するお客の気持ちと姿に感銘を受けた。本屋を地域社会の欠かせないインフラだと理解し、応援の意味も兼ねて自発的に足を運び、購入するのだろう。自分たちが買うことで、自分たちにとって必要な場所を守る、続けられるということを実感している人々の姿がよく描き出されていて、「地域と商い」の原点を見たような気がした。 また、人気作家の新刊の入荷冊数８０冊は、ほどほどの人口規模の中小書店ではとても確保できない数で驚いた。普段からその本屋で買うお客がいるからこそ仕入れが上手くいっている証左で、開店以来黒字を続けている一つの根拠として、出版関係者が視聴しても説得力のある１シーンだったように思う。番組のコンセプトからして無粋かもしれないが、書店減少や出版販売金額の下降、ネット書店や電子書籍販売額の増加などのデータを紹介することも、この本屋の奇跡性を強調するのに有効だったのではないだろうか。また、書店の利益構造の厳しさを具体的に紹介することで、売り上げを支える地域のお客と、書店ボランティアの双方が存在することで成り立つという内外の要因をより伝えることができたのではと思う。案内人を務めた女優の中江有里さんのナ

レーションと、ウォンウィンツァンさんのピアノ曲がとても美しく和やかで、心地よかった。まさに一つの素敵な絵本・物語を読み終えたような余韻が残り、ジワリと温かい気分を楽しめた。

○　４月２８日(金)のなるほど実感報道ドドド！「だから妻を傷つけた～ＤＶ７万件加害者の心理に迫る～」は、重要なテーマであることに間違いないが、九州に特化した内容かどうかわからなかった。例えばＤＶの数を説明する資料に「警察庁調べ」という出典情報があったが、全国の数か九州の数かわからなかった。取材相手も九州の人かどうかがよくわからなかったので、九州沖縄向けに放送する番組で取り上げる必要があったのか疑問に思った。

○　沖縄県内向けでも全国放送でも、沖縄本土復帰４５年を取り上げてくれた。
沖縄本土復帰４５年「写真家が見つめた沖縄」（総合 4月30日(日)、5月3日(水) 後1:05～1:50、4日(木) 後1:05～2:00 沖縄県域)を見た。出演した本人が自身を語る「日曜美術館」などのアーカイブス番組を放送していた。亡くなった人に取材することは二度とできないが、アーカイブスの番組では本人のことばで思いや考え方を知ることができる。今回沖縄復帰４５年というタイミングに合わせて放送したように、何かのタイミングにＮＨＫの過去の番組を放送するとよいと思った。

○　５月４日(木)の「おげんさんといっしょ」（総合 後10:50～11:50）を見た。周囲でもとても反響が大きく、話題になった。星野源さんはラジオ番組でリスナーの反応を見ながら番組作りをしてきた人だ。くだらない内容をおもしろく取り上げ、緩い雰囲気でグダグダなところがかえって楽しかった。生放送では信頼できる人に番組の切り盛りを任せることで番組が盛り上がることがよくわかった。生放送と収録の番組の作り方と生かし方の違いを強く感じた。

○　５月６日(土)の「ばあちゃんアイドル、シンガポールへ行く！」（総合 前8:15～9:14 沖縄県域)は、最初の２分で視聴者をつかんだと思う。昨年末の紅白歌合戦で、桐谷健太さんの「海の声」のバックで歌い、目標に掲げていた紅白歌合戦の出場をかなえるなど、老いを恐れずに人生を楽しんでいる様子がよくわかった。一流の島んちゅの姿を見ることができる、よい番組だった。

○　５月７日(日)のＮＨＫスペシャル「世紀の発見！日本の巨大恐竜」を見た。北海道むかわ町で発見された「全身骨格化石」をきっかけに、恐竜の時代を明らかにしていく展開はふだんのドキュメンタリー番組と違って重い感じがせず、気楽な気持ちで番組を見ることができた。

○　５月１０日(水)のクローズアップ現代＋「相次ぐ“墓トラブル”　死の準備の落とし穴」を見た。身寄りのない人や認知症の人が亡くなったときの問題をリアルに伝えていた。家族の遺骨などを大切に守ってきた人が、亡くなったときには自身を大切にしてくれる人もなく、無縁として自治体に手続きされる実態に心が痛んだ。一方で、ゲストのコメントがあまりに表面的で問題の解決に結びついたものではなかったのが残念だった。事前の打ち合わせを入念にするべきだったと思う。一般的に団塊の世代と少し上の世代は、長男を除いて地方から東京や大阪に集団就職したため、長男に子どもがいなかったり、子どもが地方から出てしまったりすると、先祖のお墓を守る人がいなくなってしまう。番組で訴える終活の問題は地方創生にも大きく関わっていると強く思った。引き続き取材し、番組にしてほしい。

○　５月１１日(木)の所さん！大変ですよ「サラリーマンに人気！？“オーナー”の光と闇」を見た。サラリーマンのセカンドビジネスと詐欺の関係について紹介していたが、構成が単純すぎると感じた。今後はもっと工夫してほしい。

○　５月１２日(金)のなるほど実感報道ドドド！「九州から始まる！ニッポン林業の夜明け」を見た。日本の林業はとても厳しく、業界も疲弊しているとずっと思っていたが、番組を見て、ここ１０年で大きく活性化してきたことを知った。希望を感じる番組だった。

○　なるほど実感報道ドドド！「九州から始まる！ニッポン林業の夜明け」を見た。構成がしっかり論理的に組み立てられていて、とてもよかった。アジアに近い九州の立地条件や地域性、植物の生育環境、日本の技術がわかりやすく紹介されていた。さらに人材育成など将来についても触れていて、とても完成度が高いと思った。

　ドローンを使ったデータもうまく分析していた。今、農業の分野ではＩｏＴとドローンを使った農業も進んでいるので、ぜひＩｏＴとドローン活用をテーマにした番組も制作してほしい。

○　なるほど実感報道ドドド！「九州から始まる！ニッポン林業の夜明け」を見た。こん包材の材料にするため木材の輸出が増えていたことや、ドローンなど新しい技術の活用が進んでいることは初めて知った。輸出の大部分を九州が占めている理由が、東南アジアに近く輸送費が抑制できるとことだとよくわかった。また、日本の木材はカビが生えにくいことや、日本のプレカットの技術の高さなどが関係していることも、わかりやすく紹介されていた。日本の林業の未来には暗いイメージを持っていたが、林業の可能性を感じるよい番組だった。

○　なるほど実感報道ドドド！「九州から始まる！ニッポン林業の夜明け」を見た。九州の土地と産業を題材に、九州の人に取材をして九州の視聴者に届けた、まさに九州の番組だった。非常に良かった。今までの「なるほど実感報道ドドド！」の中で一番よかったと思った。

（ＮＨＫ側）

「なるほど実感報道ドドド！」がここまで評価されたことは初めてだと思う。常に九州沖縄を念頭にテーマを考えているが、選び切れていないときがある。今後も九州沖縄を第一に番組作りをしていきたい。

（ＮＨＫ側）

なるほど実感報道ドドド！「九州から始まる！ニッポン林業の夜明け」は、これまでの放送で一番よく見られ、視聴率が１０％を超えた。一方、なるほど実感報道ドドド！「だから妻を傷つけた～ＤＶ７万件　加害者の心理に迫る～」はご指摘のとおり、九州沖縄の視聴者に身近なテーマ設定だったかというところに課題が残ったと思う。

○　５月１４日(日)のあの日　あのとき　あの番組「勝負～将棋名人戦　その裏側に迫る～」を見た。最年少プロ棋士の藤井聡太さんの話題をよく耳にするので、とてもよいタイミングで放送したと思った。あまり将棋には詳しくなくても、「名人戦とは何か」ということからわかりやすく紹介していて、改めて視聴者目線の番組作りをするＮＨＫの姿勢に好印象を持った。

○　５月１４日(日)のＮＨＫスペシャル「和食　ふたりの神様　最後の約束」を見た。すし職人の小野二郎さんと天ぷら職人の早乙女哲也さんの見えない世界の対決が興味深く見応えがあった。出演者２人がすしと天ぷらを食べるシーンを中心に１時間の番組ができていたことに驚いた。ＮＨＫスペシャル「世紀の発見！日本の巨大恐竜」とは構成や展開方法が全く違っていて、同じ「ＮＨＫスペシャル」でも作り方が全く異なることに驚いた。

○　ＮＨＫスペシャル「和食　ふたりの神様　最後の約束」を見た。和食のスペシャリストである小野二郎さんと早乙女哲哉さんに注目し、二人が考える人生の過ごし方や終え方について取り上げたことはとても興味深かった。人間ドラマとして、おもしろく描かれていたと思う。すしのシャリに魚の切り身が沈む様子が分かるほど映像が鮮明で、目の前で実際に見ているように感じた。映像技術の高さや将来性を改めて実感した。

○　５月１５日(月)のきんくるスペシャル「沖縄カタリバ！～復帰４５年と、これから～」（総合 後7:30～8:45 沖縄県域）を見て、一般の人が参加する討論番組は収録がよいと思った。参加者の人となりをＶＴＲでしっかり紹介した上でコメントを見せたほうが、視聴者によく伝わると感じた。基地問題など重いテーマについても議論したが、きちんと意見を言える若い世代がいたこともあり、最後に「こういう若者がいると知っただけで参加した意義があった」という参加者のことばがあった。収録を前提とするからこそ、語り合う場の雰囲気作りを丁寧に行った結果のことばだと感じた。今後の番組作りの参考になればと思う。

○　５月１５日(月)のクローズアップ現代＋「沖縄復帰４５年　深まる本土との“溝”」では、「きんくるスペシャル」を全国放送向けにアプローチを変えて展開していて、とてもよかった。

○　５月１７日(水)の「ニュース７」直前に「秋篠宮ご夫妻長女の眞子様　大学時代の同級生とご成婚へ」の速報スーパーが流れた。「ニュース７」では、何かしらのニュースを報じたあとに触れると思っていたが、トップでそのまま厚く伝えていて、とても驚いた。

○　５月１８日(木)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を見た。「けさのクローズアップ」の企画では、博物館や美術館の経営が苦しいため、保存がいいかげんにされてしまっていることをリポートしていた。取材した斎藤基樹記者が博物館に３５年も通い続けていることに驚くとともに、齋藤記者が博物館に通う中で感じた疑問から、全国の博物館にアンケートをとり、取材を深めていく姿を見て、一つの企画ができる過程を見た気がした。忙しい時間帯に見たリポートだったが、考えさせられたと同時に、同じテーマで番組が作られるのだろうかとワクワクしながら視聴した。

○　大河ドラマ「おんな城主　直虎」に元気がない感じがする。知人との会話でもあまり話題に上らない。大河ドラマファンとして残念なので、なんとか盛り返してほしい。

○　５月２日(火)と９日(火)の先人たちの底力　知恵泉（ちえいず）「邪馬台国はどこにある？　古代ミステリーを楽しもう」を見た。古文書や遺跡から邪馬台国を丁寧に検証していた。自分が抱いていたよりもはるかに広域に経済活動が行われていたことなどを知って、邪馬台国のイメージが大きく変わった。番組のセットは居酒屋風で柔らかい雰囲気だが、内容は歴史のロマンを感じさせるもので楽しく視聴した。

○　５月３日(水)のオイコノミア「多数決だけじゃない！決め方の経済学」を見た。多数決を行う場合、目標が一緒であることが前提だが、そもそも前提が理解されずに多数決が行われているということがわかった。物事を決めるとき、消去法を用いた決選投票式や配点を使ったやり方などで、結果が変わることを知った。番組の見せ方や構成のおもしろさがうまく出ているよい番組だと思った。今回のテーマが「経済学」か若干疑問が残ったが、今後もチャレンジングな番組を続けてほしい。

○　「ＣＯＯＬ　ＪＡＰＡＮ～発掘！かっこいいニッポン～」は、字幕の出し方など多くの国の人が楽しめる工夫をしている。海外の人たちのディスカッションを通して、海外の人の視点も学ぶことができ、新しい発見がある。観光や就労が目的の訪日外国人が増えているので、とても参考になると思う。

５月７日(日)のＣＯＯＬ　ＪＡＰＡＮ～発掘！かっこいいニッポン～「美術館～Ａｒｔ　Ｍｕｓｅｕｍｓ～」では、新宿の「サムライミュージアム」について、海外の人たちが都心で刀剣などを見れることや、靴を脱いで畳を歩いて鑑賞することに感動するなど、日本人がふだん気にしないことに驚くのだと知っておもしろかっ

た。

○　５月１３日(土)の京都人の密（ひそ）かな愉（たの）しみ「桜散る」(BSP 後9:00～10:59）を見た。常盤貴子さんが出演するドラマを中心に、京都ならではの老舗のお菓子屋や、京都の方言、京料理などが紹介されていて、京都の日常生活を知ることができた。番組構成や登場人物の設定など、視聴者が楽しめる番組になっていて、２時間飽きずに見ることができた。とてもおもしろかった。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル」や「なるほど実感報道ドドド！」に対して大変温かいお褒めのことばを頂いた。担当者も励みになると思う。甘えることなく、さらに気を引き締め、期待に応えられる番組をつくっていきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

平成２９年４月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２０日（木）、ＮＨＫ福岡放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴したなるほど実感報道ドドド！「熊本地震から１年　被災地のいま、これから」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、５月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	宮崎　和恵	（(一社）大分学研究会運営委員）
副委員長	深川　一太	（深川製磁（株）代表取締役社長）
委　員	明石　　良	（宮崎大学副学長）
	井上　龍子	（八幡駅前開発（株）代表取締役社長）
	小役丸秀一	（(株）グラノ２４Ｋ代表取締役）
	友安　　潔	（(株）西日本新聞社編集局総務）
	平田　大一	（(公財）沖縄県文化振興会理事長）
	山口　成美	（(有）シュシュ代表取締役）
	山元　紀子	（霧島高原ビール（株）代表取締役）

（主な発言）

＜なるほど実感報道ドドド！「熊本地震から１年　被災地のいま、これから」
（総合　４月１４日（金）　福岡局制作）について＞

○　納得できるゲストの人選だった。３人とも熊本出身で、被災者の立場に立ってコメントしていたことがよく伝わった。

７２分の生放送の中で、被災地の今の様子や復興に向けた前向きな取り組みがよくわかった。大分と連携して地域全体の活性化を目指す姿などから、復興に向けた希望を感じることができ、非常に心地よく見ることができた。一方で、被災者が「住まい」に対して不満を募らせており、行政の取り組みが十分かどうか気になった。

屋台村からの中継では、取材相手の増永信喜さんとのインタビューの途中で、中継を切り上げてしまい、少し肝を冷やしたが、番組後半は明るい話題で終わってよかった。

○　私も、増永信喜さんとのインタビューを途中で切り上げてしまったことには驚いた。事前に打ち合わせしていたと思うので、あらかじめリスクを減らす工夫ができたのではないか。

全体としては、被災者が現状に感じている不安をリアルに共有でき、私たちに何ができるか考える、とてもよい機会になった。また、被災から再建した街に人が戻ってこないといった問題が阪神淡路大震災や東日本大震災のあとに起きた。こうした過去の経験を、熊本地震からの復興ではどのように生かすことができるか、とても考えさせられた。

○　復興に向けた行政のリーダーシップや取り組みがわかりにくいと感じている。益城町の人口は震災前から大きく減った。地元に戻りたいと思っていても、時間の経過に伴って戻りにくくなってしまうので、震災復興には行政の強いリーダーシップが必要だと思った。

由布院温泉と黒川温泉の連携については「おかみの会」も取り上げて欲しかった。積極的に活動しているので、取り上げることで、とてもよい発信になったと思う。

震災による道路の寸断で、救急車の移動に時間がかかったり、熊本を訪れる修学旅行の数が減ったりなど、被災地の人たちは、私たちには見えない苦労がたくさんあると思う。言葉に詰まりながら、ゲストの片岡安祐美さんが「笑顔も伝染する」とコメントしたことが、まさに被災者を代弁していたと思った。

○　震災による観光への影響では、「九州ふっこう割」についても触れてほしかった。「九州ふっこう割」は過去の震災を踏まえて観光客を呼ぶべく発行されたが、結果的に潤ったところと潤っていないところの差が大きく、破産してしまった老舗の観光施設もある。観光客の減少は長期にわたって影響があるので、実態をもっと掘り下げてほしかった。

実際に災害が発生した時はパニックになるので、救急医療のところでは、ふだんから危機感を持って繰り返し訓練する必要性について触れるべきだったと思う。そのほか、ナレーターの声が軽い感じがした。震災を扱った番組なので、人選はもっと慎重にすべきだったと思う。

○　長く感じないで７２分間見ることができた。非常にコンパクトにまとまっていたと思う。地震によって緊急医療に時間がかかるようになったことは、東日本大震災後の東北でも同様の事例があるので、あまり時間を割く必要はなかったと思う。被災した熊本の子どもたちの姿など、熊本の事例をもっと伝えてほしかった。

私も行政がもっと地震に備えることができなかったのかと疑問に感じている。ぜひ、行政の地震前の取り組みについて取材し、放送してほしい。

制作担当のディレクターはよく頑張ったと思う。若い人たちの挑戦をＮＨＫが見守り、番組審議会で出た意見を受け止めて、自信を深めてほしい。

○　中継が非常にお粗末だった。まず、キャスターの後ろ姿が映ったとき、腰にある無線機がはっきり見えた。番組制作の裏側を見たように感じて気になったので、隠すべきではなかったか。また、中継で行われたインタビューは表面的な質問の繰り返しで、増永さんとのインタビューを途中で切り上げてしまう場面もあった。制作者がインタビューで何を伝えたいか、意図が全くわからなかった。この中継を見て、制作側は被災者への配慮をきちんと意識していたか疑問に思った。おごりはなかったか。取材を受ける側が、取材のトラウマを持つきっかけをＮＨＫが作ってはいけないと思う。中継後に話を切り上げてしまった増永さんに対して、フォローを行ったのか確認したい。後半は明るい話で進行していったので、中継も相手の人間性がわかるような人情味がある内容だとよかった。

「なるほど実感報道ドドド！」はキャスターが変わってリニューアルしたというが、ゲストはほとんど変わっていない。今回のゲストは大きなイヤリングをしていたが、テーマが重い番組にはふさわしくなかった。

○　番組を通して最終的に何を伝えようとしているかわかりにくかった。「住まい」、「医療・健康」、「観光」の３つの項目を取り上げたことはよいと思うが、東日本大震災と熊本地震とでは取り巻く環境が大きく異なっている。これらの違いをしっかり深掘りして伝えてほしかった。また、被災者の支援にはさまざまな形があるが、最終的には心のケアが重要になる。心のケアの重要性や地震への備えについて、ＮＨＫが市町村や視聴者に伝える番組にする方向性もあったと思う。

○　取り上げた３つの項目の掘り下げ方はよかったと思うし、ＮＨＫのこれまでの取材の蓄積もよく生かされていた。また、人を中心とした番組の構成もゲストの選定もよく、熊本地震からの復興を視聴者に訴える点で、とてもよい番組だったと思う。

しかし、益城町の屋台村からの中継は失敗だった。益城町宮園地区区長の増永さんが公民館の建設を訴えている理由は、住民のコミュニティーの形成が理由ではないかと思うが、その理由について触れていなかった。もっと掘り下げて話を聞くと充実した中継になったと思う。最後まで表面的な質問だったので残念だ。インタビューをするキャスターの人選はほかにも選択肢があったのではないか。もっとよい番組になったはずなのに、屋台村からの中継がかえって番組全体の完成度を下げてしまった。

○　テーマの絞り込みと展開のしかたが明解で、復興の現状や課題がよくわかった。被災地の方が考える課題と、ＮＨＫの記者の解説もしっかりかみ合っていたと思う。

ほかにも意見があったが、私も中継は失敗だったと思う。当たり前の質問や、見てわかる質問の繰り返しになっており、改めて取材する現場の力の重要性について感じた。増永信喜さんがインタビューを切り上げる時に「ちょっと待ちなっせ」と最後に言ったことばがとても重く感じた。

永井伸一アナウンサーが番組を担当するようになってから、メリハリがついてよくなっていると感じる。「なるほど実感報道ドドド！」の方向性が見えてきたと思う。

○　３つのテーマのうち、最初の「住まい」が特に印象的だった。代々益城町に住み、今後も住み続けるという人と、益城町に念願のマイホームを購入したが、二重ローンの関係から益城町に戻るかどうか悩む人と、象徴的な二組を取り上げていた。住宅が全壊した家庭でも、家族構成などの諸条件によって大きく事情が異なることがはっきりと伝わってきた。熊本局の吉元明訓記者が紹介したデータ「昨年９月時点から３か月経過した１２月時点での調査で、元の場所に住みたい人の割合が５９％→４７％に低下している」という切実なデータと、益城町の住民は地震前の約２０％という数値を考えると、住まいの問題解決が遅れるほど、町自体の復興が極めて厳しくなるのではと、暗たんたる気持ちになった。増永さんが区長を務める宮園地区の総会での公民館再建を巡る意見の相違も、個々の実情や価値観の違いを乗り越えていく着地点が今後見つかるかどうか、不安に思った。

益城町屋台村からの中継では、増永さんご夫婦が出演されたが、ほんの一言程度のインタビューで中継が引き取られてしまい、増永さんの「ちょっと待ちなっせ！」という言葉が音声に入っていたことが、その後の視聴中もかなり気になった。時間の制約がある中だとは思うが、どんなことを、どのようなポイントを押さえて話してほしいかを事前に打ち合わせする事も必要だと思う。増永さんは個人としても、地区の長としてもたびたび取り上げられているので、もう少し中継で丁寧に話を聞いてほしかった。屋台村からの中継を担当したリポーターは、はつらつとして好感の持てる印象だったが、言い間違いや言いよどむ場面が散見されたことが少しもったいなかったように思う。

○　医療・健康に関しては阿蘇立野病院の上村晋一医師の意志の強さに心から感銘を受けた。医療はただ受けられれば良いのではなく、見知った信頼があるからこその信頼感もまた大切なのだと、映像から十分に伝わった。また、観光では客数減に悩む地元ホテルが、「語り部」として活動する被災者と連携し、防災教育の観点を修学旅行の目玉として売り込むアプローチを紹介されていて、非常によいチャレンジだと思った。しかしながら、どちらも継続性、採算のことを考えると、相当に厳しい

だろうと想像するが、そういった印象・感想が出てくることを含めて、被災地の現状を多くの人に知ってもらうことが重要なのだと思う。ぜひこれからも、今回紹介された事例、取り組みがどうなっているのかを、伝えていただきたい。

（ＮＨＫ側）

災害や震災に関する番組は今回初めて担当した。制作を進めていく中で、ふだん以上に気を遣わなければならないことが多く、周りの人に助けられながら放送に至った。

放送時はスタジオにいたため、中継場所では別のディレクターが仕切っていたが、近く増永さんにお会いするので、そこでおわびするつもりだ。

（ＮＨＫ側）

増永さんは震災直後から取材を重ねている方なので、引き続き関係を維持し、今後も取材をお願いしたいと考えている。生放送のときは、もう一度中継に出ていただくか放送中も検討したが、出ていただかない判断をした。今回多くの意見を頂いたので、今後に生かしていきたい。

（ＮＨＫ側）

この場で貴重な意見を頂くたびに、ディレクターの成長を実感している。まだまだこれからだという部分もあるが、今後も温かい目で見守っていただきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月２２日(水)の放送記念日特集「今　テレビはどう見られているか」（総合 後10:00～10:50）を見た。ネットがテレビのライバルではなく、共存し発展させていく視点がおもしろかった。また、ゲストの春香クリスティーンさんが若い人ならではのコメントをしていたのでよかった。

○　若い人にテレビを見てもらうためには、番組審議会のような定期的な場で、若い人の意見をしっかりと聞くことが重要だと考えている。若い人も含めて、みんなでＮＨＫの番組を語る場があると見る人も増えてくると思う。

○　若い人が意見を交わす場を設けるべきだという意見があがったが、以前も同じ意見があった。せっかくの機会なので、経営レベルで検討していただきたい。

（ＮＨＫ側）

この番組審議会のメンバーに加えてもよいと思うし、そのほかにも若い人から意見を聞く機会を設けていけばよいと思っている。

今後もＮＨＫへの温かく厳しいご指摘をお願いする。

○　３月２７日(月)のノーナレ「諦めない男　棋士　加藤一二三」を見た。ご本人や周囲の方のコメントがとても印象的だった。この番組は取材対象となる人の個性によって番組の完成度が決まると思うので、今後どのように展開していくか関心を持っている。ぜひ続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

近年のＮＨＫのドキュメンタリー番組はナレーションが多いという指摘を受けている。なかなか世界的な賞もとれていない。私たちが番組を作る上で、現状を打破するチャレンジをしていこうと「ノーナレ」を始めた。ナレーションがないため番組の構成はいろいろと試行錯誤しているが、チャレンジ精神にあふれた人たちが制作しているので、温かい目で見守っていただきたい。

○　４月１日(土)のＮＨＫスペシャル「足元の小宇宙Ⅱ　絵本作家と見つける“雑草”生命のドラマ」を見た。８６歳の女性が植物を追いかけ、絵本を描く姿を見て、自分の将来の生き方や、人生の楽しみ方を考えるきっかけになった。生き生きとした姿が爽やかで、とても楽しく視聴できた。

○　４月７日(金)のなるほど実感報道ドドド！「“情報爆発”～熊本地震１年　ＳＮＳをどう生かす？～」を見た。今の時代背景にうまく照らしながら、ＳＮＳでの発信が社会的な問題になる事例をわかりやすくまとめていたと思う。災害の正確な情報は視聴者がＮＨＫに一番期待していることだ。「情報トリアージ」ということばのように、情報の正確性を見極めることは難しいので、ＮＨＫは正確な情報を伝えるよう引き続き努力していただきながら、若者にＳＮＳの情報の判断の難しさについて

呼びかけてほしい。

○　４月７日(金)のなるほど実感報道ドドド！「“情報爆発”～熊本地震１年　ＳＮＳをどう生かす？～」を見て、東日本大震災の時、千葉のコンビナート火災で周辺に危険物質が飛んでいるため、外出時は長袖を着るべきという情報があったが、事実ではなかったことを思い出した。ＳＮＳの危険性を痛感した出来事だった。

○　４月７日(金)のなるほど実感報道ドドド！「“情報爆発”～熊本地震１年　ＳＮＳをどう生かす？～」を見た。確定的な情報は広がらず、重要だが不確実な情報が広まりやすいという指摘や、情報の発信や拡散は東京が圧倒的に多く、ＳＮＳは場所の制限がないという指摘、また内閣府の支援を受け、ＳＮＳの分析システムが研究開発されていることなど「なるほど」と思う機会が多々あった。しかし、その後自治体独自での活用は困難だという指摘もしていて、結局何が言いたいかわからないまま番組が終わってしまったと感じた。

○　４月８日(土)の「おはサタ！」で、キャスターがネパールの民族衣装を着て、バイシャキメラ・ネパールフェスティバルの紹介をしていた。福岡に住むネパール人の数がここ１０年で２０倍になっていることの説明が、親日派であることと、生活環境がよいという２点しか伝えず、雑だった。背景にはネパールに日本語学校が増えていることや、福岡にネパール人の留学生を受け入れる学校があること、働き手として必要だということなどさまざまな理由がある。時間の制約がある中で、詳細に説明する必要はないが、あまりにもひどかった。

○　４月１３日(木)の所さん！大変ですよ「霜降り牛肉に異変！？　おいしい牛肉の謎」を見た。おいしい牛肉の選び方についてしっかり触れたことは評価できるが、食べ方についても伝えてほしかった。また、和牛が今世界的なブームになっているが、国内で出生し、国内で飼育されたものだけを指すことにも触れてほしかった。

○　４月１３日(木)のクローズアップ現代＋「熊本地震　知られざる“情報爆発”～追跡・ＳＮＳ２６００万件～」では、なるほど実感報道ドドド！で私が疑問に感じた部分について、被災地自体は優先すべきことがほかにあるため、周辺自治体が支援に必要なことをつかむべきだという納得できる補足をしていた。内容もよりわかりやすくなっていたと思う。なにより九州の番組をしっかりと全国に発信している

ことがわかり、うれしかった。

○　４月１４日(金)の「イブニング長崎」を見た。番組内で「諫早湾干拓事業　対立と混迷の２０年」として、諫早湾干拓事業について伝えていたが、農業か漁業かという論点でのみ報道されていると感じた。本来は昭和３２年の諫早大水害を教訓とした防災の目的もあったはずだが、放送の中で自然災害のことについて触れられていない。当時被災された人は年々減少し、今の若い人は諫早湾干拓事業に防災の目的があったことを知らない人もいる。干拓事業には市民の生命、財産を守る役割があるので、ＮＨＫにはしっかり報道してほしい。

○　４月１６日(日)のＮＨＫスペシャル「熊本城　再建　“サムライの英知”を未来へ」を見た。４Ｋドローンを活用し、デジタル空間に完全再現された熊本城の映像は圧巻だった。現在の技術の進化に驚くとともに、3,000時間というデータの解析に費やした膨大な時間を知り、公共放送としての執念と使命感が伝わってきた。危険で人が立ち入れない区域で、技術を駆使して精巧なデジタル映像を得ることや、映像を基に専門家と対策を検討していくことは、大規模災害時には極めて有効であると感じた。崩落した石垣のほとんどが明治時代以降に修復された箇所であったことや、築城当時の石垣の崩落が１０％に留まっていたことは大変興味深いデータだ。築城当時の技術や知恵が今なお相当なレベルであることや、加藤清正が、「築城の名人」とうたわれるに至った過程が詳細にリサーチ、検討されていった場面は見応えがあった。清正が熊本城築城前に慶長伏見地震の被害を目の当たりにしたという史実は初めて知った。また、「武者返し」の名で広く知られる石垣の形状の目的が、敵の侵入を防ぐだけでなく、地震に強い石垣構造の追求の結果という説は歴史的観点、科学的観点の双方から、知的好奇心を大いにかきたてられた。映像技術の高さ、美しさ、石垣に秘められた謎と因果を５０分間の中で堪能でき、相当良い番組であったと思う。「石垣秘伝書」に記された知恵と、現代の最新技術を駆使することで、熊本城の過去と未来をより強固につないでいく事が可能になるのだと、視聴者に希望を与える内容であったと感じた。

○　４月１７日(月)のクローズアップ現代＋「“嫁”に家を奪われる！？中国４２１社会の衝撃」を見た。前半は中国の高齢化や独居老人増加の実態について触れていたが、後半は中国の巨大マーケットに対して、日本にもチャンスがあるという市場経済の内容にシフトしてしまい、残念だった。高齢化に対する中国の政策や、日本の

ノウハウの生かし方など、もっと深める方法があったと思う。何を伝えようとしているかわからなかった。

○　４月１８日(火)の「あさイチ」を見た。前半の「夢の３シェフ競演　オレのお弁当」は、ブロッコリーやトマトを使って色鮮やかなお弁当を作っていた。今の時期にぴったりだと思いながら楽しく見た。後半の「ピカピカ日本」は新潟県三条市の鍬（くわ）作りの中継だったが、あっという間に終わってしまった印象を受けた。もの作りは日本の基盤だと思うので、もっと深掘りしてしっかり伝えてほしかった。番組前半の内容がよかっただけに残念だった。

○　４月２０日(木)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の「けさのクローズアップ」で家庭内性暴力被害について伝えていた。重いテーマを朝から放送することは難しいことだと思うが、視聴者にとっては勇気をもらえるので、今後も発信し続けてほしい。

○　「連続テレビ小説　ひよっこ」も非常に楽しく視聴している。要所要所に昔のトランジスタラジオや「ひょっこりひょうたん島」など、時代を感じる仕掛けがあるのがおもしろい。また、主題歌のあと本編が始まるので、ほかのことをしていても、主題歌を聞くと、番組が始まるとわかる。ストーリーもおもしろいし、古谷一行などキャストの人選も魅力的だ。今後の展開も楽しみにしている。

○　「ごごナマ」も興味深い番組だ。まず、司会の３人は人選も興味深いし、見る側がハラハラすることも平気で言っている。４月４日(火)はゲストの大石静さんが「なめんじゃねぇよ」といった過激な発言をしていた。また、途中でニュースや記者会見の中継が入って進行がめちゃくちゃになった。しかし、それでもおもしろかった。古館伊知郎さんが、ＮＨＫが３時間も生番組に割くことはすごいといった理由がとても理解できた。本格的な生番組が始まったと思う。非常に期待しているので、今後も応援していきたい。

（ＮＨＫ側）

番組宣伝にならないよう注意しながら放送している。結果的にＮＨＫの何らかの番組とつながりのある方をお呼びすることが多いが、番組宣伝ではない形でおもしろいものを目指している。

応援していただいて感謝している。

○　「ニュースウオッチ９」の新キャスターは、２人とも「ニュースチェック１１」に出ていた人を起用したので、非常に興味を引かれた。有馬嘉男キャスターは「ニュースチェック１１」と違った役割をしっかり果たしていると思う。自分のことばでニュースを伝えているので、わかりやすく理解しやすい。
　今回の改定で、ニュースの伝え方がこれまでと変わったと感じた。ＮＨＫが変わろうといろいろ取り組んでいることがわかった。

○　「ニュースチェック１１」は、有馬嘉男キャスターと桑子真帆アナウンサーの時から楽しんで見ていた。今回の改定で、長尾香里キャスターと青井実アナウンサーに交代したが、２人の個性がよく出ていて番組に合っている。非常によい形でスタートしたと思う。

○　体調を崩し、しばらく食べ物を食べられない日が続いている時に、３月２７日(月)のグレーテルのかまどsecond season「杉浦日向子のクリームパン」を見た。クリームパンが作られるプロセスを見るうちに、食べたいと思うようになって、実際にクリームパンを買った。食べると本当においしくて、味覚に訴えるテレビのすごさを改めて感じた。

○　４月９日(日)のバリバラ「目を覚ませ乙武さん　バリアフリーのために！」は、見る側が驚くほど、スタジオで本音が飛び交っていて感心した。健常者が障害者に対して偏見を持っていることを自然と伝えていると思う。バリアフリーはこれまで階段などハード面のことだと思っていたが、本当は心が大事だということを改めて勉強している。

○　先日熊本で２５人程度の若い人たちと話す機会があった。「バリバラ」について見たことがあるか聞くと、７～８人の手が挙がり、想像より多くの人が「バリバラ」に関心を持っていると実感した。

（ＮＨＫ側）

「バリバラ」は総合テレビで放送しようという試みがある。以前「バリバラ」の企画の１つ、「ココがズレてる健常者～障害者

１００人がモノ申す～」（総合 12月21日(水) 後10:30～11:15）を総合テレビで放送し、今後も続けていくつもりだ。障害者も健常者も意見が言い合える場の創出を、2020年までにはテレビの中で実現したいと思っている。

○　４月１９日(水)のびじゅチューン！「樹花鳥獣図屏風（びょうぶ）事件」を見た。わずか５分の番組だが、非常に興味を引かれ、その後何度も見た。

○　４月１９日(水)のふるカフェ系　ハルさんの休日「神奈川・中央林間　米軍ハウス！謎の和洋折衷」は、大きな特徴はなかったと思うが、番組構成もナレーションも最後までゆったりとしていた。なんとなく爽やかで気持ちよく感じながら見ていると、ザ・スパイダースの「なんとなくなんとなく」が流れ、制作者の遊び心を感じてうれしくなった。総合でも民放でも放送しないような雰囲気で、少し遊び心もあるところにＥテレらしさを感じた。Ｅテレがより好きになった番組だった。

○　３月２４日(金)の世界はＴｏｋｙｏをめざす「五輪の安全を確保せよ～東京マラソン警備の舞台裏～」（ＢＳ１　後9:00～9:49）を見た。テロに備えてさまざまな取り組みをしていることが分かった。オリンピックで多くの人が集まることが想定されるので、安全を守ることの重要性を改めて感じた。

○　1964年の東京オリンピック後の日本の変遷を踏まえ、2020年の東京オリンピック後の、日本の方向性を提示するような番組制作の議論がされているか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

オリンピックは単にスポーツの祭典ではなく、経済や社会の仕組みが大きく変わるきっかけでもある。オリンピック後に社会がどう変わるか、という視点を含めて番組制作を行おうとする動きはある。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫではオリンピックとパラリンピックを一つのものとして捉えている。先ほど「バリバラ」の話が出たが、一般の番組にはまだ障害を持った方はあまり出演していないので、総合テレビに

も障害者に出ていただこうとしている。社会全体のバリアフリーを進めていくために、ＮＨＫとしてどのような働きかけができるか常々議論をしている。

○　４月９日(日)のＢＳ１スペシャル「ハミルトン　大ヒットミュージカルが問うアメリカ」を見た。ミュージカルを鑑賞した副大統領就任前のマイク・ペンス氏が、ミュージカルの出演者から政治的なメッセージを投げかけられたシーンでは、アメリカ社会が分断されていることがよくわかった。アメリカは多様な社会だからこそ自分たちの意見を明確にすることはわかるが、分断はいろいろなところで生じていることを知り、最後まで興味深く見た。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局